
千の雨を越えて・・・

紅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の雨を越えて・・・

【Nコード】

N9731R

【作者名】

紅雷

【あらすじ】

これは全てを失い、新たな全てを手に入れたもう一人の死神の少女の物語。

少女は 歪んだ正義 を殺すため、少年は守りたいものを全て守るため、果てしない空の境界を駆ける。

・・・さあ、少年少女よ。相克する螺旋の中で新たな未来を紡げ。

ネギとガトウが原作前に活躍する外伝（<http://ncode.syosetu.com/n0823w/>）も宜しくお願いします。

ブローグ〜長谷川千雨が死んだ日〜（前書き）

実は原案はもしも千雨の母が橙子だったらという転生ものだったりする。

でも、とんでも設定なので却下。

だったらこうだ！！という感じになったらこんな感じに書けました。

駄文ですが読んでいただければ幸いです。

ブローグー長谷川千雨が死んだ日

とある少女の話をしよう。

彼女はどこにでもいる普通の少女だった。

パソコンに興味を持ち、好きなアニメや漫画のコスプレをする。

それが彼女の生きがいだった。

だが、彼女の笑顔を奪った存在がいた。

本来なら生徒を守る機関であるはずなのに、彼女を絶望に貶めたその存在は……

麻帆良学園。

そこで彼女は歪められた。

自身が信じた常識が異常とみなされ、逆に周りの異常が常識となる、そんな学園で。

ただ彼女は耐え続けた。

周りが自分を異常者とみなし、自身をいじめようともいつか理解してくれる人が現れると信じて。

ただひたすらに。

しかし、世界は残酷だった。

実の親までも彼女を異常者とみなし、病院に連れていこうとまでしたのだ。

だから、彼女は決意した。

この歪んだ世界から逃れるために、ただ一人生きていこうと。

その為にどこか遠くへ逃れようと。

そしてその日、長谷川千雨は行方不明になった。

- - - - -

彼女はひたすら走り続けた。

生きるために必要なものは全て持って。

目指すは東京。

ただでさえ人の多い都市だ、追っ手から身を隠すのにはちょうど良い。

それにバブル崩壊後に建設が中止になったビル群だってまだ残っているという。

住処としては山での野宿よりかは遥かに安全だといえよう。

……ただし、誰にも気づかれないように生活しなければいけないが。

下手に見つかって身元を特定されれば一貫の終わりだ。

冷静に彼女は考え、目的地である観布子市へと向かう。

一人の死神と出会い、『長谷川千雨』が死ぬことになるとは知らずに。

運命の糸が螺旋に絡まりあい、新たな一つの物語を紡ぎ始めるとも知らずに。

- - - - -

side 式&幹也

「アイスが食べたいなら、僕がすぐにでも走って買ってくるのに・
・・・・・」

片目が髪で隠れてしまっている青年が着物にブルゾンという奇妙な組み合わせであるがどこか格好いい服装である黒髪の少女に言う。

「別にいいじゃないか、オレは幹也と一緒にいきたいんだからさ。」

対して、少女は少しふてくされながらも頬をほのかに赤らめて言った。

少女の名前は両儀式。

交通事故によって2年間の昏睡から復活し、モノの「死」を見る能力「直死の魔眼」を用いて数多の異能者たちと渡り合った少女である。

そして、退魔四家の一つ「両儀」の次期当主という一面もある。

彼女に並び立つは黒桐幹也。

高校時代の式の同級生で、彼女をずっと見守ってきた男である。

彼女に関わったために何度か負傷はしたが、今こうやってピンピンしている。

人形師・蒼崎橙子の事務所「伽藍の堂」の従業員で「物を探す」という才能にとてつもなく優れている。

そんな二人は現在、何をしているかといえば・・・・・・・・一緒に腕を組んで 買い物をしている。

式の「アイスが食べたい」発言によって、最近大分良くなった足でコンビニへと向かおうとした幹也に続けざまに「一緒に行く」という発言をしたためにこのような状況に至るわけだ。

「まあいいけどさ・・・・・・・・」

式の最近のデレデレぶりを見てきた幹也はやれやれとその広い心で行為を許す。

ちなみに式はあの事件から少しした後、突然夫に尽くす妻の如く、食事を幹也にあぐんしたりするなど変貌を遂げていた。

まるで、『幹也の答えは聞いてない!!』とでも言うように。

「ん？あれ・・・・・・・・？」

辺りは既に暗くなっており、時刻は午後9時をまわっているのに視線の先、つまりは道路を挟んだ向こう側には重たそうなスポーツバツクを二つ背負う少女がいた。

少女の視線は下を向いており、顔には陰りが見える。

小学6年生ぐらいだろうか。

「どうした幹也？」

「いや、あの子、こんな時間に一人でいるんだろって思ってた」

少女に気づかれないように式に伝える。

「・・・・・・・・・・確かにおかしいな。それにあれだけの荷物なのに保護者が持たないっておかしい。その保護者すらいなくていうのも変だ。」

「だよね・・・・・・・・・・もしかして家出かな？」

考えられる推測で少女の状況を冷静に分析する。

だが、その分析を止めざる終えない事態が起こった。

突然、一台の乗用車が横断歩道を渡ろうとした少女に向かってきたのだ。

それも一向に止まる気配がない。

「・・・・・・・・・・ッ！？式！！」

「わかってる！！・・・・・・・・・・くそっ、この距離じゃ間に合うかどうか！！」

慌てて式が飛び出しても、少女との距離がありすぎた。

高い床から飛び降りても軽傷で済むほど頑丈な体を持つ式でさえも、

駆けつけるのがやっとなほど。

幹也も可能な限り走り出すが……………

次の瞬間、少女は……………撥ねられた。

「……………あ……………ああ。」

もっと早く気づいていたのなら撥ねられることはなかったのかもしれない。

彼らの目の前には撥ね飛ばされた荷物の上に横たわっている少女がいる。

彼女を撥ねた車は逃亡、俗に言う轢き逃げだった。

幹也は自分にできる限りの応急処置を始める。

「出血は……………ない！！意識は……………おい！！君！！
しっかりするんだっ！！」

「幹也っ！！今、救急車を呼んだっ！！あと、10分以内に来るっ！！」

ついでに、搬送先が式の家縁がある……つまり、自分が以前お世話になった病院であることを式が教えてくれた。

「しっかり！！聞こえるかい！？君！！」

「……………つと……………ほ……………され……………」

何かを少女は呟く。

思わず、彼女の口に耳を近づける。

そして聞き取れたのは……………

『やっと、解放されるんだ……………』

「……………え？」

まるで、死を受け入れたかのような、弱々しい眩きだった。

s i d e o u t

そして、その日。

少女が轢き逃げされたというニュースはなかった。

プロローグ 長谷川千雨が死んだ日 (後書き)

実はこの世界、封印指定がない代わりに、弟子にしてくれたの研究させてくれたという奴らがいるため橙子は身を隠している。

ようはほぼ同じ。

基本的に橙子さんマジばねえ小説。

千雨の義理の母やります。

次回、プロローグ 蒼崎千雨、もしくは蒼裂千雨が生まれた日

少女は新たな家族を手に入れる。

過去を殺して、未来を生かせ。

ブローグ、蒼崎千雨、もしくは蒼裂千雨が生まれた日、（前書き）

色々設定が無理矢理かもしれませんが、どうぞ！！

ブローグ、蒼崎千雨、もしくは蒼裂千雨が生まれた日、

side 橙子

「・・・・・・・・・・やれやれ、仕事帰りだというのに突然呼び出すとはどうしたんだ黒桐。」

しかも、呼び出された場所が病院である。

橙に近いくすんだ赤毛のポニーテールの女性は不満そうに幹也に訊ねる。

「そう言わないでくださいよ、橙子さん。・・・・・・・・こっちはこっちで大変だったんですから。」

とりあえず、ロビーにあるソファに二人は腰掛ける。

「で、何があった？式が妊娠でもしたか？」

「・・・・・・・・そんなおめでたいニュースじゃないですよ。」

黒桐にしては珍しく睨みつけるような視線を放つ。

そして彼は懐からある一枚の封筒を取り出した。

そこに書かれていたのは「遺書」。

「・・・・・・・・さっき、僕らの目の前で女の子が車に轢かれた

んです。」

ポツリポツリと語りだす黒桐。

「その子はどうやら家出していたようで、大きなバックを持っていた。」「

「幸い、そのバックがクッションになったおかげで外傷はなかったんです。」「

「でも、助けようとしていた時に聞いたんです。」「

「『やっと、解放されるんだ・・・・・・・・・・。』って・・・・・・・・・・。」「

その言葉に疑問を持った黒桐はまず、その少女の身元を確認するためにバックを調べたという。

そこには生活用品の他に「遺書」が入っていたらしい。

彼女がなぜ家出をしたのか、今後自分はどうか対応すればいいのかを判断するためにも「遺書」を読むことを決意する。

そして、そこに書かれていたのは・・・・・・・・・・

「学校の異常性といじめ、親との関係悪化についてでした。」「

そう話を区切ると、橙子に「遺書」を手渡す。

「いじめや親との関係悪化はわかるが・・・・・・・・・・『学校の異

常性』か。」

黒桐の説明は簡潔かつ正確に現状を伝えたもの。

よって、詳しく現状を理解するためにも橙子は「遺書」を読み始める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

短いような長いような時間の中で彼女は一枚一枚読み進めていく。

聞こえるのは時計の針の音と紙の擦れる音だけ。

そして、ある程度読み終わるとおもむろに橙子は口を開く。

「・・・・・・・・・・麻帆良学園か。なるほど、そういうことか。」

「橙子さん、何かわかったんですか!？」

「ああ、大体な。」

ここで説明するのなんだ、と言って二人は少女の病室にいる式のもとへ移動する。

彼らは知ることになる、少女を自殺にまで追い込んだその原因を。

s i d e o u t

- - - - -

少女は意識は回復していないものの、呼吸は安定しているという。

少なくとも、一週間以内には目覚めるそうだ。

「で、トーコ。話してくれるんだろうな、こいつがこうなった訳ってやつを。」

「ああ、説明してやる。………って、式にしては珍しいな。そんなに気になるのか？」

「………こいつからは何かオレと同じ感じがする。」

「………そうか。なら、記憶を視るついでに調べておいてやる。」

話を戻すぞ、と言うと橙子は麻帆良学園の実態について語り始める。

「単刀直入に言えば、麻帆良学園は大勢の『魔法使い』の連中によって創られた学園だ。」

「え、ちょ、ちょっと待ってくださいっ！！魔法使って、数人し

かないんじゃないんですか!？」

以前聞いた話と矛盾した橙子の発言に驚く幹也。

それもそのはず、橙子は<数人>ではなく<大勢>と発言したのだから。

「その通り、『本当の魔法使い』は数人しかない。私が今、『魔法使い』と言っている連中はこちらから見れば『精霊魔術師』だ。」

「……………どういことですか？」

つまり、橙子が言っていることを訳すところなる。

・かつては彼ら『魔法使い』もこちら側と同じく魔術師と呼ばれていた。

・そして、遠い昔に精霊魔術が独自の発展を遂げた。

・そこから根源を目指す<魔術師>と偉大な魔法使いを目指す<魔法使い>が分かれたという。

・彼らは魔術回路を用いず、始動キーなるものを決めて魔法発動体を使用して魔力を行使する。

「まあ、簡単に分けると私たちが<オカルト>的魔術ならば連中は<ファンタジー>的魔術とみてもらっていい。」

「な、なるほど……………」

「ちなみにだが、連中は電子精霊というものを編み出しているから
<現代精霊魔術師>なんて呼ばれていたりもする。長ったらしいから私は<魔法使い>と呼んでいるがな。」

再び話がそれてしまったので、橙子は咳払いをする。

「それはともかく、少女がいた麻帆良は表向きは学園都市だが裏向きは関東魔法協会という肩書きを持っている。」

「魔術協会みたいなものですか？」

「そうだな。そして、京都には関西呪術協会というのもある。こちらには有名な陰陽師とか退魔師などが属している。」

「式の家はどちらにも属してないのかい？」

「両儀は独立した退魔の一族だから、何処にも属していない。特に呪術協会とは干渉ってことになってるらしいからな。」

「……続けるぞ？今挙げた組織は対立していてな、関西側が関東側に攻撃を仕掛けているのが現状だ。」

彼らは学園を経営しているため、生徒に気づかれないように魔法を行使して防衛に当たらねばならない。

だが、ただ気をつけるだけではいつかはバレてしまう。

それに麻帆良には世界樹というギネスに載ってもおかしくない大樹が存在しているらしい。

それが注目されないためにも彼らは魔法という異常を守るために『常識』を歪めた。

たとえば、オリンピック選手並みかそれ以上の速さで走ろうとも、機械技術がどれだけ発展していても、留学生が多すぎても、それらを異常と思わないようにしてしまったのだ。

結果、彼らの＜異常＞は＜常識＞となる。

「でも、それならなぜこの子は彼らの常識が効かなかったんでしょうか？」

「簡単な話だ、この娘は人一倍抗魔力が強いから認識障害魔法なんてレジストしてしまったんだろう。故に、外の＜常識＞を保ったまま麻帆良の＜常識＞の中に入る。」

「あつ、そしたらー！！」

「誰にも理解されないいじめられっ子の出来上がりというわけさ。」

だとすれば、この子が家出だけでなく自殺を受け入れてしまうのも頷ける。

幼い子供に精神的ダメージは痛手だ。

「それで、黒桐。この娘の親には……………」

「連絡していません、『遺書』のこともありましたから……………
・・・やっぱり、連絡した方がいいですか？」

「いや、いい。返って余計に悪化するだけだ。」

式の意見のこともあるしな、と付け加えると少女に近寄る。

もちろん、記憶を視るためだ。

そして、式の気になったという点を調べるためでもある。

橙子は少女の頭に左手をかざすと記憶を読み取り始めた。

そして再生されるは少女から笑顔が消え失せ、悲しみに染まっ
ていく記憶。

周りに異常を訴えるものの、理解されずにどんどん孤立していく少女。

実の親からも異常として扱われ、裏切られる始末。

覚悟した逃亡、覚悟した死。

彼女の心は闇に染まってしまっていた。

だが、「何か」が彼女の中に存在していた。

周りは黒い「線」と「点」に囲まれているその中央に、その「何か」は存在していた。

(これは・・・・・・・・・・剣?)

その「何か」は青空のように透き通った色をしていて大きく、そして長くて細かった。

形としては包丁に近いが、西洋的イメージを思わせていた。

不意に、声が聞こえる。

『私は・・・・・・・・異常なんかじゃない。』

『間違っているのはみんななんだ、私じゃない!!』

『誰か、私を信じてよお!!』

それは紛れもなく少女の「思い」。

そして、「叫び」だった。

橙子の視界は現実へと呼び戻される。

- - - - -

「・・・・・・・・・・どうでしたか、橙子さん。」

少女に手を当てたまま動かない橙子を心配した幹也は恐る恐る声をかける。

彼の声が届いたかのように、橙子は閉じていた目を開いた。

そして、あごに指を当てて考える姿勢をとる。

「・・・・・・・・・・トーコ、何かわかったか？」

「・・・・・・・・・・ああ、式が言っていた意味が良くわかったよ。おそらくだが、この娘も『直死の魔眼』を持ってしまったようだ。」

「ええっ!？」

「・・・・・・・・・・やっぱりな。」

式は最初から予期していたように頷く。

彼女は千雨から感じた「死」の気配が魔眼によるものだと考えていたのだ。

しかも、自身が魔眼を手に入れた状況と少しばかり似通っていたから余計に。

「それと黒桐、『この男』の行方を捜してほしいのだが・・・・・・・・・・」

渡されたメモには複雑な形をした剣が描かれ、その下に『西條拓巳』と書かれていた。

「わ、わかりました．．．．．けど、何ですかこの絵？」

「この娘を『視た』時に視えた物だよ。そして、その男ならその正体を知っているはずだ。」

「じゃあ、今すぐにも行ってきますー!!」

「いや、待て黒桐。」

病室のドアを開きかけていた黒桐を橙子が引き止める。

「何ですか今度は!？」

勢いあまってこけてしまった黒桐は、ヤケクソ気味に叫ぶ。

だが彼は次の瞬間思いもよらぬ言葉を耳にする。

「ついでに養子縁組の準備をしておいてくれ。」

「．．．．．へ？」

「養子縁組の準備をしておいてくれと言ったんだ、もう行っていないぞ。」

橙子はさっさと行けと手で促す。

幹也は啞然としながらも病室を出ることにした。

．．．．．ちなみに式も呆然としていたりする。

- - - - -

side 幹也

「．．．．．って、いような事があつたんですよ。」

「ハハハ．．．．．橙子さんらしいね。」

『西條拓巳』の搜索だけでなく、千雨の養子縁組の手続きまでさせられることになった黒桐は素早く必要な資料をまとめ上げると、彼の搜索に奔走した。

一応、橙子が居そうな場所をリストアップしておいてくれたおかげでしらみつぶしに当たるだけで済んだのだが。

現在彼らは都市からそう遠くない田舎の村にある家に居た、つまりは拓巳の家である。

『西條拓巳』、彼は脳科学者である。

橙子に言わせれば、表に出ていれば有名になっ
ていてもおかしくな
いほど天才だそうだ。

しかし、本人曰く『ボクの研究を公にしてしまえば、大勢の人が不
幸になる』らしい。

だから、こうして都会から離れた田舎に身を隠して研究にいそし
んでいる。

「それで、『長谷川千雨』君のことだったね。」

「あ、はいそうでしたね………あ、あれ？僕、名前言い
ましたか？」

無論、彼は言っ
てはいない。

それは紛れもない事実である。

ならなぜ、『西條拓巳』は名前を知ることが出来たのだろうか？

「ああ、ごめんごめん。君の思考を盗撮して知ったんだよ。」

「………思考を盗撮ですか？」

「うん、ボクのようにく
ギガロマニアックス」
が使える能力でね、
思考や記憶を自身の妄想として読み取る能力なんだ。」

そして、拓巳は語る。

<ギガロマニアックス>とは、自分の妄想を現実に変えたり、他人の妄想を見ることが出来る能力者のことを言うらしい。

妄想を周囲の人間のデッドスポット、つまり視覚の死角になる部分に落とし込み、周囲共通認識にさせることで現実化することが<リアルブート>。

「無いはずである物を共通認識として量子力学的に現実化するから、最終的に本当は存在しないはずの物でも本物になってしまっんだ。」

「それって、なんでも創造できちゃうってことじゃないですか!！」

「……………ただし、第三者立会いの下でしか使えないんだけどね。」

ギガロマニアックスたちが所持する<妄想の剣>、通称<ディソード>。

それは、「あらゆるリアルブートのショートカット」であり、ディラックの海に干渉するための端末である。

「じゃあ、この絵の剣がディソードなんですか？」

「うん、これが『長谷川千雨』君のディソードだね。」

「ということは彼女は……………」

「ギガロマニアックスだろうね、多分。」

彼はこうも付け加えた。

おそろくだが、彼女の抗魔力が強いのも生まれつきなのもあるが『自分が信じているのが常識』と半覚醒状態で妄想……いや、認識していたからだという。

強いて言うなら、自己暗示型リアルブートというべきか。

「ギガロマニアックスはね、想像を絶する程の肉体的もしくは精神的苦痛に耐え抜いて自分のデイスードを見つけなければならない。それ故にギガロマニアックスは、心に大きな傷を負っているんだ。」

ならば、その精神的苦痛には麻帆良学園での生活が当てはまるだろう。そう、幹也は考える。

彼女の心を僕らは癒さなければ、彼女は完全に壊れてしまう。

だから、橙子は養子縁組を言ったのかと理解した。

「まあ、それもあるだろうね。でも、本当にそうさせたのは彼女の冷酷な部分だと思う。」

「え？どうしてそう思うんです？」

「彼女の冷酷な部分はね、優しさの裏返しなんだよ。」

確かに言われてみればそう思える。

眼鏡を外した彼女は途端に冷徹で厳しくなるけれど、自分達の危機を何度も助けてくれた。

鮮花のように弟子ではないのに、いつも。

最後に『君は君で他者を包み込むように優しくする人間だね。』と、
幹也は拓巳に告げられ帰路に着いた。

s i d e o u t

- - - - -

一週間後、『長谷川千雨』だった少女は目覚めた。

少女は新たな名を手に入れ、新たな家族ができた事に泣いた。

そう、これが『蒼崎千雨』と仕事人『蒼裂千雨』が生まれた瞬間だった。

プロローグ 蒼崎千雨、もしくは蒼裂千雨が生まれた日 (後書き)

ちなみに、拓巳はカオスヘッドで死んだ本物の拓巳がネギま世界に転生という設定です。

次回、プロローグ 少年が守る強さを知った時

少年は己が何をすべきか、自らの手で選んだ。

ブローグ少年が守る強さを知った時（前書き）

自分なりに反省しました。

あえて言おう、私は未熟だったと！！

駄文なのはすいません、どうぞ。

ブローグ少年が守る強さを知った時

——少年は思考する、英雄とは何か。

才知や武勇などがすぐれ、普通の人にはできないような良いことをする人。別称は「ヒーロー」。—wikipediaより

少年は英雄と呼ばれる父、サウザンドマスターについて思考する。父は「千の呪文の男」と呼ばれる最強の魔法使いであり、20年ほど前の戦いにおいて「完全なる世界」コスモエンテレケイア一派、さらにその背後に存在していた「造物主」ライフメーカーらを倒し文字通り世界を救った英雄だと聞いている。そして名もわからぬ誰かと婚約し自分、「ネギ・スプリングフィールド」を生んだ。

そして、現在行方不明である。

公式には数年前に死亡したとされるがそんなわけはない。少年は4歳の時に確かに見た、大量の悪魔達に襲撃された村に駆けつけ戦う父を。現に彼は父から魔法発動体である杖を受け取っている。

——少年は思考する、なぜ村が襲われたかを。

幼かった自分は当時、自分がピンチになれば父が助けに来てくれるなんて考えていた。だから、その罰が下ったのだと考えていた。

だが、今思い返せばそれは違ったのだ。

英雄には必ず相対する「敵」がいる、故にその家族は危険にさらさ

れる。そんな当たり前の公式を少年は知った、知ってしまった。かつて、狂ったように勉強に明け暮れた時にふと読んだ小説によって

——少年は思考する、なぜ家族と離れ離れにならなければなら
ないのだろうか。

父は仕方ないとして、なぜ母親までもが自分の傍に居ないのだろうか？自分は危険が及ばぬように村に預けられたと聞く。なら、母親も一緒に居るべきなのではないだろうか？

少年は調べる、大戦中に父に関わったとされる女性を。当時父は連合側で戦っていたらしいが、ある日を境に彼は中立勢力、つまり何処にも属さなくなったという。

なぜなら、どちらの軍もある組織「完全なる世界」コスモエンテレケイアによって戦わされていたことを知ったからだ。ネギは父がこの事実を知った時期に注目する。自分の母親は必ず、大戦時に父に関係していたと推測したからだ。

そこに3人の女性が浮上する。

一人目はテオドラ第三皇女。父達の協力者として活躍していた人物である。

だが、ネギは彼女が母親である可能性を即座に捨てた。なぜなら、ヘラス族の遺伝は受け継いでいないし、地位の高い彼女の下の方が安全であるのにもかかわらず自分がそこに居ないからである。

二人目はセラス総長。大戦時にはアリアドネー魔法騎士団員のリーダーであり、父たちと共に戦った人物である。

彼女も動揺に母親でないとネギは判断する。理由はテオドラと同様だ。

そして3人目は、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。ウェスペルタティア王国最後の王女とされる人物である。

彼女も地位は高く、二人とは違い角は生えてはいないので可能性としては大だと判断する。それに自身の膨大な魔力量がただ単に父親譲りだとは考えられなかったのだ。調査によれば、ウェスペルタティア王国には代々「王家の魔力」というものが存在するらしい、自分がそれを受け継いでいるとすれば自身の魔力量にも納得がいく。

そして、彼女は「災厄の魔女」または「災厄の女王」という名を持ち、処刑されたという。

実行したのはMM元老院。——少年はさらに思考する、推測する、構築する。バラバラになったパズルを可能な限りはめ合わせることで、未完成でも良いから大体の完成図を作り出す。

——少年はやがて結論を出す。

母親はアリカ・アナルキア・エンテオフュシアであり、村を襲撃した真犯人はMM元老院であると。

処刑したはずの人間が生きている証拠である自身と一緒にいるかもしれない母を殺すために襲撃したと考えれば上手く話が繋がる。そ

れに父を憎むものがあるならば母を憎む者もまた存在する。

——少年は思考する、これから自身がどうすべきなのかを。

襲撃後に心のどこかで憎んでいた悪魔達を殲滅する魔法について調べていた時に少年は気づいた。今自分がやらなければならないのは、残された者たちを守ることだと。

少年は知った、憎しみを糧にして力を得るのではなく、誰かを守るために力を得るのが正しいと。

——少年は鍛える、自身に足りない精神力と体術を。

大切なモノを守るために少年は子供でいるわけにはいかなかった。大人並みの思考を持たなければならぬと考えたのだ。

そして、魔法を行使するにあたって発生するデメリットについて研究する。『魔法使い』の戦闘スタイルは基本的に後衛だ、故に従者に前衛を任せることになる。だがこれは少年の意に反した戦闘スタイルだ。次にもう一つの戦闘スタイルである『魔法剣士』についてだ。これは自身も魔力で自分を強化して従者と共に前衛をすることになる、速さに定評がある戦い方だそうだ。

——少年は自身の心を変えた「日本」の剣術に目を付ける。

日本には「武士道」というものが存在するという。時代が移り変わるにつれてその精神を受け継ぐものは少なくなっていたが、それ

でも受け継ぎ続けている者たちがいるという。

——少年は武士道の精神について調べる。

『義』それは、正義・正しい道のこと。『勇』それは、正しいことをすること。『仁』それは、「武士の情け」と言われているように悪に情けをかけること。『礼』それは、低くなり自分を主張しないこと。

少年は、何が正しくて何が正しくないかを判断する必要があると考えた。一般に信じられていることが、果たして正しい判断なのかどうかに疑問を生じたからだ。

試しに有名な「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル」について考えてみる。

「闇の福音」^{ダーク・エヴァンジェル}、「人形使い（ドール・マスター）」、「不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）」^{あしきおこずれ}、「悪しき音信」^{わらへすがたのやみのまおう}、「禍音の使徒」^{かいんのしと}、「童姿の闇の魔王」など、見るからに「悪」だと決め付けるような異名をもつ彼女だが、果たして彼女は本当に「悪」なのだろうか？「女、子供は殺さない」という彼女は。

世間が「悪」と定めたものを鵜呑みにしてはいけない、そうMM元老院の一件で悟ったネギは彼女は「悪」ではないと判断する。理由は「本当の悪」はただ殺戮だけを楽しむような人間だと考えたからだ。そしてネギは考えた、「女、子供は殺さない」と彼女が考えるのは自身と同じようになってほしくないからだ。

真祖の吸血鬼には特殊な儀式の下でなることができるというが、自ら望んでなるような人間がいるだろうか？答えは否だ、彼女はそう

「させられた」のだ。

——少年は独自に体術（剣術）の取得を開始する。

自分の思いを貫くためにも、ただどこかの流派の剣術を習得するのは良くないと考えた。それ以前に自分に合うかどうか分からない。参考にするだけ参考にし、何とか試行錯誤で剣術を開発した。

——少年は止まらない、己の師を見つけるために。

偉大な魔法使いを定めるMM元老院が信じられなくなった今、頼れるのは自分以上の思考力を持ち優秀な人間だと考えた。何せ周りは自分を「英雄の息子」、「二代目サウザンドマスター」などとして認識していない。全ての人間がそうではないが、頼れるのは数人だけである。その一人である、メルディアナ魔法学校校長にネギは相談することにした。

それが少年と少女を引き合わせる　始まり　であった。

side 橙子

『長谷川千雨』が『蒼崎千雨』となってから早数ヶ月、橙子や式の指導の下で千雨は着々と自身の力を上手く扱えるようになっていった。今では姉弟子である鮮花とは姉妹のように仲が良い。

「……………しかし、今思えば橙子さんも思い切ったことをしたわね。」

「そうですね……………目を覚ましたらいきなり変なのが視えて家族になる気はないかって言う人がいたんですから。」

意識を取り戻した千雨は自身を助けてくれた男女とその上司……………今は母親である橙子に初めて会ったときの事を思い出す。理解されずにただ一人泣いていた少女は、初めて理解してくれた人たちに出会って救われたのか号泣してしまった。

「今ではお似合いの親子だもんね、羨ましいなあ。」

「あははははは……………」

式と幹也に子供が出来たことがつい最近発覚してから、鮮花は千雨によく愚痴るようになっていた。いつも聞かされている千雨にとっ

てはたまったものではない。

ちなみにだが、千雨は事務所からそう遠くない小学校へと転入した。元の両親とのいざこざは橙子が何とかしてくれたようで、安心して新しい生活を楽しんでいる。……。まあ、もともと橙子との約束で中学は麻帆良を受験することになったが。

「ん？千雨、もう学校が終わったのか。」

早いな、と付け加えて帰ってきたのは蒼崎橙子こと現千雨の母である。

「あ、母さんお帰り。」

「お帰りなさい、橙子さん。」

「鮮花もいたのか、ただいま。」

そう言いながらドアを閉めると、デスクにある椅子に背もたれに寄りかかるようにして腰を下ろした。そしてその手には束になった資料が握られており、「うーん……」と唸りながらじっと見つめるようにしている。

「何かあったのか、母さん？」

「まあね、ちょっと知り合いから頼まれ事をされてね……………」
「。」

眼鏡をかけたことで、橙子は冷徹な女性から優しいお姉さんの女性に変貌を遂げる。俗に言う二重人格のようなもので、千雨は初めて

これを見た時にホントに同一人物かと疑ったほどだ。

「実はイギリスに暫く行かなければならないかもしれないの。」

「え！？まさか、魔術協会に行くんですか！？」

鮮花が身を乗り出して尋ねる。

「いいえ、行くのはウェールズなのよ。」

「ウェールズって・・・もしかして、玄霧皐月関連ですか？」

かつて、鮮花が関わった礼園女学園での事件が思い起こされるが、その予想は大きく裏切られる。

「残念ながら違うわ・・・『この子』の先生をやってほしいって依頼されたのよ。」

二人に手渡されたのは赤毛の少年の写真が貼られた履歴書のようなものだった。そして、二人はその少年の名を読み上げる。

「「ネギ・スプリングフィールド・・・？」」

何で日本の薬味野菜が名前なのかわからないが、どうやら橙子が先生をする・・・つまりは弟子にするらしい。それは即ち彼女たちの弟子になるというわけで・・・

「よく引き受けましたね、弟子にするなんて・・・」

「最初は嫌だって言っただわよ？・・・でもね、話を聞いてい

るうちに興味を持ったのよ。」

何でもその少年は『魔法使い』の中でも有名な人間の息子らしく、4歳の時には命を狙われて奇跡的に生還したという。それから『魔法使い』の学校に入学したが、基本的魔法は全て覚えるという天才性を発揮してしまった為に友達がいらないらしい。また、本人曰く『自分は未熟者だから、もっと鍛えたい。』と言って独自に剣術の研究までしているそうだ。

「で、今度は『自分を色眼鏡で見ない、思考力のある厳しい師の下で修行したい。』と言ったわけよ……………」

「9歳でそこまで考えるなんて……………」

「あ、本当は7歳よ？」

「え？どういうこと？」

「浦島太郎みたいなことができるアイテムがあるのよ、彼らには。」

そこで、少年は2年を消費してまで剣術を完成させたという。どれだけ熱心なんだ、少年……………尊敬すべきなのか呆れるべきなのかわからないまま話は進み、暫くの間だけ橙子は家に帰ってこなかった。

その後少年と少女は出会い、因縁のある地『麻帆良学園』で共に戦っていく。

少年は守る強さを知っていくために、少女は歪んだ正義を殺すために。

ブローグ少年が守る強さを知った時（後書き）

ネギが天才少年ぶりをフルに発揮したようです。

そして、千雨は原作をブレイクしまくる。

次回はたぶん主人公設定&世界観設定。

だ、大丈夫だっ！！設定はちゃんと考えてある！！

主人公設定&世界観設定 「7/10 外伝設定追加及び現時点での能力詳細、

無理矢理な設定かもしれない……

それは承知です。

でも、読んでいただければ幸いです。

世界観設定

基本的にはネギま世界であるが、型月の登場人物などが存在する。
ネギまの魔法は遙か昔に分岐した「精霊魔術」として解釈。

世界には<魔術師>（本当の魔法使いも含む）と<魔法使い>という二種類の存在がいる。

<魔術師>は<魔法使い>の存在を知っており、中には乗り換える一族もある。

対して、<魔法使い>は<魔術師>の存在をごく僅かな者だけが知っている状態。

なお、<魔術師>側にはかつては封印指定が存在したが廃止されている。

なので、弟子にしてくれたの研究させてくれたという輩が存在するだけであり、橙子などはそれから身を隠している。代行者は警察みたいなもので、魔術協会やアトラス院や埋葬機関は水面下でつながっている。俗にいう三権分立のような体制をとっている。古いの守つていこうよって感じである。本来ならば封印指定の人も常識人な^{リーダー}ら指揮官的立場にあるわけです。

ちなみにエヴァは魔法使いサイドの研究でなった吸血鬼なので変則的死徒か空想具現化なしの真祖と考えてもいい。

主人公設定

名前 蒼崎千雨

性別 女

魔術回路 43本

かつては長谷川千雨であった少女で、麻帆良での異常性に気づいていたためにいじめられ、親との不仲に陥り家出した。その後、事故に遭ったが幹也や式のおかげで一命を取り留め、ギガロマニアックス、異常特化型の直死の魔眼に覚醒し橙子に引き取られることになった。原作と同じくネットアイドルやハッカーは続いている。よく食べるのはアイスモナカのジャンボ君。タメ口は親密な人間にしか使わず、基本は丁寧語である。

（なお、千雨は魔術協会や本当の魔法使いからの依頼で、スパイをすることになりました。これは宝石翁が魔法世界の消滅の恐れを察知したことから、関東魔法協会がどれだけ現状を把握しているか調べるためです。さすがに大人が調べると警戒されるので、一定の能力を持つ子供が潜入することになり、千雨が麻帆良に詳しいこともあって選ばれました。流石の千雨も世界の消滅によって大勢が死ぬことになるのは抵抗があるので、引き受けることにしたのです。多少の警戒はされますがそれは承知の上で行動しています。）

> i 2 3 6 2 3 — 3 0 0 6 <

能力 ギガロマニアックスとしての能力、直死の魔眼、橙子直伝魔術、両儀流剣術（見習い）、??????

ギガロマニアックス

妄想を現実に変える力を持つ者を指す。語源は「誇大妄想狂」という意味を持つ「メガロマニアックス」である。自分の妄想を現実に変えたり、他人の妄想を見ることができる。

デイスード

ギガロマニアックスたちが所持する「妄想の剣」。「あらゆるリアルブートのショートカット」であり、デイルックの海に干渉するための端末。リアルブートしない限りはまだただの妄想である為、他のギガロマニアックスや一般人にも触れる事はできず、いかなる物体も透過する。また、使用しない時はデイルックの海に収納して必要な時に引き抜くことができる。通常は青く透き通っているが、暴走時は黒、真剣化した時には紅く発光する。直接的斬り合いには向かない。なお、千雨のデイスードは蒼井セナの持つデイスードを片刃したもの。

リアルブート

ギガロマニアックス個人が考えている事（妄想）を、周囲の人間たちに認識できる現象（現実）にする能力。また、デイスード自体を実体化させることもある。自身の妄想を周囲の人間のデッドスポット（視覚の死角になる箇所）に落とし込み、個人の妄想が周囲共通認識になることで現実化する。本来無いはずの物を共通認識として量子力学的に現実化するため、「無い物が有るように見える」だけにはならず、最終的に本当は存在しないはずの物でも本物になる。とは言え視覚から来る力のため、ある人間（物体）を、第三者が別

の存在に見えるようにするという、幻覚、催眠術めいた応用もある。強力な力を持つ者がこれを応用すれば人間を作り出すことも可能な万能の能力に思えるが、第三者に対して認識するよう働きかけなければならぬので一人では使用できないこと、たとえば使用できたとしても怪我の治療などには使えない（脳が痛みを認識してしまう為）事など弱点もある。また、負の妄想が作用しているので無闇に使えばやがては使用者と現実とのズレを起こし、「存在の自己崩壊」を招く。

思考盗撮

他者（ギガロマニアックス、一般人を含む）の思考や記憶を自身の妄想として読み取る能力。強烈な妄想が鮮明な映像として映し出されたり、無差別に音声として流れ込んだりと、様々な盗撮の仕方が存在する。これによって千雨は明日菜の正体を理解し記憶を復活させた。

直死の魔眼

「モノの死」を視覚情報として捉えることのできる眼。これが読み取って視覚する「死」とは単なる生命活動の終了ではなく、意味や存在が発生した瞬間に定められている概念である“いつか来る終わり”、「死期」や「存在限界」を意味し、「存在の寿命」そのものである。直死の魔眼所有者にとって「死」は黒い線と点で視認され、強度を持たない。この「死」を切ったり突くと、ありとあらゆるモノ（有機、無機を問わず、時にはより広義・上位概念上の存在も含む）を殺すことができる。

しかし、千雨の眼は生物よりも魔法など 異常 存在の方の死の「点」や「線」がよく見え、生物に関しては「線」のみしか視えない

という。さらに生物に関しては死を見ると激しい頭痛に襲われてしまう。これは 麻帆良の異常 を視続けたことで異常特化型の眼になったのだと思われる。また、生物の死を完全に理解していないから脳に負担がかかっている。本人曰く、『異常殺し（エラーデリート）』。式の下で自力で抑えられるよう訓練したが生物の死を理解するために特殊な魔眼殺しをかけている。

橙子直伝魔術

基本的ルーンについては学習済みで、主に強化系を多用する。人形師の技術は完璧ではないが、ある程度はある。

技名は『ブルーサイズ・レイン』、『ブルーサイズ・メテオ』、『ブルーサイズ・クレイモア』などがある。ちなみに、バゼットの技をイメージして作った技もあつたり・・・

両儀流剣術（見習い）

式の家に伝わる剣術。これによって式は荒耶宗蓮を倒すことができた。

千雨は式には流石に勝つことはできないが、剣道上級者レベルはある。

魔術礼装・黄昏

橙色の魔術礼装で、「魔力吸収能力^{マジックドレイン}」と防弾・防刃性を兼ね備えている。

魔力が籠った攻撃ならば自身の魔力として吸収し排出することができる。ただし、一度に魔力を溜め込むことはできないので吸収したら即座に排出しなければならない。付属装備として「硬化」のルーンが刻まれた手袋があり、千雨はこれを左手につけている。

また、スカートの中には「パラ・オーディナンス P14-45」と「シグザウエル P226 X-Five」、衛宮志保製の多目的サバイバルナイフ「そらかね空鐘」が隠されている。

抑止の精霊・マクスウエル

中学1年の終わりに遺跡探索の依頼を受けた千雨に取り憑いている存在。

敵ではないようだが、千雨の体を勝手に使ってよく戦闘をする。マクスウエルが発現時は千雨の瞳は黒ずみかかった金色に、髪は白髪へと変色する（ディソードも紅ではなく白に）。イメージ的にはセイバーオルタで、口調が女らしい喋り方になる。この状態になるとリアルブートが使用不可能になるが原素魔法が使用可能になる。また、3体の守護精霊を使役することが可能。

千雨から一言

『存在するのなら、どんな異常だって殺してみせる。』

名前 ネギ・スプリングフィールド

性別 男

年齢 15 （原作開始時）

属性 火・氷が加わっただけ以外原作と変わりなし

主人公その2。原作とは違い、悪魔殲滅魔法研究中に自分の行動を改めるようになった。それにより、自身が置かれている状況にある程度理解している。第一信念として家族や大切な人を守るようにしている。母や父はきつと何処かで生きていると信じて地道に探そうかと模索中。ダイオラ魔法球で2年間剣術開発に明け暮れ、3年間橙子の師事を受けた。鮮花や千雨の弟分。性格はTOGのアスベル・ラントで、戦闘時テンションが高まると一人称が僕から俺に変化する。(MM元老院と完全なる世界に対して強い怒りを感じている)

> i 2 5 0 6 1 — 3 0 0 6 <

能力 独自研究剣術、橙子直伝魔法知識、千雨を主としたパクテイオーカード

独自研究剣術

自身の愚かさを噛み締めたネギが、自身を変えるきっかけになった日本の小説(英訳版)に感謝し日本の剣術を参考に編み出した魔法剣術。現在橙子のおかげで34以上の技を編み出した。剣は衛宮志保製の黒と金の特徴的な「月照^{げつしょう}」。満月から日食までの様子が彫られた鞘に帯刀しており、また、魔術礼装として魔力殺し・気配遮断・身体能力向上の効果がある「孤高の白龍」を着用している。

橙子直伝魔法知識

ただでさえ戦闘経験が乏しいネギのために橙子が教授した知識。
ネギ曰く、『・・・地獄のような特訓でした。』とトラウマになる
ほど。

ちなみに、くしゃみは起こさなくなった。

千雨を主としたパクティオーカード

アーティファクト名：加速する運命を背負う者

バイクのハンドルのようなものと紅いUSBメモリ、トリガー付き
の総重量20Kgのブレードが出現することが分かっている。

ネギから一言

『僕は強くなりたい・・・・・・・・守りたいモノを守れるように!!』

その他

黒桐幹也・・・式と婚約、現在生まれてくる子供のために奮闘中。
千雨の命の恩人。

両儀式・・・幹也と婚約、現在生まれてくる子供のために奮闘中。

千雨の命の恩人。千雨の師匠とも言える人。『千雨はオレが鍛えた（育てた）。』

黒桐鮮花・・・幹也の妹で幹也が好きだが式に負けて新たな恋を模索中？それともNTR？とにかく、千雨の姉弟子。

蒼崎橙子・・・千雨の義母。我らがチートママで最高位の人形師。現在3人ほど弟子がいる。傷んだとか何とか言うとぶち殺す人。（被害者アルバさん）

西條拓巳・・・橙子の知り合い。カオスヘッドからの友情出演。原作で死亡後、なぜか転生。脳科学者ではあるが、田舎で隠れて住んでいるギガロマニアックスさん。容姿は眼鏡をかけた分身。

神楽坂明日菜・・・多分、性格改変キャラ。千雨さんが第壱章で関わる人。記憶復活しブラコン（？）化。

ガトウさん・・・宝石翁が助けて生きていた人、時計塔にいたりする。ただし、宝石翁のすっかりで不老化。偽名『ガトー・ナルミ・ヴィランシュタイン』で活躍中。外伝ではネギと活躍予定。

エヴァ・・・第貳章のレギュラー。集団リンチに遭っていた所を千雨が助けて以来、仲間になった。死徒27祖の番外位になった。

刹那・・・レッドが抜けたので、バカレンジャーホワイトに。木乃香のストーカーもとい護衛。影響ゲムでネギま！？verの髪型へとなつてしまい、おしゃれに目覚めた。

タカミチ・・・千雨が壱章において上条的説教で改心させた担任。2章では多分活躍予定。キレたら怖い。

龍宮・・・褐色巫女スナイパーだったが、影響ゲームのせいで巫女服を着るとひぐらしの羽入の巫女服＋緋弾のアリアの白雪（黒雪）が強気になった姿に変身するように……。最近では龍宮の家に伝わる剣術に手を染めたそうな……。

倉橋さん・・・ヒステリア・モードが使える変態天才科学者。魔術師であり、現在は現代魔術と称して「携帯魔術」を使用している。ぶっちゃけ容姿は緋弾のアリアの中空知のロリverである。

エイゼさん・・・反政府組織のリーダー格。ガトウさんの後輩であった人で、現在喫茶店のマスターをやっている。容姿はマブラヴオルタTEの巖谷栄二。

カナタ・・・エイゼの娘でボクっ娘。長い紫髪が特徴でアリアドネー魔法学校では風紀委員長をやっている。男装というかボーイッシュ。容姿はリトバスの二木佳奈多で性格は仮面ライダーカブトのひよりっぽい。

主人公設定&世界観設定 「7/10 外伝設定追加及び現時点での能力詳細、

思ったよりも高評価なのに驚いたりする・・・

本当に駄文でごめんなさい。

次回、第壱章 贗作人格

舞台は原作一年前、千雨と彼女は出会った。

廣作人格 - 壺（前書き）

空の境界風タイトルで行く予定です。

まあ、登場人物はわかりますよね・・・？

贗作人格 - 壺

side 近衛近右衛門

麻帆良学園、それは幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた都市の総称である。表向きには学園都市だがその実態は関東魔法協会の本拠地である。

その麻帆良学園の女子中等部に何故が存在する学園長室で一人の老人が唸っていた。その名を近衛近右衛門という。

「……………うゝむ、なぜ今になって彼女がここにおるのかのう？」

老人の手には一人の生徒に関する資料が握られていた。そこには少女——蒼崎千雨の名前があった。

——一年前、麻帆良学園小等部に属していた生徒『長谷川千雨』が行方不明になった事件があった。必死の搜索にもかかわらず、まったく足どりさえも掴むことができなかった。『長谷川千雨』の両親との幾度にも及ぶ会合の結果、麻帆良学園はある事実に辿り着いた。

——いじめである。

詳しい内容は伏せられたが、魔法関係者にとっては重大な事態だった。何せ問題の『長谷川千雨』の発言は学園内に展開された認識障害魔法がまったく効いていないという事実を物語っていたからである。直ちに彼らは学園内の実態調査を開始、結果こそ『長谷川千雨』以外の認識障害魔法レジスト者はゼロであったが、彼らの認識の甘さを強く受け止めることとなった。

そして先日に行われた入学試験で思わぬ人物に彼らは遭遇した……
……『長谷川千雨』である。

姓こそ変わっていたが、学園内に残されていた資料から同一人物であると判明したので、元々いわく付きの生徒が集まる予定であった「1-A」へと編入した。そしてその後、学園は『蒼崎』という人物についての情報を集め始める。

——結果はいたって普通の家庭と判断されたのだが。

それもその筈、『長谷川家』とは 合意 の下で養子縁組がなされていたのだから。それに、橙子は他の魔術師や魔法使いに気づかれるようなへまはしない。

………ということで、要観察だけに留まったのだ。

「このまま………何も起こらねば良いのじゃがのう。」

残念ながらその老人の願いは聞き届けられず、事態は思わぬ方向へ

と進むことになる。

あの日あの時、老人はもっと早く事態の收拾に乗り出すべきだったのかもしれない。

とにかく、彼は・・・彼らは遅すぎた。

変わってしまった彼女を止める術は、最早なかったのだ。

s i d e o u t

s i d e
超

場所は変わって、「1-A」。

ここにも頭を悩ます者がいた。——未来人、超鈴音である。

本来ならば、出席番号19番であるはずの彼女は出席番号20番という位置づけにいた。そして、協力しているエヴァンジェリン・A・

K・マクダウエル以降の番号が一つずつ繰り上がっている。

「（『長谷川千雨』に何があたネ？これは詳しく調べてみる必要がありそうネ……………」

麻帆良の最強頭脳の異名を持つ少女は一人静かに決意した。

……………もつとも、彼女ですら詳しいことはわからなかったのであるが。

s i d e o u t

s i d e 千雨

—— 退屈だ、その一言に尽きる。

周りが騒がし過ぎて、ろくに授業ができていない。ただ静かに教科書をめくりノートへ写すという動作を繰り返している千雨はこのクラスの 異常性 にうんざりしていた。

入学早々の小テストで赤点叩き出した「バカレンジャー」のように成績不良者はまだいい、何処にでもいそうな連中だ。だが、明らかに多い留学生、明らかにただの人間ではない者、明らかに幸運のレベルが高い奴、明らかに天才な者、明らかに魔力が膨大な者、そして………

明らかにこちらを監視してくる奴がいるのは本当にうんざりする。
……魔法関係者って奴か？

今の私は『蒼崎千雨』だ、それ以上それ以下でもない。なのに奴らは『長谷川千雨』として自分を見てくるのだ、何時までそんな過去のことを引き摺っているのだろうかと思う。本当に最悪だ。

………まあいい、私は私のやりたいように学園生活を送らせてもらう。下手に干渉してきたのなら、異常 としてそれなりの 対処 をさせてもらうだけだ。

お前達の 歪んだ正義 があの頃とどう変わったのか、それとも何も変わっていないのか見極めさせてもらうぞ？

・・・ああ、くだらない事を考えていたらアイスモナカが食べたくなつたじゃないか。

一通り次回の授業の予習を終えた千雨は、帰りにジャンボ君でも買つていこうかと思考を切り替えた。

s i d e o u t

偽りの記憶を植えつけられ、偽りの人格を手に入れたお姫様。

果たして彼女は幸せなのだろうか？

もし、彼女がはつきりと 歪んだ正義 を拒否して歩もうとしていたのなら物語はどう変わっていたのだろうか？

過去は取り戻せない、ただ人は未来に向かって歩むだけである。

真実を知った死神の少女は、お姫様にそつと手を差し伸べた。

・ 連れて行くのは彼女を守りし一人の騎士の下、そして……………

運命は加速する、踊りたまえ少年少女よ。

ただ見えぬ明日を、未来を切り開くために。

これは序章に過ぎないのだから。

贗作人格 - 壱 (後書き)

最後らへんが中二病かもしれない。

作者はそれ以上ですから安心してください。

次回、贗作人格 - 弐

千雨はとある少女の秘密に気づき、戦う事を決意した。

贗作人格 - 弐 (前書き)

実は第弐章はエヴァが関わってくる予定。

千雨が暴れます。

とにかく暴れます。

贗作人格 - 貳

side 刹那&真名&エヴァ&茶々丸

麻帆良学園のとある空き部屋に4人のそれぞれ特徴的な少女が集まっていた。一人は竹刀袋に入れた野太刀を持ち、一人は銃器を携帯し、一人はまるで人形のような容姿をし、一人は関節や耳が明らかに人間ではなかった。

「……………まったく、一人の小娘ごときで何を爺は慌てているんだ。」

そう不満げにもらすのは麻帆良学園に封印されて現在13年目の中学生生活を開始した「闇の福音」ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルである。彼女は現在の自分のクラスに在籍する『蒼崎千雨』の監視を今集まっている者たちと共に行うよう指示されたのだ。

「正直それには同感だ、まるで自分達が対処できない仕事を押し付けられたようなものだよ。」

エヴァに同意するのは、かつてマナ・アルカナという名でNGO団体「四音階の組み鈴」に所属しミニステル・マギとして行動していたスナイパー、龍宮真名だ。

「報告書によれば、特に不審な点はないみたいですが……
どうして、先生達は気にしているんでしょうか？」

資料を手に取り、入念に調べているのは近衛木乃香を護衛するため
に来た神鳴流剣士、桜咲刹那。

「おそらくは麻帆良の認識阻害魔法が唯一効かなかった方だからだ
と思われます。」

そう丁寧な口調で話すのは、エヴァの従者であり超とハカセによつ
て造られたガイノイド、絡繰茶々丸。彼女は続けざまに話す。

「それに彼女を引き取ったとされる『蒼崎』という人物についても
先生方は警戒しておられます。」

「……確か、『蒼崎橙子』だったか？」

「ああ、現段階では建築家であるということと芸術家であることだ
けがわかっていそうだよ。」

「なら、特に警戒することはないのでは………？」

正直なところ、木乃香の護衛を優先したい刹那はそう発言する。彼
女の意見はもつともなのだが、上は言うことを聞いてはくれない。

「だが、ただでさえ実の親が精神病院へ連れて行こうとしていたぐらいいだ。赤の他人なら普通は同じようなことをするはずなのに、それをしないで養子縁組をするなんて少しおかしいとは思わないか？」

「確かにそうだが……。」

「それに情報が上手く集められないのもこの『両儀』という家が圧力をかけているからだ。」

「『両儀』ですか……珍しい姓ですね。」

『蒼崎橙子』は『両儀』の保護下に入っているために探ろうにも迂闊に手が出せないのだ。さらには彼女が世捨て人であるためほとんど情報が集められない。もはや完全に手詰まりである。

「一度は去った学園になぜ今になって帰ってきたんだ、『蒼崎千雨』？」

エヴァが窓から見える空を見上げて呟くが彼女が真実を知る日はまだ遠かった。

side out

s i d e 千雨

麻帆良学園に入学して早3ヶ月、中間テストを終えクラス内の一人のレベルがある程度わかった頃、少女『蒼崎千雨』は昼休みの教室で机に伏していた。もちろん空腹だからではない、周りでは委員長こと雪広あやかとバカレンジャーレッドの称号を持つ神楽坂明日菜がいつものように言い争っていた。

「（よく学級崩壊起きないな、このクラス・・・・・・・・。）」

ここまで騒がしいとなるとクラス内での連携に支障がでてもおかしくはないのに、「1-A」は無駄にハイスペックなのか逆に連携が取れていた。

そして、千雨は現在判明している 魔法使い の関係者達について 考察する。

絡繰茶々丸はロボットだから思考を 盗撮 することはできないが、

エヴァンジェリンと行動を共にし、なおかつ開発者である超・ハカセと頻繁にいる姿が目撃されているので魔法使いの関係者確定。超に関してはやばい事を企んでた、宝石爺に報告しておこう。というか、変な知識あった。

春日美空はシスターを何故かやっているが、絶対魔法関係者。チロチロ見るな、バレバレだぞ？

近衛木乃香は魔力量こそ膨大だが、魔法については無知。学園長の保護下にあるとし、護衛にはあからさまにストーカー気味の桜咲刹那がいる。何だよ、『お嬢様に害なすならば斬る！！』って？

龍宮真名は龍宮神社の巫女をやっているが、常日頃から銃器を携帯している。ギターケースの中身は多分スナイパーライフル。よく桜咲とつるんでいる。

ザジ・レイニーデイはよくわかんないけど、ただの人間ではない。姉がいるっぽい。

・・・と、まとめあげると9人ほど関係者だった。

正直詰め込みすぎだろうと思う。問題児をまとめ上げるためならまだしも、こつも訳有りなカオスなクラスは駄目だろう。

思わず溜息が漏れる、魔法使い達にも騒がしいクラスに対して

というか、ここまで成績に差があり過ぎるクラスって何なんだよ？
超に関しては大学行け、大学。お前の頭脳は世界に通用するだろう
に……………

バカレンジャーは授業ちゃんと聞いているのかどうかも怪しい。面
倒くさいから 思考盗撮 する気にもなれなかった。

どーして、天才とバカとはこうも違うんだろうね？本当に調べたく
なってくるよ……………

……………あ、だったら調べれば（思考を盗撮すれば）いい
んじゃないか？

バカレンジャーに使う気にならなかったせいでやってなかったが暇
だから調べてみるか。うん、そうしよう。脳科学の研究にもなるし。

適当に理由をつけた千雨は 思考盗撮 を開始することにした。対
象は現在委員長と絶賛言い争い中のバカレッド、神楽坂明日菜だ。
いつも担任の高畑先生を見つめていて勉強してない彼女の頭を、好
奇心で視てみる。

……………だが、これがいけなかった。

彼女は 異常 を傍観する立場から 異常 に踏み込む立場へと移ってしまふとは知らずに、明日菜を 視て しまった。

当初は予想通り、高畑先生のことだけしか 盗撮 できなかった。しかし、盗撮していくうちに何故かノイズのようなものが走る。

<ザザザ・・・ザザ・・・>

「（・・・！？）」

突然、カラーで鮮明に視えていた思考が音をたてて砂嵐と化す。今までなかった事態に一瞬困惑するも千雨は思考の中をさらに 盗撮 していく。すると、先程までのカラーから昔の白黒テレビのような映像となって それ は現れた。

『よう、嬢ちゃん。名前は？』

赤毛の青年が鎖で縛られていた少女に語りかける。

『ナ・・・マエ・・・？』

戸惑いつつも少女は答える、自分は『アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』だと。

「（いや待てよ、何だこの記憶！？何で神楽坂にこんな記憶があるんだよ！！）」

普段の明日菜を見ている千雨は今とまったく違う明日菜……いや、アスナに驚く。しかし、彼女の驚愕をよそに映像は進んでいく。

『なげーな、オイ。けど……アスナが、良い名前だ。』

青年はいや青年達は彼女を守るようにして異形の者達に立ち向かっていく。……が、途中で映像は何故か飛ばされる。

『黄昏の姫御子……我が末裔よ、その本来の役割果たしてもらおう！！』

全身を黒いフードで包んだ存在が少女に語りかけ、周囲は光に包まれていく。それはまるで世界の終わりを告げるようにも見えた。

「（黄昏の姫御子？それって確か、宝石翁が調べろって言った……

・・・ええっ!?)」

時計塔に以前訪れた際に偶然出会い、知り合いになった「宝石翁」に所在を特定するよう言われた『黄昏の姫御子』なる存在が彼女の身近にいたのだ、驚くのは無理はない。映像は再び別の映像へと切り替わる。

『悪い・・・遅くなっちゃった。・・・全く、いつもいつもヒーロー失格だな。』

『ナ・・・ギ・・・?』

「(ナギ・・・?それも確かネギの父親の名前だったはずだ。)」

よく考えてみれば、弟子のネギと外見がそっくりである。流石にバカっぽさをネギは持っていなかったが。・・・また、切り替わる。

『・・・何だよ嬢ちゃん、泣いてんのかい?涙見せるのは初めてだな。』

『やだ・・・ナギもいなくなっておじさんまで・・・やだよお!!--!』

前までの映像とは違い、人間らしさを持ったアスナが負傷しているにもかかわらずタバコを吸う中年の男に涙する。おそらく、男の命はもうすぐ尽きてしまうのだろう。

『……幸せになりな嬢ちゃん、あんたにはその権利がある。……だから、行け。』

『ダメ!!ガトーさん、いなくなっちゃだ……!!!!!!』

そして、『アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』としての最後の記憶が映し出される。

『……記憶……封印……手筈……』

『無効化……ありませ……どうし……』

『薬……やむ終え……お願……』

『（どうしたの……?タカミチ……怖いよ、この人達。）』

『大丈夫だよ、すぐに済むから……』

若いタカミチがアスナの頭を撫でるとともに映像はプツンと途切れた。

それと同時に千雨の意識もテレビを消したかのように失われた。

それから何時間経ったのだろうか、千雨は全身を包み込む柔らかい感触の中で目覚めた。ぼやけていた視界がだんだんとクリアになっていき、今自分がいる場所が保健室であると告げていた。

「そうか、あの後意識を失って……」

誰かが運び込んでくれたのだろう、その誰かには後でお礼ぐらいは言っておこうと決める。すぐさま彼女は思考を本題へと切り替えた。

まず、神楽坂明日菜の正体が『アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア』つまりは『黄昏の姫御子』であるということ。これは『宝石爺』からの依頼を一応は達成したことになる、後は報告するだけだ。

次に弟子であるネギと明日菜の関係性についてだ。ネギや橙子からアリカがナギと婚約していたという説を聞いていた千雨は、この二人を現在行方が確認された親戚家族と断定した。おそらくだが、神楽坂というのはガトウのミドルネームから取ったのだと推測する。

ただ、問題は一つ。

現在、明日菜は記憶を封印され、偽者の人格と記憶が与えられている。理由は定かではないが、一般人として偽装するためだと思われる。だが、そのために魔法使いは彼女の了承や意見を聞かずに独断で事を進めた。それも薬を使ってまでだ。いくら『完全魔法無効化能力』のせいで魔法が効かないからってそこまでするのはどうかと千雨は思った。

そして、『宝石翁』が心配していた『完全なる世界』の存在。彼らは前大戦においてその戦力の大半を失ったが、今なお活動が続いている者たち（幹部クラス）がいるという。彼らに明日菜を奪われないために、彼女自身に危機感を持たせるためにも記憶はそのまま

の方が良かったと考える。だが、これはあくまで千雨の持論だ、『宝石爺』や橙子の指示を仰ぐべきである。

保険室を抜け出し、授業を早退することにした千雨は寮内の自分の部屋に行き着くと嚴重に部屋の戸締りという名の閉鎖を開始する。下手に聞かれでもして、命を狙われてはたまったものではないからだ。一通り準備を終えた彼女は携帯電話を取り出した。正直、『宝石爺』が携帯電話を使うなんて想像できないが現に使えるらしいので気にしないでほしい。というか下手に魔術を使うわけにはいかなので文明の力を借りているだけなのである。

『……そちらから掛けて来るのは珍しいの『ブルーサイズ』、それとも『ミス・サウザンドレイン』と呼んだ方が良いか？』

「どっちでもいいよ、宝石爺。それより、ちょっと例の件に進展があったから報告したいんだが良いか？」

『ほほう、仕事が速いのう。で、内容はいかに？』

千雨は現時点で調べられた情報を報告しつつ、明日菜と今後どう関わればよいのか質問する。すると思ひもよらぬ答えが返ってきた。

「……え？封印解除してもいいのか！？」

『うむ、そちらからの情報とこちらの情報を照らし合わせるとな、どうも麻帆良は危機感が抜けているようじゃ。それに彼らは別なこ

とに夢中じゃしの。』

「ああ・・・なるほど、奴ら『偉大な魔法使い』になることしか考えてないもんな。」

『タイミングはそちらに任せるが不必要な戦闘は控えるのじゃぞ？』

「わかってるよ・・・でも、奴ら最近『長谷川千雨』のことしか頭にないみたいなんだけどさ。どうすればいいかな？」

『・・・・・・うむ、ならば仕方がない。『奥の手』を使うまじや。』

彼らが言う『奥の手』、それは宝石爺が偶然手に入れた切り札の一つ・・・いや、一人か。その人物がどのようにして介入してくるのかは彼らの頭の中でしかわからない。唯一つ、わかることといえば・・・

「高畑先生と戦うのか・・・まあ、やってやるよ。」

担任である人物、タカミチ・T・高畑との対決だった。

贗作人格 - 貳（後書き）

上手く書けたかどうか不安である。

というか、体が熱い。

次回、贗作人格 - 参

たとえ誰かのためでも、分かり合わなければ意味はない。

だから、彼は間違った。

廣作人格 - 参（前書き）

この章はまだ続きます。

次回で最後です。

そして、スポットライトはかの少女に・・・

贗作人格 - 参

宝石爺との会話を終えた千雨はふと、宝石爺との出会いを思い返す。

確かあの頃は橙子が家を空けがちになっていた頃だった。

鮮花と共に日々橙子の出した課題に明け暮れるという毎日が続いていたが、唐突に『どうせなら、鮮花と一緒に時計塔にでも行って修行積んで来い。』という橙子の推薦状付きの命令からイギリスの倫敦へと向かい、一応鮮花の付き添いとしてルーン魔術を学ぶことになったのだ。

ルーン魔術を専攻するものは少ないそうで、今では伝統ある名家でしか受け継がれていないそうだ。橙子もかつて工房を持たないがために魔術協会に入ったが『蒼崎』の名はあまり受け入れられなかったらしい。

何でも、現在妹の『蒼崎青子』通称『ミス・ブルー』に受け継がれている第五魔法『魔法・青』が原因だという。仕方なしに橙子は専攻者が圧倒的に少なく、人員を欲していたルーン魔術を専攻してオリジナルが存在するアトラス院のものに近づけていった。

数いる中から千雨が選んだ講師は、伝統ある『赤枝の騎士』の血を引き、ルーンを体に刻み込んで戦うという変わった戦闘スタイルを持つ若き執行者『バゼット・フラガ・マクレミッツ』であった。自らを強化して戦うスタイルに心惹かれた千雨は彼女の元で着々と実力を身に付けていく。

時速80kmのパンチというプロボクサーもビックリな速さで（ちなみにプロボクサーは時速40kmである）攻撃を繰り返してくるバゼットから、命懸けで修行を積んだ為動体視力がハンパなくなってしまうのは後々驚いたが。

それそうと、講師である『バゼット・フラガ・マクレミツ』は千雨や式の眼と因縁のある宝具ルーの短剣、通称『斬り決る戦神の剣』フラガラックを所有する「伝承保菌者」ゴッスホルダーであった。

もつとも、こちらには睨みつけたら死ぬなんて力はないがホントにこれは何の冗談だと思った。ああ、ちなみに直死の魔眼は別名バロールの魔眼って言うらしいね。

さて、そんなこんなで修行を積んでいた千雨は急遽バゼットと共に死徒討伐に乗り出すことになる。正直、小学生の自分がなぜそんな仕事をせねばならないのかと思ったが橙子が良い経験だからやってみろと言うのでしぶしぶ引き受けた。千雨としても何時までも守られているのは嫌だったので思考を切り替えて臨んだのだが……

何処の無双ゲー、もしくはゾンビゲーだよ！？と思った。

まあ、前者ならコミュニケーションは取れるだろうが残念ながら戦っているのは後者のようにただ襲いかかってくるだけの死者である。バゼットは一人、高速連続パンチで死者を狩っているのだがほとんど自分から遠ざかっていく。

彼女のように肉弾戦は流石にまだ無理なので、というか嫌なのでデイスードを使って次々と千雨も死者達を切り裂いていく。それはもうアインツベルンのメイドがハルバードを振り回すようにグルグルグルグルグルグルグルグルと。

そして、粗方倒し終えた千雨の前に一番会いたくはなかった死者の親玉、死徒が現れてしまう。最初はバゼットどこだー！！こん畜生

おー！！という感じで逃げながら戦っていたが一向に助けに来てく
れる様子がないので、仕方なしに正々堂々戦うことを決意する・・・
・・・バゼットに帰ったら『ダメット』と呼んでやろうと誓いな
がら。

・・・まあ、相手も所詮は生物なので思考は存在する。それ
を盗撮することで攻撃は避け続けてはいたが流石に人間をやめた方
達である、スタミナがハンパではない。

長期戦は不利だと考えた千雨は一か八か『直死の魔眼』を使って「
線」を見る。そして、不壊の剣であるデイスードで見える「線」を
一気に斬り捨てると死徒は消滅したのだが、同時に千雨の目の前は
真っ暗になった。

で、眼を覚ませば見慣れない爺さんが傍で焚き火をしていたので急
いで起き上がると共に距離をとる。警戒した目で睨みつけたのだが、
こちらの体調はどうかと気にするような事を言ってきたり、死徒や
死者とその若さで戦うとは凄いのうなんて言ってきたので警戒を解
いた。

何でもこの爺さん、千雨が倒した死徒のことが気に入らないから倒
そうかとしていたらしい。駆けつけた時には千雨が既に倒していた
のでどうやって倒したのかを確かめようと思ったという。

自己紹介をしたら『ミス・ブルー』と『ミス・レッド』の関係者で
あることに驚かれたが、正直青い方とはもう関わりたくはない。何
せ、母がお金を使ったからといって事務所を襲撃してきたぐらいな
のだから。おかげで事務所の修理にどれだけ手間がかかったことか
・・・ああ、思い出したくもない、あんな某魔法少女が出す収
束砲ぐらいの魔力砲を出す人は。

というか、第五魔法『魔法・青』って何なんだ？ただの魔力砲じゃ
なさそうだけど・・・

この邂逅があつてから何かと宝石爺と関わるようになり、今では『ブルーサイズ』『ミス・サウザンドレイン』という異名を持つようになった。

さて、回想はここまでにして……仕事、やってきますかね？

学園の生徒のほとんどが寝静まる中で駆け抜ける者達がいた。彼らは異形の者達が学園に侵入しないように様々な技を駆使して立ち向かっていく。

その中に、「1-A」担任タカミチ・T・高畑も一人いた。彼は学園内の実力者ナンバー2を誇る歴戦の魔法使いだ、故に単体での戦闘が可能である。

いつものように受け持った地区の鬼達を殲滅していった彼を突然、白い霧が覆い始める。

「霧？これは一体・・・・・・・・・・。」

気づけば先程まで感じていた仲間たちの気配すらなくなってしまっている。何らかの結界かと思い、脱出を試みても一向に出ることができない。もはや彼は孤立無援の状態に陥ってた。

すると、ふと白い霧の中に黒い影が浮かぶ。突然のことに思考が鈍っていたのか、彼は外から異変に気づいた誰かだと思い近づいてみる。そして、そこから現れたのは・・・・・・・・・・『ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ』であつた。

「なっ！？が、ガトウさん！？そんなバカな・・・・・・・・！？」

いるはずのいない人物の思わぬ登場に焦るタカミチ。だが、『ガトウ』は何も言わずにただ構える姿勢をとる。それはつまり、戦う意

思があるということだ。

「そうだ、ガトウさんは死んだはずだ！！だからここにいるはずがないんだっ！！」

何とか自分を落ち着かせるために、そう言い聞かせるタカミチ。目の前にいる存在はただの幻覚、もしくは偽者だと彼は考える。だが・

『左手に魔力・・・右手に気・・・合成！！』

ガトウが使える『咸卦法』を当たり前のように目の前の『ガトウ』はやってのけたのだ。そして気づく、目の前の存在は自分の知るガトウと何から何までそっくりだということを・・・・。タカミチ自身も『咸卦法』を発動させ、臨戦態勢に移る。しかし、発動すると同時にいつの間にか接近してきた『ガトウ』に激しい蹴りを入れた。

「・・・・ツ！？は、早い！！」

続けざまに居合い拳を連続的に放つ『ガトウ』。すぐさま体勢を立て直すと同じようにタカミチも居合い拳を放ち相殺しようとするが、『ガトウ』の方が威力が高いのか衝撃波をもろに喰らってしまう。

「くっ!!」

防御体勢をとるも、容赦のない一撃が……豪殺居合い拳が背後から彼を襲った。地面をバウンドするように吹き飛ばされる。

「……………くそ、何なんだ一体!? 何から何まで同じじゃないか、ガトウさんと!!」

彼の着ていたスーツは所々破けている。ボロボロになりながらも何とか立ち上がったタカミチに初めて『ガトウ』は話しかけた。

『当たり前だろう、俺は『ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ』だからな。』

「う、嘘だっ!! 本当のガトウさんは死んだはずだっ!! 生きているはずがない!!」

『……………なら、蘇ったと考えればいいんじゃないか? 弟子を叩き直すために黄泉の国ってやつからな。』

「た、叩き直す!? な、何を言ってるんだ!! それに死人が蘇るわけがない!!」

『……言いたいことはそれだけか、タカミチ？なら聞くぜ、アスナ嬢ちゃんは今……幸せなのか？』

「……え？」

当然好戦的だった『ガトウ』は打って変わって、真面目にタカミチに問う。

『偽りの人格、偽りの記憶……薬を使ってまでそんなモノを植えつけられて『アスナ』は今、幸せなのかって聞いてんだよつ！！』

突然『ガトウ』が霞のように消えるとそこから、刀身の一部が紅く発光した剣を片手に携えた千雨が現れてタカミチに飛びかかり馬乗りになる。……そう、先程までの『ガトウ』はタカミチの記憶を盗撮して創り上げた妄想の『ガトウ』だったのだ。

「き、君は蒼崎君！？どういうことだ！？」

「んな事はどうでもいいんだよつ！！てめえは……てめえらは『アスナ』を薬を使ってまで記憶封印して……それで幸せにしたと思っているのかよ！？」

「なぜ、それを!？」

自分が知る者以外にその事実を知る者はいないというのに目の前の少女は突然現れ、突然そんなことを言い始めた。彼の混乱を余所に彼女は続ける。

「やっと自分を守ってくれる人たちと出会えた記憶を!! 自分の未来のために命を懸けてくれた人の記憶を!! 血のつながりがある家族の記憶を!! 消してまであいつは幸せになりたかったと思っているのかよっ!!」

「それは……ガトウさんや上の人が決めたことで!!」

「あんたは言われたことをそのままこなすだけなのかつ!? 自分の意思で行動しなかったのかっ!？」

千雨はキレていた。掴みかかっている男が自分で考えず、ただ言われたことをこなしたということに。彼女が同じような方法を使っただだ生かされていたことをわかっていたはずなのに。そして……

「それによお、『アスナ』の意見は聞いたのかよ!？」

「!？」

『アスナ』の記憶を視て千雨は知っている、『アスナ』が一言も意見を言うことができなかったことを。そして、彼らが一度たりとも『アスナ』にその話をせず、独断で記憶を消したということ。

「結局、てめえらは自分達を正当化してるだけじゃねえか！！他人の意見は聞かないで！！正義だ悪だ勝手に決めつけて！！偉大な魔法使いを目指す？戦争を経験したあんたなら否定しろよ！！」

英雄の称号を押しつけられて、使い物にされて、言うことを聞かなければ、気に入らなければ殺される。そんな偉大な魔法使いなんて意味もないものをなぜ目指すのか、千雨には理解できない。

「英雄っていうのはなあ！！目指すものじゃないってあんたは知っているはずだろ！？世界に自分のできることで向き合った奴のことを言っんだよ！！」

「・・・・・・・・あつ！！」

タカミチは気づく、ナギ達は自分達ができることを精一杯やったただけだと。ましてや、英雄なんて偉大な魔法使いになるつもりなんて全くなかったと。

「あんたはあんたが尊敬する人たちの分まで『アスナ』を守ってや

るべきだったんだ！！『神楽坂明日菜』ではなくて『アスナ』をな
あ！！それがあんたがやれる『できること』なんだよぉ！！」

何時の間にか、気づけば辺りには雨が降っていた。それはまるで瞳
から流す涙だけでは表現できなかった感情を吐き出すようにザアザ
アと。

「僕は・・・・・・・・僕は・・・・・・・・！！」

ポツリポツリと呟くタカミチもまた涙を流していた。自分が犯して
しまった罪を懺悔するように・・・・・・・・。そんな彼を見た千雨は
馬乗りになっていた体勢から立ち上がり後ろを向くと、そしてこう
言った・・・・・・・・。

「・・・・・・・・『アスナ』。今度こそ言ってやれ、このバカに。」

バトンタッチを傘を差し佇んでいた『アスナ』にして、千雨は一人
立ち去る。自分の仕事は終わった、と呟いて・・・・・・・・。

「うん・・・・・・・・ありがとう、千雨ちゃん。後は、大丈夫だから。」

珍しく髪を下ろした『アスナ』が既にいない千雨に礼を言う。そし

て、雨にただ濡れ倒れているタカミチに近寄った。

「『アスナ』君・・・・・・・・・・。」

「高畑先生・・・・・・・・・・いえ、タカミチ。あなたに言いたいことがあるの。」

それは千雨によって記憶を・・・・・・・・かつての『アスナ』という自分を取り戻した彼女だから言えること。

「『私』はみんなのことをずっと覚えていたいです。だから、忘れたくありませんっ!!」

そうはつきりと、タカミチに 自分の意見 を宣言した。

s i d e o u t

雨の中、ただ少女は歩き続ける。

差すものなど彼女はいらない、必要なかった。

なぜなら、彼女は体だけでなく心も既に濡れていたから。

ただひたすらに自分のあるべき場所へと帰るだけである。

序章は終わり、主人公は新たなステージへと向かう。

その先にあるのは希望か絶望か、それはまだわからない。

贗作人格 - 参 (後書き)

次回、贗作人格 - 終

- ・ 悲劇による幕引きは死神は許さない、故にただ彼らに祝福の光を・

廣作人格 - 終（前書き）

あの喫茶店がでるよぉ!!

上手く書けたか不安です。

そして、設定がむちゃくちゃです。

贗作人格 - 終

side 『アスナ』

——彼女がまだ神楽坂明日菜であった頃、唐突にそれを知らされた。

『お前の家族、そしてそれに準ずる人物の行方を知っているが会いたくはないか?』と。

木乃香と共に帰りの支度をしていた明日菜は既に早退していたと聞いていた千雨に話があると言われ、千雨の部屋へと案内された。

そこで知らされたのである、彼女の血の繋がりがある人物について、忘れている大切な人物について。

「……え? ね、ねえ千雨ちゃん!! どうしてそれをあなたが知っているの!?」

「話は長くなるし、『今』のお前には話せないことだ……」

「『今』の私? ど、どういふこと?」

ここで下手に魔法の存在をばらすのは良くないので、『明日菜は記憶喪失になっている』と説き伏せた。そして、『家族』に会うためにはその記憶を取り戻さなければ会わせる事ができないとも。

「・・・・・・・・記憶を取り戻す？そ、そんなことができるの？」

「まあな・・・・・・・・でも、その代わりお前は『神楽坂明日菜』を殺さなければいけない。」

「私を殺す・・・・・・・・？」

そう、失われた記憶を取り戻すということは『現在の自分』を消す・・・・・・・・もつと悪く言えば殺すということだ。だから、それなりの覚悟がいる。

「と、言っても完全に『今』のお前が死ぬわけじゃない。多少は残るだろうがな。」

「ごめん・・・・・・・・ちよつと考えさせてくれる？」

「ああ、そんな簡単に決められることじゃないからお茶でも飲みながら考えればいいさ・・・・・・・・。」

急須に茶葉を入れに行くために席を立つ千雨。卓袱台の前には明日菜だけが取り残される。

——そして、明日葉は思考する．．．．．自分が知らない『自分』について。

確かに自分は物心つく頃には親がいなかった。保護者として高畑先生や学園長はいたが、それでも周りと違って親なしであつた．．．．．それには何か理由があるに違いない。

そういえば、なぜ『私』は高畑先生にタバコを吸うように言ったのだろうか？ただでさえ、タバコというものは体に悪いというのになぜ？

ふと、『誰か』の姿が思い浮かぶ．．．．．傷だらけで『自分』の頭を撫でる『誰か』が。その『彼』は言う．．．．．

『幸せになりな．．．．．嬢ちゃん．．．．．』

「．．．．．ッ!？」

知らないはずの誰かが頭の中に思い浮かぶ、それはどこか高畑先生に似た人物で．．．．．『自分』を大事に思ってくれている人物だとわかった。

だが、一体『誰』なのだろうか？『私』が忘れていた大切な人なのだろうか？そして、『私』はその人物を忘れていたままで良いのだろうか？

『忘れてはダメ……』その人『だけじゃなく『みんな』のことも!』』

——少女の声がする、その声はどこか懐かしい。

眼を開ければ 少女 は『私』の目の前にいた、真つ暗な空間にたった一人。……もしかして、この 少女 が『自分』の知らない 私 なのだろうか？

少女 は叫ぶ、本当の幸せを掴みたいなら全てを思い出せと、偽りの幸せに満足するなど。……泣きじゃくった顔で必死に。

——だから、『私』は決めた。

『明日菜』ではなく本当の自分『アスナ』になるために失われた記憶を……。『自分』を取り戻そうと決意した。

——アーネンエルベ。

そこは世界の狭間に存在する『遺産』という名の喫茶店。そこでは、決して交わるはずのない運命が出会うというらしい。

そんな場所に一人の男性と一人の女子中学生が向かっていた。名をタカミチ・Ｔ・高畑、そして先日『アスナ』となった少女、神楽坂明日菜という。

二人はそこで先日関わった少女、『蒼崎千雨』との待ち合わせをしていた。本人曰く、『会わせたい人物がいるのと、その他諸々の話がある。』らしい。

電車を乗り継いで向かったのはアーネンエルベのある東京・観布子市。果たして彼らと何が出会うというのだろうか？

喫茶店のドアがカランコロンと音をたてて開かれると、活発そうなツインテールの女の子・桂木千鍵が現れる。

「いらっしやいませえ！！何名様でございますかぁー！！」

ついでに口調が少し荒いが………気にするな。

「いや、『蒼崎』という名前を出せば良いって言われたんだけどい
いかな？多分、席を予約していると思うんだけど………。」

「あ……はい！！一番奥側の席が『蒼崎様』がご予約の席です。
……えつーと、『高畑様』と『アスナ様』でよろしいですよ
ね？」

そつ受け答えたのは、アホ毛が特徴的で明るい少女・日比乃ひびき
である。アルバイトとして調理担当をしている少女だ。

「うん、そうだよ。で、蒼崎君はもう来ているかな？」

「はい、先程来店いたしまして紅茶を注文されて待っておられます。」

「ありがとう、じゃ、行こうかアスナ君。」

「うん、タカミチ。」

奥の席へと移動する二人、目的の人物はすぐに見つかり読書しながら紅茶を楽しんでいた。

「…………お、来たな、二人とも。」

「やあ、蒼崎君。こんにちわ。」

「千雨ちゃん、昨日は本当にありがとうね?」

「いいんだよ、別に礼なんて言わなくなつて……………さぞ、座った座った。」

「ああ、それでは失礼するね。」

そう言って二人は腰掛けると、千雨の隣の席に置かれた空のコーヒーカップに気づく。

「あれ、これって・・・・・・・・・・？」

「ん？ああ、それね。二人に会わせたい人が今、トイレに行っていて席を外しているだけだよ。」

「なるほど・・・・・・・・それで、会わせたい人って一体誰なんだい？」

「そうよ、それが聞きたかったの。教えてくれない？」

「まあまあ、そう急かすなよ。・・・・・・・・おっと、ちょうど来たみたいぜ。」

千雨が指を差した先はトイレ。そしてそこから出て来たのは・・・・・・・・二人の記憶の中にある『彼』と変わらぬ姿でいた『ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ』、その人であった。

「え・・・・・・・・？そ、そんな・・・・・・・・バカな・・・・・・・・。」

「う、嘘・・・・・・・・が、ガトウさん・・・・・・・・？」

思わず二人は口を覆う。驚くのは無理はない、何せ相手は死んでしまったと思っていた人物だったのだから。

「おう、タカミチ。少し見ないうちに老けたなあ。」

「ほ、本当に、ガトウさん……なんですか？」

「俺が他の誰に見えるんだよ？……アスナ嬢ちゃんも美人になったな、おい。」

ガトウがかつてのようにアスナの頭をわしわしと優しく撫でる。対するアスナはもう絶賛号泣中だった。仕舞いにはガトウに抱きついている。

「ガトウさん……ガトウさん……生きていて良かったあ！！」

「……おお、そんなに泣くな！！……って言うても、無理はないか。」

大人しくアスナを抱きしめて落ち着かせるガトウ、感動の再会を干雨は微笑ましそくに眺める。

「蒼崎君……これはどういうことなのか、説明してくれるかい？」

「……ああ、私が話せる範囲で良ければな。」

一先ず、皆が落ち着いたところで、改めて話を切り出す千雨。彼女の口からガトウ生存の秘密が語られる。

「実はな、ガトウさんが瀕死の状態でアスナ達と別れた後にこんな事があつたんだ。」

当時、宝石爺は魔法世界の広域魔力減衰現象及び完全なる世界の真の目的について調査をしていたのだが、表立って行動するわけにはいかなかった。故に紅き翼の知らない所で暗躍していたらしい。また、同時に『黄昏の姫御子』の消息を掴むために紅き翼も同じく追っていたという。

そして、偶然にもガトウ達と一緒にいた『黄昏の姫御子』を発見したは良いも、瀕死状態の男を放っておくわけにもいかなかったので人命を優先したのだ。なお、ガトウは万が一に備えて『黄昏の姫御子』の行方に関する情報を執念で全て封印したので、結局その封印を解くのに時間がかかり、最近になってやっと麻帆良学園にいる可能性があるとわかったらしい。ちなみに、宝石爺は『黄昏の姫御子』の名前は知らなかった。

「それで、すぐさま治療が必要だったために魔法薬をありったけ使ったら不死ではないが不老になっちゃったってわけだ。」

………うっかりなのはわからないが。

とにかく、何とか一命を取り留めたガトウは宝石爺の計らいで魔術協会で『咸卦法』の講師をすることになった。究極技法といわれた『咸卦法』は人気はあったが会得している人物が少ないために講師できる存在が貴重とされていたからだ。歴戦の戦士であるガトウなら大丈夫だろうということで、生活を保障する代わりに魔術協会に所属することになる。もちろん、偽名でだが。

お互い、宝石爺と関わりあいがあったために行動を共にすることがあり、年の差はあるが千雨とガトウは友人となっていた。それまでに至るわけである。

「・・・・・・・・とまあ、こんな感じだ。」

「まさか、魔法協会以外にそんな組織が存在していたなんて・・・・・・・・」

「あ、間違っても誰かに漏らすなよ？下手な関わりあいを持ちたくないから私達は。」

「学園長にも内緒にしておくんだぞ、タカミチ。」

「わかりました・・・・・・・・ここまで聞かされて話すわけにはいかないですから。」

話は変わって、魔法世界の問題へと移る。・・・・・・・・この話はもう一つの本題ともいえる問題だった。

「アスナ嬢ちゃんが完全なる世界に奪われても、奪われなくても魔法世界は今、危機的状况なんだ。」

「どういうことだい？確かにアスナ君が彼らに利用されればかつての現象が再び起きてしまうのはわかるけど……………」

「何が起こっているの、千雨ちゃん？」

「……………これはアトラス院が出した予測したデータなんだがな、これによれば魔法世界は何も対処しなければ2012年に……………完全に滅ぶ。」

「……………え？」

つまりは後10年ほどで魔法世界は崩壊の危機を迎えるということだ。長いようにみえて10年なんて意外に短いのである。残された時間はほとんどないに等しかった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！！その話は本当なのかい！？」

「ああ、嘘偽りのない真実だ。このままでは確実に……………滅ぶ。」

「（このままでは……………？）」

身を乗り出して確認してくるタカミチと違ってアスナは冷静に思考していた。バカから天才へとクラスチェンジしたアスナは千雨の言

葉の意味を考えていたのだ。

「ねえ、千雨ちゃん。このままではって言ったわよね？……
ということは対処法があれば解決するってこと？……いえ、
質問を変えるわ。あるのね？」

「ビンゴだ、アスナ。」

あえて、千雨はこのままという言葉を使った。つまりはこのまま何も
もしないのではなく、対策を取れば……。千雨が知る対策を
取れば 魔法世界 の崩壊は回避されるという意味である。

「魔法世界 は言うなれば、バッテリーで動いている一つの機関
と考えてみてくれ。そして、地球は仮に永久機関で動いているとし
よう。」

「バッテリーはエネルギーが失われれば使えなくなる、ようは電池
の使用期限のようにタイムリミットがあるということだ。」

「なら、バッテリーから永久機関に取り替えれば解決するんだ。」

「そのためには 魔法世界 に住む全ての人々に 有限から無限へ
変更する という強力な妄想を認識させて妄想を具現化させること
と、地球からの魔力配給が必要になる。」

「だが、地球から世界を存続させるだけの、世界を一つ生み出すだ
けのエネルギーを一気に奪うわけにはかない。」

「そこで 並行世界 の存在がでてくる。 同じ存在 から少しづつ配給されればいいんだ。」

この案ならば確実に 魔法世界 の崩壊を防ぐことができる。
それだけではない、本来は 存在しない魔法世界の住人 まで独立した生命体として歩むことができるのだ。だが、問題は……

「完全なる世界はこの案を理解してくれないだろうな、あちらにはあちらの案があるみてえだから。」

何を仕出かすかはわからないがこちらの邪魔をしてくるのは確かだろう。それに対応するための戦力も必要になってくる。

「で、地球から魔力配給を受け取るためには麻帆良学園とオステイアを結ぶゲートがある『墓守り人の宮殿』を制圧しないといけない。」

「ここって、確か私がいた……………」

「ああ、かつての大戦が終結した地だ。ここでなければ計画は実行できない。」

「でも、確かここは完全なる世界が拠点にしていた地だったはず。もしかしたら今も……………」

「残党、それも幹部クラスは生きているだろうな。」

何時までもこの話をしてもいけないので、千雨は話を切り替える。

「高畑先生、あんたにはこちら側に来て協力してほしいんだ。あの学園で唯一私が知っている大戦の関係者だからな。」

「それに現在の麻帆良ではいけない。偉大な魔法使い云々よりも優先しないといけないことなんだ。」

麻帆良の魔法使いの今の考え方は正直危ない、正義や悪などという言葉に踊らされている。例えば、エヴァンジェリンなんて良い例だろう。

「うん、わかった。……蒼崎君、僕は今度こそ自分の意思で行動してみるよ。」

「……堅苦しいのはよしてくれ、千雨でいい。」

「んじゃ、タカミチ、アスナ嬢ちゃん、千雨嬢ちゃん……またな。」

ガトウは倫敦へ帰るために席を立つ。

「ガトウさん…………お元気で。」

「また、会えますよね?」

「大丈夫だよ、お前ら。会いたかったら何時でも会わせてやるって。」

「そうだぞ、千雨嬢ちゃんを通してくれればできる限り会ってやるってよ。」

「そうだ、これは永遠の別れではない……………今はただ暫しの別れ。」

ガトウは一人会計を済まして、静かに去っていった。

余談だが、アスナと千雨の二人にはパフェが、タカミチにはコーヒ―とアイスが注文されていた。

「どんだけ、ハードボイルドだよ……………と千雨は内心ツツ

コミをいていた。

贗作人格 - 終

贖作人格 - 終（後書き）

次章予告

烙印悪女・・・それは幸福であつた少女が歪められ、手に入れたしまった称号。

悪であることを押し付けられた少女は、『歪んだ正義』によって再び窮地に陥る。

だが、死神はそれを許さない。

第弐章 烙印悪女

彼女は本当に殺したのは一人だけ、ただ彼女は助けて欲しかっただけなのに命を狙われた。

さあ、死神よ。その剣で正義を断罪せよ・・・！！

烙印悪女 - 壱 (前書き)

やあ、みなさんお久しぶりです!!

とまあ、テンション高めに挨拶してみました・・・

ごめんなさい、更新が遅れて・・・

烙印悪女 - 壱

刹那 side

「——というわけで、バカレンジャーホワイトに就任おめでとうー!!桜咲さん!!」

明日菜さんから言われたその言葉を私は一瞬理解できなかった。

先日の授業内でのテストにおいて、つい最近までバカレンジャーレッドと呼ばれていた彼女は98点というたった一・二問だけ間違えた程度の点数を叩きだした。故にもうバカの称号は不要のものとなりバカレンジャーを引退することになったのだが、問題は新メンバー選抜だった。

——そう、私は今回の英語のテストで赤点を取ったのだ。

そのせいでバカの称号を欲しくもないのに手に入れてしまった私は明日菜さんと入れ替わりにバカレンジャー入りを果たしてしまった。当然レッドがいないのなら自分がレッドにでもなるのかと思っていたが、予想とは違い自身の禁忌の翼の色と同じ色を与えられシヨックに陥る。

「ちょ、ちょっと待ってください!!!明日菜さん!!!何で私がホワ

イトなんですか！？普通はレッドじゃないんですか！？」

別にどうでもことにむきになっていた私は彼女の口から思いもよらぬことを聞く。だって、イメージ的に白が格好いいと思ったからだ。

「ちなみにですが『太陽戦隊サンバルカン』ではレッドがNASAにスカウトされて交代になったという話があるです」

「……うん、そんな豆知識はいいんですよ綾瀬さん。というか、あなたは明らかに勉強できるのにしてませんよね？」

「まあまあ、別にいいじゃない桜咲さん。嫌なら次のテストを頑張ればやめられるわよ？」

簡単に言わないでください明日菜さん、こちらはただでさえ京都弁から標準語に変えるのに苦労したんですから。

しかし、明日菜さんは僅かの間にどうしてここまで成績が良くなったのだろうか……？何か秘訣でもあるのだろうか。

その後、学園の警備中に単語帳を持ち歩く刹那の姿が確認されたと

いう。

s
i
d
e

o
u
t

千雨
s
i
d
e

「やはり、ここにもないか………」

放課後を利用して、ある調べ事を図書館島で行っていた千雨は目的の本がないことにため息をつく。彼女が探しているのは「永久石化魔法」に関する資料であり、弟子のネギの村の人々を治す手伝い

になればと考えて探していた。

「……まあ、当たり前か。そこまで高レベルの知識本が一般生徒がギリギリ入れるところにおいてあるわけないか」

彼女がいるところは設置された最後のトラップがあるエリアであり、未だ図書館島探検部によって解明されていない場所でもある。そんな場所に千雨は易々と立ち入っていた。

「と、なると後は幻の地底図書室だけか……あるのはわかってんだけどなあどこにあるんだろ？」

頭をポリポリ搔いて悩む千雨。しばらく近くをうろついて考えているとふと通路に何かが落ちているのを発見する。屈んで掴んでみるとそれは……

「これは……金平糖？」

……何でこんなところに落ちているんだ？と思い解析してみると、つい数分前に落とされたものだということがわかった。しかも、まだまだ落ちているようだ。

「意図的に落とされたものか……いや、誘っている……」

・・・？」

また一つまた一つ拾っていくと今度は・・・・・・・・のど飴があった。

「おお、ランクアップしてる!？」

何でだよとまたしても思いながら同じように拾い進めていく。勿論せつかく手に入れたのど飴なので（袋には入っている）ありがたくなめさせてもらっているが。そして数分歩いているとそこには・・・・キャラメルがあった。

「柔らかくなった!？」

固いもの続きだったからだろうか、なぜか突然柔らかいものが出てきました。それに拾っていてわかったが微妙にハイ。ユウが混ざっていた。・・・・・・・・数が足りなかったのか？

その後もお祖父さんがくれた特別なキャンディとかウイスキーボンボンとか徐々にランクが上がっていくのを見届けながら歩いていると何もないホールのような場所に辿り着いた。

・・・・・・・・いや、何もなくなかった。中央には不気味なミイラっぽい小さな物体が鎮座していた。なんか名札がついているが名前か？ええと・・・・・・・・

「ウニャ・・・ニユペ・・・ギユウリュ・・・星人？」

なんじゃそりゃー！ー！？てか、言いくっ！ー！というか、何でここに置いてあんの！？意味あるの！？

何だかこいつが部屋の真ん中で鎮座しているのは耐えられないので、部屋の端にでも動かしておこうと持ち上げてみたのだが、次の瞬間

床が抜けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・へ！？」

足が地についている感覚がない・・・・・・・・つまりそれは・・・・・・・・
・落下するということ。

「え！？ちよ、ちよつとま——うあああああああああ
あああああああああああ！？」

結局、ウニャニユペギユウリュ星人を持ったまま地下へとダイブする破目になりました。

——パチパチと何かが爆ぜる音が聞こえる。

それはとても暖かくて濡れた体が乾くように感じる。何だろう、この暖かい赤いユラユラとしたものは………？

ぼやける視界のはつきりさせるため、ゆっくりと眼を開いていく。そして見えたものはそびえ立つ木々と……水に沈む本棚だった。

「………はぁ！？ちょ、ここ何処だよ！？」

先程落ちたという感覚は残っているのだが、ここにいるとどうもその感覚が薄れていく。というか、明らかにとんでもない高さから落ちたよな私。

「ええ、そうですね。確かにあなたは落ちましたよ隠し扉から」

「！？」

後ろを振り向けばローブを着た長い髪の……女と言われれば外見からしてそう見えなくもない男が（声で判断した）紅茶を飲んで座っていた。………傍らにはウニヤニユペギウリユ星人が何故かいるが。

「誰だあんた………」

「そう警戒なさらないでください、別にあなたに危害を加える気は

ありませんから。．．．蒼崎千雨さん？」

「．．．．．そういうアンタは何者で何ていう名前だよ？」

「私ですか？私はここで司書をしている者で．．．『クウネル・サ
ンダース』とでもお呼びください」

絶対偽名だろう、おい。何だそのフライドなチキンで有名なおっさ
んみたいな名前は．．．．．

「んで、ここはどこなんだよ。落ちたから地下であることはわかる
んだけどさ」

「確かに地下ですよ。ここは地底図書室．．．．．生徒の間では
幻とされている場所ですね」

ああ、やっぱりここがそうなのか．．．．．通りで本が水に浸か
ってるのに濡れてる様子がないわけだ。

「．．．．．で、クウネルさんよお、わざわざ菓子を落
つこととして誘導した理由を教えてくださいませんかね？」

これは千雨が一番訊きたかったこと。わざと誘い込むように金平糖
だの、のど飴だの落としてまでこの地底図書室へ向かわせた理由が
知りたかった。しかも、この男は魔法使いである。場合によっ

ては倒さなければならぬかもしれない。

「ああ、それですか？何故かと言いますとね、ちょっと頼みたいことがあるのですよ、魔術師のあなたに（……………）」

「ッ！……………何処でそれを知った？答える！！」

何故かこのクウネルという男は 魔術師 の存在を知っていた、それに自分がそうであることも知っていた。普通は自分から名乗るなどしなければ知りえないことなのに何故か。

「なに、簡単なことですよ……………ガトウからの手紙で知ったんです、ほら」

そう言つて、チラチラと手に持った手紙を揺らすクウネル。その手紙を受け取り確認すると確かにガトウが今使っている偽名と私の事が書かれていた内容があつた。

「なるほどね……………アンタが紅き翼の『アルビレオ・イマ』か」

「大正解です、蒼崎千雨さん」

聴けば訳あつてこの世界樹の下にあるこの空間で治療しているらし

い。何でも大戦後に重傷を負ったとか負ってないとか。まあ、ガトウさんの信用する人間なら私を陥れることはしないか。

「それで頼みたいことって何だよ。わざわざこんな回りくどい事するんだから相当なことなんだろう?」

「ええ、まあ。私が頼みたいのはですね……古き友人であるエヴァンジェリンを助けてあげて欲しいのです」

「エヴァンジェリンねえ……アイツになんかあったのか?」

「いえ、あったのではなくこれから起こりそうなんですよ」

過去形ではなく、現在進行形ね……。これは詳しく聞いてみるっきゃないな。

「実は先日世界樹前で行われた魔法先生と魔法生徒の会合があったのですが、それを覗き見していた生徒がいましてね……」

「それ絡みでエヴァンジェリンが狙われると?……」
「は、はん、そういうことか」

つまり、今回の依頼内容を訳すところだ。

世界樹前での会合を覗き見していた超一味が警告を受けたことにより、絡繰茶々丸で繋がっていたエヴァンジェリンが何か企んでいる

のではないかという噂が流れる。過剰に反応した自称正義の魔法使いの魔法先生達は図書館などで対吸血鬼用の魔法を調べ始めてしまい、このままでは能力を制限されたエヴァンジェリンが命の危機に晒されるかもしれないらしい。いくら不死といえど弱点は存在する、そこを突かれてしまえば危ないのだ。

「タカミチ君はあまり表立って動けませんしね。無論、私も動けませんしガトウも同様です。となれば、現在警戒が解かれているあなたなら大丈夫かもしれません」

「また警戒され直すじゃねえか……………」

せつかく、警戒を解かれたばかりだというのにまた警戒されるなんて御免だ。

「まあまあ…………何も全てを任せっきりにするつもりはありませんよ、陰ながらではありますが支援させてもらいますから」

「その中には事後のことも含まれているんだろうな？」

役目を終えたら、『はい、おさらば』なんて展開はよしてほしい。でないと、学園生活がエンジョイできないじゃないか。

「勿論です、その後も紅き翼の関係者ということで保護させていただきますよ」

「そいつはありがたい・・・・・・・・下手に手出しができなくなるかな」

こうして、アルビレオ・イマからの依頼を受けた私は同時に永久石化魔法についての資料を手に入れ図書館島を後にした。

s
i
d
e

o
u
t

「悪」とは何だろうか？

「正義」とは何だろうか？

それは誰にもわからない。

しかし、これだけは言えよう。

行き過ぎた「正義」は時に「悪」と見なされてしまうのだと・・・

少女はただその「正義」を殺す。

己の意思で、剣を振るって・・・

烙印悪女 - 壱 (後書き)

トリックネタでござめんなさい。

烙印悪女 - 弐 (前書き)

短くてごめんなさい。

烙印悪女 - 貳

千雨 side

「しかし、お前もよく引き受けたなその依頼を。下手すれば自分の首を一気に絞めかねんのだぞ？」

永久石化魔法についての資料を手に入れた私はその報告と『アルビレオ・イマ』からの依頼について伝えるため、母（橙子）に連絡していた。……。まあ、資料を手に入れたことは感心されたが、やはり依頼内容に苦笑されてしまった。

「わかってるよ母さん。でもな、ここで引き下がっていたら私がわざわざ麻帆良に帰^{はい}った意味がないんだ」

私が麻帆良にいる理由……。それは宝石爺や魔術教会から依頼のためでもあるが、個人的な理由として『麻帆良学園の体制を変える』ためだ。

自分は逃げたことで全てを失い新たな全てを手に入れることができたが、他の皆はどうだろうか？自分と同じような存在がいるかもしれないし、今いなくても後々現れるかもしれない。そんな時に今の麻帆良学園の状態ではまた同じ事の繰り返しになってしまうだろう、そうなってからでは遅いのだ。

だからこそ、私はここにいる。

「……………そうだったな、その為にお前は引き受けたのだから」

こちらの想いを理解してくれた橙子は、ただお前のやりたいようにやれと言って一先ず話を切った。そう、エヴァンジェリンを助けるために避けることのできない戦闘への準備をしなければならないのだ。

「一応、お前の希望通りの礼装になったが特殊すぎる仕様になっているからな、くれぐれも奪われたり調べられたりするなよ？」

「切れ端の一つも残すなってことだろう、わかってるって」

「明後日の土曜に黒桐にでも持たせるから受け取りに行け、追跡されぬようにな」

お前なら追跡されても簡単に撒くと思うがなと最後に言って橙子は電話を切った。

「まあ、今回の依頼は宝石爺やネギからも頼まれたからな、是が非

でもやらせてもらっさ……」

宝石爺からはエヴァを死徒二七祖の番外位としてだが迎え入れるように依頼され、ネギからは「エヴァンジェリンさんは悪い人じゃないから、重ねてお願いします」と簡潔に言えば守ってやってくれと言われたので今回の件と同時進行で行うつもりだ。

……さてと、とりあえずネットの更新でもやりますかね？

side out

……僕が出張に行っている間にとんでもないことが起こり始めたようだ。

エヴァに協力している関係の超君が魔法関係者の会合を覗き見していたことで、疑いの目がエヴァにまで飛び火してしまったらしい。多分、エヴァが超君を使って魔法関係者の動向を調べさせ、何かを企んでいると考えているんだと思う。エヴァはよっぽどの事がないと会合には参加しないし、あまり皆と関わろうとしないからね。

よくよく考えれば話が飛び過ぎな感じがするけど皆は『闇の福音』だからっていうことで片づけてしまっただろう。早急に対応しないと、いくらエヴァが不死だとしても封印状態なんだから取り返しのつかないことになるかもしれない。

そう思った僕は、まず千雨君にどうするべきか相談してみた。そうしたらこう言ったんだ——『こんな時こそ学園長に報告しろよ』と。

彼女も独自のルートからエヴァの護衛を引き受けたようで協力してくれることになったんだけど、彼女から提供された情報は思ったよりも深刻だった。何でも吸血鬼に関する資料を必死に調べる魔法先生の集団がいたらしい。……まさかと思うけどエヴァが何

も言わなかったら、疑わしきは罰せよってことで始末するつもりなのか？それは不味いな。

とりあえず、お互い情報交換をしながら独自に対応策を構築していくという話にまとまった。……まあ、結局は一緒に行動するんだけどね。

——そして今、僕は学園長に今回の件についての報告を終えたばかりだ。

「むう………まさかそこまで深刻な事態になっているとはのう」

事態が事態なのでいつものようにふざけた態度ではない学園長、近衛近右衛門は長い顎髭を撫でながら報告書に目を通す。

「今ならまだ未然に阻止することができますが………タイミングが早すぎますと逆に今後の連携に支障が出る恐れがあります」

千雨君は戦闘を避けることは不可能だと言っていた……つまり、ここで戦闘を起こしておかないと今の麻帆良は変えられないということなんだろう。

「そうじゃのう……ここは敢えて行動に移させてから阻止するしか方法はないようじゃ」

学園長もその考えに至ったのか決意を露わにする。その時は自分が直々に対処するつもりか……だが、それでは不味い。

「学園長が直々に出てしまつて対処されてしまいますと要らぬ誤解を生むかもしれません、ここは僕に任せてもらえないでしょうか？」

エヴァに操られているのでは？なんて疑心暗鬼になつた魔法先生に疑われては困るのだ。無論、僕もそうかもしれないがそれでも現場での皆からの信頼は高い方だし、学園ナンバー2は伊達じゃない。

「確かにそうかもしれないのう……うむ、わかつた！！今回の件は高畑君、君に一存しよう！！」

「……ありがとうございます。（これで少しはやりやすくなる。後は千雨君がどう動くかな……）」

見事、監視及び阻止役の役目を手に入れたタカミチは次に自分ができそうなことを模索しながら学園長室を後にした。

s i d e o u t

橙子 s i d e

「・・・・・・・・それで、久しぶりに会ったはいいが何の用だ式。子守りでもしてほしいのか？」

「違うよトーコ、ちょっと千雨の眼のことで話したいことがあるだけだよ」

晴れて一児の母になった式は実家に娘の未那^{まな}を預け、私の事務所である伽藍の洞を訪れて来ていた。・・・・・・・・しかし、訪れた理由が千雨のあの眼の事とは何かあったのだろうか？

「千雨の眼か・・・・・・・・あいつは大分扱いこなせるようになってきたがまだまだお前には程遠いぞ？」

「それはわかってる、そう追いつけるもんじゃないからな」

とつと話を变えるぞと式は言うとは本題を切り出し始めた。

「・・・・・・・・オレが言いたいのはいいつの 異常 専門の眼なら、ウェールズにいる弟子の奴の村人・・・・・・・・助けられるんじゃないかないか？って言う話だよ」

「!!!!・・・・・・・・それなら、お前にだって可能じゃないのか式。お前の眼は万物のモノの死が視えるのだからな」

一瞬驚くものの、そこで言い返せるのが橙子である。彼女は式の眼の特殊性を指摘した。

「確かに視えるけどさ．．．．．あいつは生物の死が視えにくい分やり易いと思うんだ」

万物の死が視える式と違って、千雨はまだ生物の死を完全には理解していない。精々薄らと「線」が視える程度なのだから。

「そうか．．．．．それは確かに言えるかもしれないな。生物の死を完全に理解していない千雨の眼だからこそ可能なかもしれない」

千雨の眼は 異常 ．．．．．魔法や魔術、気などに対してその効力を発揮する。ならば、永久石化の魔法や呪いでもいとも簡単に殺してしまうかもしれない。

「だからさ、今度の夏休みにウェールズに行く予定があるならあいつを連れて行った方がいいんじゃないか？」

「すぐに結論は出せんが．．．．．考えてみよう」

MM元老院の動きを見極めて行わなければ変に疑われてしまうから
など言って既に冷めきった日本茶を一気に飲み干すと、式はまた近
いうちに会おうと告げて出て行った。

s
i
d
e

o
u
t

「悪」を押し付けられた少女に刻一刻と「正義」の魔の手が忍び寄
る。

死神達は少女のために奔走するが果たしてその先に救いはあるのだ
ろうか。

少女の人としての人生が終わったあの日を知らないのならば、「正義」を語るべからず。

それでもなお、「正義」を語るといつのなら……

——私はその「正義」を殺しましょう。

烙印悪女・弐（後書き）

もうすぐバトルシーンです。

設定画も明日ぐらいにUPできそうです。

烙印悪女 - 参 (前書き)

予定では月姫編をこの後書くかもしれない。

そして、メルブラ編ですが・・・・・・シオンが壊れた。

なんか、ごめんなさい。

烙印悪女 - 参

千雨 side

——嫌な風だ。

意志を持っているかのように体に纏わりつく熱風は季節が既に夏であることを告げており、どこか不吉な雰囲気醸し出している。

——そう、まるでお化け屋敷のようだ。

夏らしさを持ち合わせているのに人に恐怖心を与えつけるという二面性を持ったあの魔窟に。

千雨は一人屋上へとやって来て学園を見下ろす。

学園祭が豪雨によって延期を繰り返し時期を変更せざる負えなくなつて早一ヶ月、彼女はただ只管に学園の動向を調査し続けた。・・・

・・・まあ、当然の如く結果は相変わらず「自称正義の魔法使いは『悪』の魔法使い討伐へ向けて準備中。」という内容になるのだが、それでもなお 問題のXデー へ向けて出来る限りの対策を練り続け、常時戦闘可能状態を維持した。

「———けど、あの使い魔まで作ったのはやり過ぎたかな」

橙子から教えてもらった影絵と映写機を用いた使い魔まで準備した千雨は苦笑する。いくら何でも人を食べてしまう猫まで作ることにはなかったなと。

彼女とて人殺しはしたくはないが、魔術師である以上命の駆け引きはほぼ日常茶飯事だと考えていい。もしの場合は是が非でも使わなければならないのだ。

願わくはそのような事態になりませんように、と祈りながら屋上を後にする千雨はふと空を見上げる。すると、いつもなら雲に隠れることなく地を照らしている太陽が徐々に隠れ始めていた。

「午後は降られるかな・・・・・・・・・・」

呟いてすぐに雨はポツポツと降り始めた。

s i d e o u t

ガトウ s i d e

「何！？アトラス院から錬金術師が麻帆良に派遣されるだ？」

俺は突如として宝石爺から来た連絡に耳を疑った。アトラス院と言えばエジプトに存在する三大魔術協会の一つであり、魔法世界が崩壊を開始する予測年数を出してくれた主に錬金術を学ぶために存在する機関だ。麻帆良のような魔法協会とは一部を除いて何ら関係がないはずだが、何故今になって錬金術師を派遣するのだろうか？

『ああ、そうじゃ。あそこの次期院長たつての希望でな』

「次期院長というと アトラシア か……………何だつて急に……………」

『何でも吸血鬼化した人間の治療を研究しているそうだな、あちら側の真祖として特異ケースなエヴァンジェリンに協力を頼みたいそうじゃ』

「吸血鬼化？……まさか、あの子か！？シオン・エルトナム・アトラシア……エルトナムスピリッツの！？」

エルトナムスピリッツ……それは一年前に起きた『タタリ討伐において俺が目撃した、半吸血鬼化した少女が起こした出来事の呼称だ。ふざけた名前かもしれないが（何せヴァステル弦楯騎士団団長が付けた名前だからな）、その時の出来事を的確に表した名前である。

そう、少女……シオン・エルトナム・アトラシアはタタリに噛まれてもなお戦い、そしてタタリをエルトナムの誇りにかけて

捕獲したのだ。

なぜ、倒せなかったのに捕獲できたかって？……これは噂なんだが、彼女の両親が全身全霊を尽くして一族を没落させた原因のタタリことズエピアに一泡吹かしてやろうと研究を積み重ね、《対タタリ用捕獲ネット・エルトナムスピリッツ》なるもの開発し娘に託して死んだらしい。なんじゃそりやと思うかもしれないが、現にそれで捕獲されて抵抗のできないタタリがシオンにフルボッコにされていたのを俺は見たんだ。なかなかシユールな光景だったが。

ちなみにタタリは現在もアトラス院の地下にある監禁室に監禁されているらしい。……2年後あんなことになるのは俺は思わなかったがな。

『そう言えばお主もあの現場に居合わせたそうじゃな、ガトウ』

「まあな、今鮮明に思い出したよ。……………で、何時頃あの子は麻帆良に行くんだ？」

『予定では八月頃に向こうへ行くらしいのう、あと確かウルスラの生徒として入ると聞いておるが』

となると、千雨嬢ちゃんの先輩になるってことが。

年の近い協力者がいた方が嬢ちゃんもやり易いだろうし、タカミチよりかは遥かに接触しやすい立場だから彼女の介入は都合がいい。

『ああ、そうそう。言い忘れておったが……………例の襲撃がもうすぐ起こりそうじゃ』

「まったく、麻帆良の馬鹿共は……………」

正義の魔法使いなんて目指している場合か、このご時世で。ガキじやあるまいし。

俺は宝石爺からの電話を切り、椅子へと深く座り直す。

「下らない偽善はもう懲り懲りなんだよ……………馬鹿共が」

右手を銃の形にすると麻帆良のある方角へ向けてバンスと撃つように振り上げた。

s i d e o u t

エヴァ s i d e

—— ああ、全く面倒臭いな。

侵入してくる西の連中を片づけながら私は思う。

来るのは雑魚ばかりで封印状態の私であっても簡単に倒せてしまえるぐらいだった。……まあ、激戦区なのはわかるがな。

あらかた侵入者を茶々丸と共に倒し終わると、ジジイへいつものように連絡を取ろうとした私であつたがふとおかしなことに気付く。

——念話が繋がらないのだ。

「茶々丸、ここら辺一帯に何か張られないか確認してくれ。すぐにな」

「……はい、マスター」

静かに頷く茶々丸が周囲の解析を始めようとしたその時、幾つもの魔法の矢が彼女たちに降り注いだ。

「な!?!」

「マスター!?!下がってください!?!」

間一髪で避けたものの明らかに今のは魔法使いが放つ魔法の矢であった。……つまりそれは、味方から放たれたものであることを示している。砂塵がおさまるとそこには取り囲むようにして魔法使いたちが構えていた。

「……………どういづつもりだ貴様ら」

さっさと帰って寝たかったエヴァは何時もより過激なこの嫌がらせに苛立っていた。

「フン……………どうしたもこうしたもない。貴様が超鈴音を利用して何かを企んでいるのはお見通しだ」

「しらばつくれても無駄だぞ？絡繰茶々丸を通して繋がっている貴様との関係は既に調べつくしてある」

「さあ、痛い目に遭いたくなかったら何を企んでいるのか吐いてもらおうか」

何だこいつらは？何を言っているのかさっぱりわからないんだが。
…………超を使って企んでいるだと？まさか、先日の会合を盗み見ていたあいつの事に私が関わっていると勘違いしているんじゃないだろうな。

名前も定かではない魔法先生の間をすり抜け、「正義」に執着しすぎてエヴァを危険視しすぎているガンドルフィーニが現れる。それだけではない、葛葉刀子やシスター・シャークティ、神多羅木や瀬流彦などの魔法先生と高音と佐倉、クラスメイトの刹那、龍宮のような魔法生徒までもがそこにいた。

「正直に話した方が賢明だぞ、闇の福音。でなければ我々は君を排

除する覚悟がある」

「賢明ねえ．．．．．私には貴様たちに話すことなどまったくないんだがな？」

「しらはつくれるのはいい加減にしろ、エヴァンジェリン！」

「貴女が何かを企んでいるという情報があるのは確かなのです。今まで大人しくしてきたとは言え、貴女は600万ドルの賞金首だった存在です」

だからこそ、危険だから排除するか．．．．．どう答えてもこいつらは私をこの機会に闇に葬るつもりなのだろう。

「だからどうした？ここで13年間も文句を言わず反逆もせず警備を引き受けてきた私が今更何を企んでいるというのだ、ええ？」

「そんなことは今はどうでもいいことです。さあ、はっきり話してください闇の福音」

「あなたの存在自体が皆を怖がらせているのですから、正直におっしゃったらどうですか？」

——ああ、もう頭にきた。

こいつらの「正義の魔法使い」気取りはもう末期のようだ、何を言

ったところで私を「悪」とみなし排除しようとする。私の13年間・
．．．．いや、約600年の孤独を知りもしない癖によくもまあ
堂々と言えたものだと思いつつ、私は臨戦態勢を取る。

埒が明かないことに痺れを切らした一部の奴らが魔法の矢を放った
のをきっかけに、2対大多数の偽善者共の戦いが幕を開けた。

s i d e o u t

千雨 s i d e

「ついに始まってしまったか……………」

「ああ、そうだね。…………正直あそこまで皆が馬鹿だったとは思わなかったよ」

世界樹前の広場を一望できる時計塔近くの建物の屋根には二人の人影があつた。勿論の事だが千雨とタカミチであり、視線の先には囲まれながらも奮戦するエヴァと茶々丸の姿が見られる。

「しかし、警備で魔力を消費した状態のエヴァンジェリンを強襲するとはなかなかえげつないことをするね、あいつ等」

「その癖自分たちは魔力を温存しているわけだ…………卑怯にもほどがあるよ」

もつとも卑怯な真似をする時点で正義を名乗る資格などないのだが、彼らは自己中心の塊なので気にしていないようだ…………本当にご苦労なこつた。

「明らかに劣勢だな……………」

エヴァを庇い、攻撃を受け止めた茶々丸が腕や足を損傷して吹き飛ばされる。一時的にエヴァの注意がそちらに向かったのを確認したガンドルフィーニは何やらスイッチのようなものを取り出した。

「・・・・・・・・何をするつもりなんだ？」

「・・・・・・・・ツ！？不味い、トラップだ！！」

「トラップだって！？——あ、あれは確か！！」

かつてナギがエヴァに使った手段・・・・・・・・ニンニクを大量に入れた水入りの落とし穴が戒めの風矢に拘束されたエヴァの下にあった。エヴァからどうやってナギにやられたかを聞いていたタカミチはそこまでやる魔法先生たちに憤りを覚えた。

「くそつ、そんなことをしてまで正義の魔法使いになりたいのか！！」

「状況的にヤバイな・・・・・・・・そろそろ仕掛けるか、高畑先生」

このままでは確実にエヴァは落とし穴に落とされるだろう、それだけは絶対にさせない。

「ああ、僕は茶々丸君をまず避難させる・・・・・・・・千雨君は——わかつているよね？」

「要は暴れてこいつてことだろ？わかつてるよ・・・・・・・・三十秒後にそちらの動きを支援する、いいな？」

「了解、君も気をつけてくれ」

お互いに頷き返すと千雨はコートの中の発煙弾スモークグレネードを握り締めて駆け出す。その後ろにタカミチは続く。

二人の怒れる修羅はただ一直線に少女達の下へ急いだ。

side out

エヴァ side

——くそつたれ、このままではあの時の二の舞ではないか！！

四肢を戒めの風矢で拘束され、抵抗すれば即座に落とし穴に落とされてしまう状況のエヴァは苛立っていた。

ドール契約をしている茶々丸は既に戦闘不能に陥っているため、この状況を打開してくれそうな存在はもはや誰もいなかった。ただ、この屈辱的な尋問を耐えるしかなかった。

「君とてそれに落とされたくはないだろう、素直に降参して隠している事を話してもらおうか」

ガンドルフイーニが銃を構えてエヴァに伝える。同様に他の魔法先生も杖や剣を構えていた。

——もはや万事休すか……………

いくら600年以上生きた闇の福音とも言えど、封印された挙句魔力不足・体力不足な状態で抵抗することは不可能だった。偽善者達に屈服するのはエヴァにとって避けたいことだが、このままでは命が危ない。

——一か八か適当に答えてやり過ごそうと決意し、口を開こうとした時突如として魔法先生たちの武装が宙を舞った。

「な、何だ！？」

「狙撃だ！！伏せろっ！！」

「何処からの攻撃だ！？」

それだけではない。ガンドルフィーニの足下に何か黒いボールのようなものが転がっていく……。それはどう見てもグレネードだった。

「——なっ！？」

思わず飛び上がった離れるが、その行為は意味を成さなかった。——なぜなら、そのグレネードは殺傷を目的としたものではなく、あくまで視界を塞ぐ物であったからだ。

「ちい、視界が——！」

「な、何も見えない——！」

他にも同様のものが複数撒かれていたようで周囲一帯は完全に黒い煙に包まれ、そこにいた全員の視界を奪った。

「何が起きているんだ……………」

エヴァもこの展開に驚きを隠せず、一人呟く。そしてふと茶々丸がいた場所に誰かがいるのに気づいた。それは髭を生やし眼鏡をかけたスーツ姿の男……………タカミチだった。

「（タカミチ……………？）」

タカミチは損傷している茶々丸を抱きかかえると木々を飛び越え去っていく。それを確認したエヴァも拘束していた戒めの風矢も同時に解かれ、もう一人の誰かに抱きかかえられる。顔は煙に隠れて見えないがオレンジ色のコートを着た女だということはわかった。

「……………大丈夫か、お姫様？」

コートの色に近い髪を持つその誰かは問う。その声は何処かで聞いたような声であり、彼女の周りだけ煙が晴れると顔が露わになる。

「き……………貴様は蒼崎千雨！？どうしてここにいる！？」

かつて麻帆良が犯した過ちの被害者である蒼崎千雨の顔がそこにはあった。

s
i
d
e

o
u
t

千雨
s
i
d
e

「き・・・・・・・・貴様は蒼崎千雨！？どうしてここにいる！？」

やっぱり驚かれたか。まあ、当たり前だけどさ。

「どうしてって・・・・・・・・アンタを自称正義の魔法使いから守っ

てやれと知り合いの爺さんと女顔のロリコンと弟子、その他大勢に頼まれたからだが何か？」

「魔法使いでもない貴様に何ができるというのだ！？というか、そもそも何で魔法使いの存在を知っている！？」

「さあな？……とりあえず、アンタの治療が先だ。ほれ、これを飲め」

高濃度の魔力を凝縮した血液に治療薬を混ぜたものが入ったフラスコを取り出すとエヴァの口へと無理矢理突っ込む。

「んんっ！？……んく……んく……んく……ぷはあ！！何をする！？」

「何をつて治療だけど？」

実際、先程までの傷はなくなっているし。

「確かに傷や魔力は回復したがやり方というものがあるだろうがっ！！」

そんなこと言っている場合か、まったく。

「こんな危機的状況でそんなことに時間をかけている場合か、バカ。とつと木の上にも避難してろ、後はあたしが片づけてやるからさ」

「片づけるだど……正気が貴様？」

はん、正気じゃない奴がアンタを助けられるかよ。

「敵はざつと30人ぐらいか……なら、余裕で大丈夫だ」

死者狩りに比べれば全然大したことない。

「……どこが余裕なんだ、ただでさえ私が苦勞したというのに」

「アンタとは違うし上手くやってやるから安心しろ」

デイスードをリアルブートし横一文字に一閃すると、煙に包まれていた空間が一気に消え去り魔法使い達の姿が現れる。千雨の姿を見た彼らに動揺の眼差しが見られるが彼女は気にせず宣言した。

「——さてと、偽善者共。お前達の正義を殺させてもらっぜ。」

死神による断罪の時間がついに訪れる。

s i d e
o u t

烙印悪女 - 参 (後書き)

カオスすぎてOTZ

次回は千雨無双です。

タカミチがベストを尽くします。

お楽しみに。

烙印悪女 - 肆（前書き）

次回で弐章は終わる予定。

シオン交流編を経て月姫編へ突入予定。

つまり、原作はまだ始まらない。

うおおおおおい！？

5 / 14 龍宮のセリフ等修正

烙印悪女 - 肆

世界樹前を覆っていた黒い煙は千雨のデイスードによって解かれると、その場にいた魔法使い達に千雨の姿を露見させた。

突如として現れた千雨の姿に驚きを隠せなかった刹那は橙色のコートを着た千雨に問う。

「蒼崎さん……何故ここに……?」

辛い過去を持った一般人だと認識していた刹那にとって千雨の登場は衝撃過ぎたのだ。それは龍宮にとっても、襲われていたエヴァにとっても同様だった。

「何故ってそりゃ、世界樹前で大人たちが堂々と金髪幼女をレイ……いや、リンチしていれば割り込みたくはなるだろうが」

「……蒼崎お前、今レ。プって言おうとしたらろっ」

「似たようなものだろう?それにお前ら生徒共だって傍から見ればいじめをやっているように見えていたぞ」

嫌だね、いじめとかリンチとかレイ。とかする奴らって。

「違いますわ！！私達はただエヴァンジェリンさんが素直に何を企んでいるのか答えてくれませんでしたから制裁を加えていただけで！！！」

ウルスラの制服を着た生徒・・・・・・・・高音・D・グッドマンが千雨の発言に抗議する。

「だから結果的に同じだろう？お前らの行動を簡潔に言えば『前から気に入らなかったし、話をしても答えてくれないから集団で殴ったり斬ったり撃ったりしました。』という具合になるんだからな」

「それは違う！！」

「今言ったことのどこが違う？・・・・・・・・違わないだろうが、お前らはエヴァンジェリンが疲労していたところを態々襲っていたじゃないか！！」

千雨はただ淡々と事実を突きつける。

最初から見えていた彼女にとって彼らの言葉は自分を正当化しているだけに過ぎないものなのだ。だから、外からの意見を一方的に突きつけ彼らの行動の矛盾を指摘していく。

「それにさあ・・・・・・・・お前らの下らない理想のせいで既に一人死んでしまっているんだが、また繰り返すのかそれを？」

「な、何を言つて……………」

「『長谷川千雨』……………かつてこの麻帆良学園にいた女子生徒の名前だ」

「……………!？」

千雨はかつての自分……………いや、今となつては完全なる別人の話を瞳を閉じて話し始める。

「彼女は何処かの誰かさん達が秘密を守るために張つた結界の効果をもつたく受けずにいたために、毎日毎日影響を受けていた周りの人間から苛められていた」

彼女は最初のうちはただ耐えていただけだったが次第にストレスを溜めていき、死のうとさえした。だが、普通に死ぬのならいずれ闇に葬り去られる事件と化すであろうと考えた彼女は家出を決意し一人で生きていこうとした。もっとも、いずれは死ぬ時が来るであろうと分かつてはいたが。

「そんな彼女を生み出してしまったにもかかわらず、その誰かさん達はその後も下らない理想を……………偽善を追い続けていた。そして今も……………」

10歳の時に吸血鬼にされてしまった一人の少女を理解しようとして

ず、「悪」だと決め込み殺害しようとしたな？と千雨は閉じていた瞳をカッと開き殺意の籠った視線を彼らに叩きつけた。

「し、しかし、現に闇の福音は何人も人間を殺している！！これを悪と言わずして何というのだっ！！」

「ふん……じゃあ、本当に『悪』かどうか試してやろうか。……エヴァンジェリン！！」

木の上に避難させたいエヴァへ向かって叫ぶ。

「な、何だ！！」

「ちょっとばかり降りてこい（面白いモノを見せてやるからさ）」

「！？……ああ」

エヴァが地に降り立つと共に千雨は、妄想を開始する。すると、世界樹前にいた全ての人間の足下に水が浸された。

「何だこれは！？」

「……水か？」

次第に水は足首まで浸かりそれ以上の水位の上昇を停止する。・・・
・・・ここからが本番だ。

「ご注文通り見せてやろう、エヴァンジェリンが果たして『悪』であるかどうかを！ー！さあ、裁きの時間だ（コキユートス）！ー！ー！」

千雨は両腕を高らかに上げ宣言する。・・・すると変化はすぐに訪れた。

「うわあああああああああ！？」

「あ、足が！ー！凍っていく！？」

「た、助けてく——」

「やめろやめろやめろおおおおおおお！ー！」

エヴァンジェリンではなく、先程エヴァンジェリンを悪だの何だの言っていた者たちが凍り始めたのだ。

「か、解呪をすぐにするんだ！ー！」

「だ、駄目です！ー！まるで効果がありません！ー！」

「そんな！？」

慌てて解除を開始したガンドルフィーニ達であつたが、全く効果は現れず凍つたままである。

「何をしたんだ蒼崎・・・・・・・・」

「簡単な話だ。これは コキュートス、地獄の最下層に流れる川で『裏切者』^{つみびと}が永遠に氷漬けされるものなのさ」

「コキュートス だと！？そんな馬鹿な！！」

「これが コキュートス だというのなら、何故エヴァンジェリンは氷漬けにされないのですか！？」

「そりゃ、私がエヴァンジェリンが氷漬けになる妄想をしていないからに決まってるだろうが。・・・・ま、それは言わないがな。」

「理由は簡単だ・・・・・・・・エヴァンジェリンが真の罪人、つまりは『悪』ではないからだ」

「ふざけるなっ！！そんな馬鹿な話があつてたまるか！！」

ガンドルフィーニが激昂し、銃とナイフを構えて千雨へと向かつていく。千雨さえ倒せば他の魔法先生を助けることができる考えたのだろうが、そう上手くはいかない。

「起動せよ（ブート・アップ）……………」

魔術回路を起動させ左手の「硬化」のルーンを刻み込んだ手袋と両足に千雨の蒼い色の魔力を集中させるとガンドルフィーニへ向けて駆けだしていく。

「なっ……………速い!？」

驚くのも束の間、一気に懷に飛び込んだ千雨はその左の拳を容赦なく腹に叩き込む!!

（ボキッ!!!）

アバラが折れた音がしたがそんなことは関係なしに勢いで吹っ飛ばすとは彼は木に衝突し動かなくなった。

「ガンドルフィーニ先生!？」

「メイ!! もはや情けをかける必要などありません、仕掛けますわよ!!」

「は、はい!! お姉様!!」

操影術とアーティファクトを駆使して千雨に襲い掛かる二人であったが……。「やかましい、寝てろ!!」の一言で後ろに回り込まれてしまい手刀を首に叩きこまれて気絶してしまふ。……・弱いな、おい。

「もう三人か……。（敢えてお前らを凍らせなかったが、この程度か）」

「はあああああああああ!! 斬鉄閃っ!!!!」

刀子がシャークティーと共に仕掛け、十字架剣が飛来し千雨が回避運動をとったところをすかさず刀子が斬鉄閃を放つ。

ガキーン!!!

しかし千雨は右手に手にしていたディソードを使ってその攻撃をいとも簡単に受け止めた。

「………フン、勢いだけ（……）はあるようだが、まだまだだな」

完全にデイスードの刀身を紅く発光させ、バターを溶かすが如く刀子が持つ刀の刀身を容易く真つ二つにすると、「ジグザウエルP226X-FIVE」と「パラ・オーディナンスP14-45」をスカートの中から引き抜き二人に向かって数発発砲する。

「………うつ!!」

「………かはつ!!」

殺傷性を取り除き、単純な威力と速射性を魔術で強化した9?弾と45ACP弾が腹部に命中するとシャークティーと刀子は崩れるようにして倒れる。

「シスターが殺人とかしようとするからこうなるんだ、バーカ」

ついでにけど、こんなだから離婚するんだよ葛葉先生?

「さて………あとは………おっ?」

神多羅木が勢いよく手首を振って『パチン!!』と指を鳴らすと鎌鼬の中に千雨は閉じ込められる。また、上空で待機していた瀬流彦がその中へ向かって魔法の矢を放った。

「見えない全方向からの攻撃に加えて魔法の矢の追加攻撃か……」

戦術としてはなかなかであるが……所詮は異常^{まほう}で構成された攻撃である。故に――

「……視えた!!」

蒼い瞳……異常に特化した千雨の『直死の魔眼』の前では意味をなさない。飛び上がりつつ左斜め上から右斜め下にある死の「線」を視認し斬り裂き脱出すると一直線に神多羅木の下へと向かい、強化された両腕を構える。

「脱出しただと……!!?」

ブルーサイズ・クレイモア
「蒼裂弾幕……!!」

一つ一つのパンチが弾丸のように飛び出し、神多羅木の四肢に次々に襲い掛かる。

この怒涛のラッシュパンチはかつて行動を共にしたバゼットの技を研究し作り上げた、プロボクサー並みの威力を持った攻撃であり、一撃でも受けてしまったら全弾が当たり終えるまで……いや、千雨が攻撃を止めるまで止むことはない。

「くっ……はっ!？」

大の大人であつたとしてもこの攻撃を全て防ぐことなどできはしないのだ。

一旦攻撃を止め神多羅木を解放すると千雨は距離を取り、上空にいる瀬流彦を見据える。

「……………。(ニヤ)」

「!？」

企むような笑みをした後、再び神多羅木へ向かって駆け出すと彼の肩を踏み台にして高く跳躍した。

「俺を踏み台にした!？」

「嘘でしょう!？」

まさかの行動に驚きを隠せなかった瀬流彦は防御することを忘れて隙を作ってしまう。そこに千雨は容赦なく付けこみ、一つの刃のように強化された右脚を炸裂させた。

ブルーサイズ・レイン
「蒼裂暴雨!!」

彼のスーツは腹部を切り裂かれ生身の腹を露出させる。衝撃を受け止めきれずに落下していく彼の下には神多羅木があり、二人は衝突して気絶した。

「これで残りはたったの二人か……まったく、これで正義を語るとかマジ有り得ないよなあ?二人共」

残された二人……クラスメイトである桜咲刹那と龍宮真名へ嘲笑うように語りかける。

「蒼崎さん……あなたは何者なんですか!？」

「僅か数分で先生達を全滅させた人間が一般人であるはずがない、
答える蒼崎」

自分達が「一般人」と判断した人間が自分達をここまで圧倒したことに衝撃を受けた二人は互いに武器を構え、咆えるように尋ねた。

「嫌だね。『長谷川千雨』を破滅させたお前達のような魔法使い達に誰が話すかよ」

「何を言っているんだ、さつきから……『長谷川千雨』はお前の事だろう？」

先程からまるで『長谷川千雨』の事を他人事のように話す元『長谷川千雨』のはずの蒼崎千雨に龍宮は問う。

「いいや、違う。『長谷川千雨』はもう既に死んでいる……今ここにいるのは『蒼崎千雨』という魔法使いを憎む者だよ」

「なら、何故魔法を使っているんですか!？」

「お前の言う『長谷川千雨』を破滅させた力なんだぞ？」

『長谷川千雨』を破滅させた力をあえて身に付け復讐しようとしていると勘違い(……)している二人は、今までの魔法(魔術)攻撃の矛盾を指摘する。

「……何を勘違いしているのか知らないが、私は魔法なんて一切使っていないぞ？」

「馬鹿なことを言っな．．．．．確かにお前の手足には魔力が籠
っていた！！」

「それを魔法と言わず何て言っんですかつ！！」

これだから頭の固い連中は嫌いなんだよ．．．．．まあ、魔術を
知らないから無理はないが。

「———少なくとも、それは君達が知らなくていい事だよ。桜
咲君、龍宮君」

「「！？」」

「あ、おかえり」

千雨にとってナイスタイミングで現れた人物．．．．．タカミチ・
T・高畑の登場に驚き刹那は堪らず叫ぶ。

「た、高畑先生！？確か出張でいらっしやらないはずでは！？」

「・・・・・・・・あぁ、それかい？嘘に決まっているじゃないか」

何を言っているんだという風にサラリと話すタカミチ。

「う、う、嘘お！？ど、どういことですか！！」

「・・・・・・・・あー、テンパっているところ悪いんだが、説明してやるよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ジト目で見つめる龍宮）」

そこから千雨のスーパー解説タイムが始まった。

超の覗きにはじまり、魔法関係者のエヴァ攻撃計画に至るまで全てまるっとごりつとすりつとお見通しであって、ちょうど今の麻帆良の体制が気に入らなかった千雨・タカミチ・あとその他の考えた計画によって今回の件は対処されるようになってました。という、わかりやすい説明によって二人は何とか納得した。

「・・・・・・・・つまり、私達の敗北は既に決定事項だったのか？（私と刹那に関しては敵意を向けてなかったが）」

「そうなるね」「そうなるな（ああ、クラスメイトだしなんか嫌々やってそうだったからな）」

龍宮とアイコンタクトを取りながら千雨はタカミチと共に返答する。

「そうなるねって……」

「……ちょっと待てタカミチ、私が襲われることもわかっていたのか？」

避難した後に茶々丸の様子を見に行っていたエヴァが帰ってきて尋ねてきた。

「ああ。だからこそ、こうして対策を練って行動に移したんだよ、他でもない友人の君の為にね」

「……それで、蒼崎は一体何者なんだ高畑先生？」

「私も聞きたいな……あの コキユートス とやはらは一切魔力が籠っていないものだったからな」

……流石、最強の魔法使い。既に分かっていたか。

「エヴァンジェリンにはまだ用事があるし、仕事上話してもいいが、桜咲・龍宮は駄目だ」

「……どうしてだ？」

「そんなに睨み付くんなよ、おい……。下手に私の正体を知るとな、命が幾つあっても足りない事態になるからだよ」

宝石爺とか母さんとか式さんとか・・・・・・・・その他もろもろの奴らが確実に襲ってくるだろう、うん。

「・・・・・・・・本当ですか？」

「本当の本当なんだよ・・・・・・・・最悪あの世行きかもしれないんだ」

「あ、これマジだからな？」

魔術は原則として秘匿するものだから、下手に知ろうとすれば本当にあの世へGO！！しなければならぬ。良い子は知ろうとするなよ？って感じた。

今回の事件で攻撃されなかった桜咲と龍宮が高畑先生と一緒にしぶしぶ帰って行くとエヴァが千雨に声をかける。

「・・・・・・・・ところで、この惨状はどうするんだ？」

エヴァンジェリンが指差した先には・・・・・・・・氷漬けにされた数十名、大きな木の下（世界樹じゃない）で寄りかかるようにして倒れているガングロ男、百合っぽい雑魚二人、服が穴だらけなシスター（笑）と離婚女剣士、十字架のように重なるヒゲグラと若い影薄男がいる。・・・・・・・・わぁー凄い惨状だぁ。

「・・・・・・・・・・ほっとく？」

「いやいやいや・・・それは不味いだろう」

「でも、アンタを殺そうとした奴らだぞ？」

「それはそうだが・・・・・・・・・・このまま放置して見つかったら本当に大変なことになるぞ？」

うーん、確かにそうだが・・・・・・・・・・ああ、そうだ。

「じゃあ、アンタが『私が許してやったから助かったんだぞ』と言えるようにしておこう」

片付けるついでに、こんな時のために用意した『今後エヴァンジェリンへの悪口を言ったり考えたりしたらトラウマが蘇り、下痢と頭痛に悩まされる。あとe t c・・・・以下略』という呪いを込めた弾丸を撃ち込んでやろう。・・・・・・・・・・オラオラオラオラー！！！！！！

バンッバンッバンッバンッ！！！！ジャキッ！！ガチャ！！バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ

バンッ！！！！ジャキッ！！ガチャ！！バンッバンッバンッバンッ
・・・・・・・・

「蒼崎・・・・・・・・もうそれ以上は止めておけ、えげつないぞ・・
・・・・・・・・」

「私は！！全弾撃ち終えるまで！！撃つのを止めない！！！！」

バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ！！！！ジャ
キッ！！ガチャ！！バンッバンッバンッバンッバンッバンッ
バンッバンッバンッバンッ！！！！ジャキッ！！ガチャ！！
バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ
バンッバンッ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・あと何個弾はあるんだ？」

「これが最後だが？」

一発だけ弾が入った『エヴァンジェリン用』と書かれているマガジ
ンを装填するとエヴァの腹部へ銃口を向ける。

「お、おい！？何をするつもりだ貴様！！」

「ん？プレゼントだけど？」

バンッ！！

エヴァジェリンに掛かっている呪いである「登校地獄」の鎖を、断ち切るようにして（「線」をなぞるようにして）銃弾は飛び出し、体を傷つけることなく背後の木へとめり込んだ。

「プレゼントって……今、何をした？」

「魔力抑制は流石に独断でやるわけにはいかなかったから、とりあえず『登校地獄』とやらを無理矢理解呪してみた！！（グッb）」

「……………え？……………」

「ああああああああああああああああああああ！！？」

世界樹前でエヴァの助けを求める叫びではなく、驚きを露わにした叫びが鳴り響いた。

その後の話だが、今回の件に参加していた（高畑先生を除く）魔法先生らに大幅の減給が、生徒に関しては謹慎処分及び反省文が言い渡された。また、図書館島地底図書室に隠れ住んでいた（許可は貰

っている）アルビレオ・イマやタカミチ・Ｔ・高畑らの助言により
事実上蒼崎千雨の行動は不問とされ、今後許可なく接触することを
禁じられた。

．．．．．噂によれば、その背景には第三者機関からの圧
力があつたというのが真実かどうかは定かではない。

烙印悪女 - 肆（後書き）

ああ、バイトがもうすぐ終わる・・・

早く決まっしてほしいな・・・

烙印悪女 - 終（前書き）

作者は腹を壊しました。

明日は何か知らないけど大学が5限まであります。

キャリア開発だとか・・・・・・・・

正直、必要なくね？

烙印悪女 - 終

近衛近右衛門 side

——まさか高畑君がこのような手段で事態を解決するとは思わなかった。

つい最近警戒を解かれたばかりの蒼崎千雨君が、ただの一般生徒ではなかった（・・・・・・・・・・）とのう。

それに驚くべきは 時計塔 聖堂教会 アトラス院 などの存在がこの世界にあつたことじゃ。聞くところによれば農ら達のような魔法使いとは違い、魔術師は彼らは『根源』なるものを、錬金術師は『未来』を計測することを目指し研究を重ねるという。

また秘匿のレベルにも違いがあり、こちら側は魔法がバレた際には記憶の消去などで済ましているが、最悪の場合彼らは命を奪ってでもその存在を隠すというのじゃ。

これだけでも開いた口が塞がらんほど驚きの情報じゃったが、一番関心すべきなのは 魔法世界の崩壊 問題への対策を行っていたことじゃ。崩壊予定年数・崩壊回避方法など我々がまったく考えておらんかったことを密かに研究し続け、既に計画へと移し実行開始していたとのう・・・・・・「偉大な魔法使い」になることに浮かれていた農達とは大違いじゃった。

「——今回の事件はアンタ達『魔法使い』の傲慢さが引き起こしたんだ、その所ちゃんとわかっているよな？」

高畑君と一緒にソファーに腰掛け、紅茶を片手に蒼崎君は鋭い目つきで儂を見据えて問うた。

「うむ、君の件から今回の件に関しては全て儂の判断ミスじゃったわい。本来なら儂ら自身で解決すべき問題じゃったのに苦勞を掛けてしまつてすまんのだ」

「……まあ、学園長がそう言うならいいんだけどさ。あとは——モンスターティーチャーモンスターチルドレン魔法先生と魔法生徒の指導だな、問題は」

「二度と今回のようなことが起きないように徹底しなければなりませんよ、学園長」

「わかつておる……じゃが、具体的にどうする？すぐにでも彼らの認識をどうにかする方法は……」

「無理矢理な手段なら既に実行したが……時間がかりすぎる。」

呪いの弾丸だけでは十分な効果を得られるまで物足りないのだ。それを補うために何か別の策を講じる必要があった。

「……やっぱり、アレ（……）を使うしかないんじゃない

かな。千雨君」

「え．．．．．アレ（．．）か？．．．．．。　（ガタガタガタガタ！！）」

「ど、どうしたんじゃ蒼崎君！？」

アレ（．．）と聞いて突如として震えだす千雨。．．．．．まあ無理もない、以前タカミチとアスナと共にやったアレこと『影響ゲエム』でかつてないほどの口では言い表せないトラウマを背負わされたのだから。

「いや．．．．．何でもない、何でもないんだ。うん．．．．．確かに．．．効果は有りそうだな」

「．．．．．というかさ、僕達だけあんな目に遭うのはおかしいと思うんだ。だから余計に味わってもらうべきなんじゃないかな？」

「．．．．．フッフ、そうだよなあ．．．．．よくよく考えたらそうだよなあ？」

「．．．．．あははははははははは！！」「．．．．．ふははははははははは！！！」

二人とも目からハイライトが失せ、狂ったように笑い続けている。

「の、のう高畑君に千雨君……その腹黒そうな顔はやめてくれんかのう？」

うん、それ無理♪

その後夏休みの間、特別版『影響ゲーム』を強制的にプレイさせ続けられた魔法先生と魔法生徒は阿鼻叫喚の中で『もう二度とエヴァンジェリンを襲ったりしません、許してください……』と涙ながら何度も何度も呟き続けたという。ちなみに刹那や真名の二人は通常版の『影響ゲーム』をプレイしそこそこ参っていたぐらいであった。

エヴァ
s i d e

「——で、お前は麻帆良から逃げた後に蒼崎橙子という魔術師の女に拾われて娘にしてもらい、『仕事』の為に魔術師として麻帆良に舞い戻って来たということなんだな？」

「まあ、掻い摘んで話すとそういう事だな」

午前中にジジイへの説明を終えたという蒼崎はわざわざ私の家へと訪れ、アイスクャンディー片手にこれまでの経緯を説明し始めた（何故か茶々丸は同席を拒まれたが、別にいいだろう）。正直、魔法使い以外に魔術師などという存在がいたことには驚いたが、実際に戦いを見た拳句に目の前にいるのだから納得してしまった。

「第二第三の私のような存在が現れてしまったら、今度こそ言い逃れのできない事態になるだろうしな」

「……確かに、いくら何でも隠し通せるのには限界というものがある」

蒼崎の言う通り、これ以上の問題が起こった場合は隠し通すことができず、外部に漏れてとんでもない事態になってしまっていただろう。

「とまあ、ここまでが個人的な理由だが、『仕事』上はさっき言った魔法世界の崩壊に対する警戒態勢を作り出すことが理由だ」

「最短で2012年だったか……それまでに対策を取ると

なると偉大な魔法使いなんぞに時間をかけている暇などないな」

「ああ、だからこそ今回の事件で『悪』に対する認識を改める必要があったんだ」

「……………どういふことかは知らないが、蒼崎は私の過去を全て理解しているらしい。恐らく記憶でも覗いたのだと思うが、何も知らずに襲ってくる馬鹿共に比べれば遥かにマシなので特に咎めはせん。」

「あとは……………そうそう、アンタに渡すものがあるんだった」

羊皮紙で書かれた2つの手紙を小さめのトランクから取り出すと私に手渡してくる。

「……………これは何だ？」

「一つは真祖と死徒の混血である血と契約の支配者 アルトルージュ・ブリュンスタッド、もう一つは私の上司的な存在で『宝石爺』と呼ばれている魔道元帥こと キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ からの手紙だ。多分どちらも同じような内容だと思うぞ？」

「……………どうやら吸血鬼の成り立ちからして全く違うらしいな」

「そうだな。元から吸血鬼なのが真祖、その真祖に噛まれたもしくは研究の果てになったのが死徒、そして死徒に噛まれた者は死者・・・・ゾンビみたいな存在になるって感じた。ごく稀に死徒に噛まれて死徒になる奴もいるらしいけどな」

ということとは私は蒼崎達の立場から見れば死徒に分類されるわけか・・・・そいつらと違って太陽の光や吸血衝動は克服したかな。そう思いつつ手紙を開いて読むと、書いてあったのは吸血鬼化治療薬の開発の為に錬金術師が派遣されることと死徒27祖とやらの番外位として加えさせてもらうという任命書めいた内容だった。・・・番外位って他にもいるのか？

「いるよ、遭ったことは流石にないけどさ。・・・確か名前は ミハイル・ロア・バルダムヨオン、通称『アカシャの蛇』、『転生無限者』の名を持つ厄介な死徒だ」

「転生無限者・・・・？」

「転生無限者っていうのはその名の通り自身の魂を情報化して転生を繰り返すんだ。現在じゃ転生体は17代目まで真祖の姫君が狩ったらしいが、今でもどこかで18代目が存在しているらしいぞ？」

まさか一年後にそのロアにエンカウントする破目になるとはこの時千雨は予想だになかったが、単体で戦うわけではないので一先ず安心である。何せ真祖と三人目の死神が共に戦うのだから・・・・・

「そんな奴と同じランクとは……………」

「まあまあ、そう落ち込むなって……………。そいつは死徒の間では嫌われているけど、アンタは逆に好かれているんだからさ、な？」

「そう言われれば悪い気はしないが……………」

「（というか、実際二人が戦ったらどっちが勝つんだろう……………・転生とか抜きで）」

相手は転生体の身体能力によって強さが変わるので、どれぐらい強いかは定かではないが経験の差からいったらロアが勝つ可能性は高いなと思う千雨であった。

「ところで、昨日も聞いたがあのコキユートスは何だったんだ？ 魔力で構成された氷ではなかったのはわかったんだが……………」

「……………。ああ、アレか。アレはだな……………。何と説明すればいいんだろうな」

自分でさえ全てを理解するのに時間がかかったギガロマニアックスの能力について、いざ説明するとなるとどう話してよいものかと迷う千雨はとっさに考え付いたことで話してみることにした。

「……………そうだな、ここに今私が舐めているアイスキャンデーがあるだろう?」

「ああ、確かにあるな」

「つまり、これは私とエヴァンジェリンに『ここにアイスキャンデーがある』と認識されたから存在するんだ。……………だが、もしその認識が意図的に認識させられたものだったらどうする?」

「……………うん?どういうことだ?」

「わかりやすく言うとだな、エヴァンジェリンが認識したアイスキャンデーは私が見ている幻覚、いや、している妄想なのかもしれないってことだよ」

モノが存在していると認識されるのには自身だけではなく第三者の立ち合いが必要であり、第三者が自身と同じくそのモノを見ることができたのならば「モノが存在している」という証明になるのが一般常識だ。しかし、ギガロマニアックスは自身の妄想……存在していないモノをディソードを通じて相手（第三者）の脳の死角部分通称『デッドスポット』へ流し込んで認識させることができる。結果、存在していないモノは存在していることになるのだ。

「……………まさか、お前は自身の妄想を他人に認識させることができるってものか?」

「そのまさかだよ……………その為に必要なのがこれさ!」

何も存在しない空間から何かを引っ張り出すような動作をすると、
たちまち昨日の紅く発光した片刃の大剣が現れた。

「アーティファクト……いや、違うなそれは」

「これが、私のようなギガロマニアックスと呼ばれる存在がディラ
ックの海に干渉し妄想を具現化^{リアルブート}するために必要な端末、ディソー
ドだ」

「ディラックの海……聞いたことがあるぞ……確か、負
のエネルギーで一杯に満たされた観測不能の境界面だったな？」

「よくご存じで。ちなみにだが、これは強力な負のエネルギーでで
きているからどんなものだろうと断ち切ることができるぞ」

なるほど……だから葛葉の奴の刀があんないとも簡単に折
られ、馬鹿共が一斉に凍りついたのか。

他にも不可視状態にできる（ギガロマニアックス同士でなければ見
えない状態らしい、というか他にいるのか？）ことを聞いた私はそ
ろそろ本題について切り出すことにした。

千雨 side

「ん？どうやって登校地獄を解呪したかって？」

「そうだった！！私が13年もの間苦しみ続けてきた登校地獄をなぜあんな簡単に解呪できたんだ！？」

おおう、えらい気迫だな……………

無理もないか……………卒業できずに何度も何度も卒業のたびにクラスメイトに忘れ去られ、一人で生活してきたんだからな。思えば私より酷い扱い受けてんじゃない……………

「……………単刀直入に言えば、魔眼を使った」キリッ

「あっさり言うな、お前……………って、お前は魔眼持ちなのか

！？」

「ああ、何でか知らないけど家出途中に事故に遭って目覚めたら覚醒していた」

「何なんだその魔眼は……（先天性のものではないのか……）」

呆れられているけど事実なんだから仕方がないじゃないか。別の言い方でどう説明しろというんですか？

「で、何ていう魔眼なんだ？」

「直死の魔眼、別名 バロールの魔眼 の劣化版だ」

「ば、バロールだとお！？あの一睨みで相手を殺せるというあれか！？」

「そうだけど、流石に睨みじゃ私のは殺せないぞ？死に関する情報……まあ強いて言うなら弱点が「点」と「線」で視えるだけだ」

式さんのは生物（有機物）も無機物も関係なく視えるが、私のは無機物（魔力とか気とか）がよく視えて有機物が「線」のみだけだ。この差からして正直、私は式さんには絶対に勝つことはできない。

「では、神多羅木の鎌鼬を破れたのは……」

「死の「線」を視たからだ。私の眼はな、魔法とか気みたいな異常に特化しているらしくてはつきりとよく見えるんだ」

試しにエヴァンジェリンに魔法の矢を一本放ってもらうと、私は青白く光る魔眼を発現させテーブルに置いてあつた果物ナイフで一閃して『殺した』。

「残留する魔力すらないとは………本当に『殺して』いるのだな」

「お分かりいただけて何よりだ」

他にも魔力抑制は私の眼でどうにかできないかと聞かれたが、流石にそこまでやってしまえば私の麻帆良でのエンジョイライフが許可なしの接触が禁止されている馬鹿共にならずかでも阻害されるかもしれないので丁重にお断りさせていただいた。その代わりと言っては何だが、私の弟子ことネギ・スプリングフィールドが父親に代わって魔力抑制については何とかすることを伝えてやったのだが……

「何っ！？ナギの息子がお前の弟子だと！？」

「ああ、ぶっちゃけ母さんの三番目の弟子だな。ちなみに私は二番目だが」

「何だってそんなことになったんだ……」

「んーとな、何でも村が襲撃された件について自分なりに考察して修行してたら、優秀な講師が欲しくなったらしいぞ」

そこでかつてあったというウェールズ出身の魔術師こと玄霧皐月の事件で、橙子と繋がりがあったメルディアナの校長が橙子に依頼して魔力行使の指導や戦闘訓練を積ませることになったのだ。

「自分の生い立ちも自分なりに理解しているようだし真面目でいい奴だったな、ネギは」

……なんか剣術バカになっていたけどな。

「……ナギとは大違いだな」

「うん、どちらかというと母親似だからな、あいつは……」

「さてと・・・・・・・・長話していたらもうこんなに時間が経ったな」

外を眺めれば既に空は夕日が上っており、カラスの鳴き声が所々で聴こえていた。

千雨は帰り支度しつつ、周囲の警戒を行い異常がないことを確認するとエヴァに向かって心配そうに言った。

「まだ昨日の今日だから何があるかはわからないけどさ、何かあったら遠慮なく呼んでくれよ」

「わかっているさ、蒼崎。魔力が元に戻るまで出来るだけあてにさせてもらっからな？」

「はは、別にいいけどあんまりこき使うなよ？」

「・・・・・・・・さあ、それは約束できんな？」

「フフフフ・・・・・・・・・・」

「ハハハハ・・・・・・・・・・」

互いに冗談を言い合い笑顔を向けた後、千雨が玄関ドアのノブに手を触れて捻ると夏の空気を感じさせる襲撃前とは違った優しい風が

体を包み込んだ。

それは何処か心地よくて、まるで新たな一步を踏み出した少女達を祝福するようにただ吹き続けていた。

——
帰り道の間、ずっと……………

烙印悪

女 - 終

烙印悪女 - 終（後書き）

次章は短いかもしれません。

しかもパロディもの？

次回、「黒銃のシオン」編でお会いしましょう。

・・・ネタはわかるよね？

黒銃ノ紫苑・壱（前書き）

そつだよ、緋弾のアリアのパロディだよ!!

で、あとは黒歴史的魔法少女アニメが出てきます。

あえて言うておきますが、夜のシオンさんはキャラが壊れます。

批判は受け付けませんので、あしからず!!

黒銃ノ紫苑・壱

——あなたは飛行機に乗ったことがあるだろうか？

この質問をされたら一般人は普通に「YES」と答えてしまうだろうな。多分予想しているのは「普通に」搭乗席に乗っているという意味だろうからな。

——質問を変えよう、あなたは「飛行機」の操縦桿を握ったことがあるか？

もしあなたが操縦士ならこの問いには「YES」と答えられるだろうが、一般人にとっては限りなく「NO」だ。そもそも、触る機会なんて絶対がない。

.....まあ、私がつまり何を言いたいかというとだな。

現在進行形で飛行機の操縦桿を握らされております。

「・・・・・・・・千雨！！滑走路が見えました！！」

「やつとかよ！！」

隣の席に座る紫がかった髪を持つ少女が成田空港の滑走路が見えたことを伝えたのに叫ぶように返事をする、着陸態勢に入るために機体を安定させ車輪を展開し始める。

「あーもう、何でシオンさんを迎えに行ったらこんな事に巻き込まれるんだよ！？しかも操縦とか有り得ねえだろっ！？」

「仕方ないでしょう！！客席で転がっている彼ら（テロリスト）が機長達を負傷させて操縦できなくしたんですから！！」

幸い機長達は腕を撃ち抜かれただけであり意識ははっきりしているのだが操縦は不可能という状態に陥ってしまい、また客の中に操縦経験者がいないため、しかたなしにとある事情で関わってしまった二人・・・・・・・・千雨とシオンがオートパイロットを用いながら操縦することになってしまったのだ。

二人がなぜこんな状況に立たされているかと言えば、原因は2時間

前に遡る・・・・・・・・

千雨 s i d e

ロンドンの方で仕事を終わらせたシオンをそのまま日本へと迎え入れるためにロンドン・ヒースロー空港に向かった千雨は、着替えを最低限しか持っていなかったシオンを引き連れて手頃な価格で手に入るオシャレな服を何着か買い揃えた後、日本（成田）行きのJN402便へと二人で乗り込みスヤスヤと眠り込んでいた。

「・・・・・・・・ふわあ」

安眠用に付けていたアイマスクを外しつつ、小さなあくびをして起きた千雨は服が乱れていないか確認するために薄い毛布を取り払う。彼女が今着ている服装・・・・魔術礼装（半袖ver）を取り払った黒いサマーセーターに真紅のミニスカートという姿が徐々に現れようとした時、ふと膝に違和感を感じた。・・・・こう、重たい何かが置かれているような感覚があるのだ。

「ん・・・・？」

気になって一気に毛布を引きはがすとそこには――膝を枕代わりにしスカートの中に顔を埋めるド変態・・・・もとい、シオンがいた。

「うおい!？」

近くの乗客を起こさぬように小さな声で驚きを露わにすると、もぞもぞとスカートの中が動き問題の彼女の顔が出てくる。

「・・・・・・・・」

「あ、おはようございます千雨」

しかも、呑気に挨拶をしてくる様である。

「…………おはようじゃねえよ。何で何時の間に人の膝で寝てんだ！？それにスカートの中に顔を突っ込んでんなよ！！？」

「……………？何か問題でもありますか？」

首を傾げ「何を言っているんですか？」とさも当たり前のように返事をする白いフリル付きYシャツに紫のネクタイ、黒いミニスカートに黒ニーソという服装のシオンは紅い瞳で千雨を見つめる。

……………実はこの人、タタリを監禁して影響下から離れているため吸血鬼としての吸血衝動が現れていないのだが、何と代わりに夜になると変態衝動……………いや、性欲が急激に高まり異性であろうがなかるうが気に入った相手を襲うようになるのだ。一応最低限のTPOは守るらしいのですがすぐ淫行に走るという展開になることはないのだが、今回のような行為を当たり前のようになるようになる欠点がある。

「大アリじゃボケ！！いくら親しいからって膝枕を当たり前のようにさせるなよ！！！」

「じゃあ、抱き枕ならいいですか？（真顔で）」

「何言つてんだアンタ！？そういう問題じゃねえよ！！！」

そもそも真面目な顔で言う事じゃないだろうが！！

「……………では、百歩譲って耳かきとかしてくれませんか？（顔をめちやくちゃ近づけて）」

「全然譲ってないから！！何で私が耳かきサービスしないといけないの！？」

ていうか、顔近いんだよ！！はあはあすんな！！！！

「……………仕方ありませんね、枕代わりにするのは耳かきはやめましょう」

「やっとわかってくれましたか……………」

「ですが、その代わりに——キスしません？」

「ちよつ、顎に触んな！！クイってやんな！！脱がそうとするな！！胸を触ろうとするな！！！！！！」

随分前にリースバイフェさん（被害者）から聞いていたが、ここま
で『夜の狂った性欲』が酷く悪化しているとは思わなかった。ナイトオブ・インザニティ・エロス「気を付けるんだ、千雨……………シオンはあの日以来進化し続けている！！夜は……………何としてでも乗り切るんだぞ！！」と合流前に貰った連絡の意味がようやく理解できたよ。

必滅のアイアンクローで客席にシオンを叩きつけ暴走を止めると一

先ず時間を確認するために時計に目を向ける。

「到着まで後三時間か……………」

「戯れるのには十分な時間ですね、じゅるり」

「戯れねえよ、涎を拭けやコラ」

ポケットからハンカチを取り出し、シオンに渡そうとしたその時――

バンッ！！！！

「……………全員動くな！！」

「……………！？」

四人組のアホ．．．．．つまりはテロリストがワルサーP99、ワルサーPPK、コルト・ガバメント、IMIウージーを携えて堂々とハイジャックをしゃがりなさったのです。

「．．．．．ええー」

「よくもせつかくのスキンシップを．．．．．（怒）」

「そんなこと言ってる場合か、エジプトニーソー!」

もう一度アイアンクローをかましてシオンを元に戻すと犯人に気づかれぬように戦闘態勢へ備える千雨であった。

s i d e o u t

とまあそんな訳で、現在操縦室に二人、客室に二人テロリストが居るわけだが……………

「（やつべ……………拳銃、コルトS・A・Aしか持ってねえよ……………）」

「（そんな装備で大丈夫ですか？）」

心の中で千雨はいつも愛用している二つの拳銃を持ってこなかったことを悔いた。

『コルトS・A・A』——通称ピースメーカーと呼ばれるシングルアクション式回転式拳銃で保安官がよく愛用したことから人気が高く、様々なバリエーションが存在する西部劇を代表する拳銃である。そして千雨が持つ銃弾のタイプは「.38S&P」という日頃使っている9?より大きくと45ACPより小さい大きさで、ルーンがそれぞれに刻み込まれている。また二つの銃弾と同じく殺傷性は取り除いており、装填時に属性効果を任意でカスタマイズすることができるという利点を持っている。

魔術礼装 黄昏 をどさくさに紛れて装着した千雨は内ポケットで何時でも引き抜けるように備えてると、先程から目を瞑ったままのシオン（通常モード）に小さく声をかける。

「（なあ、どうだ犯人達は……）」

「（危険な状態です。感情が若干高ぶっており、場合によっては負傷者を出しかねない事態になりそうです）」

シオンが自身の持つエルトナム家に代々伝わる『エーテライト（ミクロン単位のモノフィラメント）』と千雨の思考盗撮を駆使し犯人達の思考を探っていた二人は軽く溜息をつく。

「（……どうやら、私たちが打って出るしかないようだな）」

「（ええ、そうですね。早急に対処しなければ最悪の場合墜落もあり得ますから）」

できればそうなってほしくないものだが、犯人達の性格からして操縦している機長達が狙われる可能性が一番高い。何としてでも客室の二人を撃破し操縦室へと向かわなければ大変なことになるだろう。

「（とりあえず弾は風属性で不可視化しつつ重ねて『視えない』と認識させれば後々面倒なことにならなくて済みそうだ……）」

「（では、私が二人の動きを止めますから千雨は前を、私は後ろを

片づけますので………」

綿密に打ち合わせ、お互いカウントを開始する。

「（10、9、8、7、………」

グリップを握りしめて前方を見据え、いつでも駆けだせる体勢をつくる。

「（6、5、4、3、………」

対するシオンもエーテライトを構え前方と後方を念入りに確認する。

「（2、1、………ゼロ！！）」

——その瞬間、二人が駆けだす。

「何をしていつ『黙りなさいっ！！』！？」

シオンが事前に犯人に設置しておいたエーテライトを起動させ硬直

状態を作り出す。

「か、体が動かねえ!？」

「何やってんだ、早く撃てよ!？」

混乱する二人を余所に千雨は瞬時にコルトS・A・Aを――
――コートに戻した。

「……いや、ただ戻したのではない。ちゃんと、撃ってから
(……)コートへ戻したのだ。

この技の名は「不可視の銃弾」^{インヴィジブル}、千雨が風のルーンを銃弾に刻み込んだからこそ使える技である。

故に銃弾が撃ちだされたことに気付いていない………気付けない犯人は、三発の銃弾を喰らい地に倒れ伏す。同時に後方にいる犯人もシオンの激しい蹴りによって戦闘不能に陥っていた。

「………ただ銃を持っていれば強いわけじゃねえんだよ、クソ野郎」

犯人が所持していた拳銃を押収すると、近くにいた乗客に頼み拘束用ロープを用意してもらう。その際何者かと問われたが、武術に心

得がある者だと適当にごまかしておいた。

「千雨、急ぎましょう」

「ああ、わかってる」

乗客の安全を確保した二人は操縦室に突入しようと移動を開始するが、ここで予想していた事態が起こってしまう。……。そう、操縦室の方から銃声が聞こえたのだ。途端に高度が落ち始め、前方が下に傾く。

「ちい！！やっぱり撃ちやがった！！」

急いで機体の体勢を立て直すため操縦室へ向かうと、そこには左腕を撃たれた機長と右腕を撃たれた副機長が血を流していた。犯人達は突然現れた千雨達に驚きつつも銃を構える。

「何だお前ら！？」

「うつせえよ！！」

操縦室内で銃撃戦を行うわけにもいかなかったので凄まじい速さで跳び蹴りを顔面に喰らわせ卒倒させると、先日ガンドルフィー二に喰らわせたアバラ粉碎パンチをもう一人へ向けて放つ。

「ゲフツ!？」

スローモーションで客室へのドアに激突していくの犯人を確認するまでもなく、シオンが治療をしている機長達に代わり操縦桿を握って高度の安定を試みる。

「くっ………うおおおおおおおおおっ！
！」

必死の形相でレバーを上げ、なんとか機体を上昇させるとコントロールシステムを確認する。すると、ある場所に銃弾がめり込んだいた。

「げ………!?オートパイロット壊れてんじゃねえか!？」

「すまない!!どうやら私に当たった銃弾が貫通してしまったみたいなんだ!!」

負傷しながらもベテランそうな機長が叫びながら謝罪の言葉を口にする。

「くそっ、手動でやるしかないっていうのかよ!!」

「千雨、私がサポートします！！安心して下さい！！」

機長達にこちらの事情を簡単に説明したシオンが副操縦席に座るとアイコンタクトを取る。

「（速く思考を読み取ってください！！彼らの知識が今は必要です！！）」

「（！！・・・わかった！！）」

キャビンアテンダントに介抱されている機長達の思考を盗撮しながら機体のシステムチェックを行う千雨は燃料漏れが発生していないことを確認し安堵する。

「とりあえず墜落フラグは回避されたか・・・シオンさん、成田との通信回線を開いてくれ！！」

「了解です・・・・・・繋がりました！！」

『——こちら成田コントロール、JN402便どうした？』

「こちらJN402便！！エマージェンシーだ！！現在ハイジャックにより操縦士が負傷、代わりに知識のある私達が操縦している！！犯人は既に拘束済みだ！！」

『何っ！？他に怪我人はいるのか！？』

「いや、今のところは機長達だけだ！！応急処置はしたが操縦は困難だー！！」

『・・・・・・了解した、JN402便。ところでシステムトラブルは発生してないか？』

「いや、オートパイロット機能が使用不可になったただでエンジントラブルなどは起きていない」

『ということは手動で操縦しているのか・・・・・・JN402便、こちらが全力で誘導する、安心して着陸せよ』
サポート

「JN402便、了解」

一旦通信が途切れると『ふう・・・・・・』と溜息をつく千雨だが、その後も緊張しっぱなしの状態で2時間ほど操縦し続けた。

パチンッ!!

——その後の話をしよう。

結果的言えば、着陸は無事に成功した。

別にミサイルでエンジンをやられたり、防衛省が誘導と言いつつ墜しようとしたりすることなかったため着陸による怪我人はゼロであったのだが、テロリストにジャックされながらも無事着陸したのでニュースになり、危機を救った二人の少女がいたと話題になってしまった（勿論匿名にして、記憶の操作済みである）。

……まあ、操縦していた私とシオンさんは拘束される恐れがあったので、着陸前に仕事の関係で知り合った（コネを作った）FBIやら公安さん達に連絡を取り安全かつ迅速に麻帆良へと向かえるように手配してもらってなんとか到着したのだが、本当に疲れた。

そももって今はエヴァンジェリンの家にいる。

「あ~~~~暫く飛行機は見たくねえ~~~~!!!!!!」

「夏休み入って早々災難だったな蒼崎？」

災難なんてレベルじゃねえよ……そもそも何で中学生の私が飛行機なんて操縦せねばならんだ！！！！

「飛行機に乗ったことがないアンタには言われたくないよ……」

「まあそう落ち込むな、陰ながら報酬は出たんだろう？」

確かに今回の件の功労者（私とシオン）については表向きには存在を秘匿されたとはいえ、裏ルートから多額の謝礼金が支払われていた……VIPでも乗っていたのだろうか？

「……出ていてもあんまり嬉しくねえな」

「そうか？貰えるモノはありがたく貰っておくのが筋だと思うがな」

「大魔法峠」をソファーに横になりながら観賞しつつポテチをポリポリ食べるエヴァはそう答える。

「……何でアンタはよりもよって肉体言語系魔法少女を見てんだよ、おい」

「ああ、これか？タカミチが『お説教』^{はなし}用に買ったらしい作品でな、
気になって観てみたんだ」

そういえば、夏休みは絶賛お説教期間でしたね。高畑先生、教材集
め（おしおきどうぐあつめ）頑張ってんな

「それはそうとアトラス院の錬金術師とやらと私はいつ会えばいい
んだ？」

「彼女もこちらで生活するのに準備がいるし、一週間か二週間後にな
るだろうな」

私も転校手続きとか云々に付き合わないといけないからな。

「ああそうだ……先に言っておくことがあったんだが……
……」

「ん、何だ？」

シオンの事を考えていたらどうしても伝えておかないといけないこ
とがあったのに気付いた。そう、それは――

「……夜はシオンさんと絶対に行動するな、色々と大切な

ものを失うし疲れるから」

「・・・・・・・・・・は？」

リースバイフェと私からの忠告をエヴァにも伝えておくことである。

エヴァが啞然とする中、テレビではちょうど次期女王候補権を巡って倒壊寸前の校舎を背景に地面で格闘戦^{サブミッション}をやっている少女が映っていた。

黒銃ノ紫苑・壱（後書き）

さあ、地獄^{バイト}を始めよう………

なぜか初日は9:30〜18:30といいつじめ。

せめて午後からにしてくれや。

黒銃ノ紫苑・弐（前書き）

久しぶりにネギ君登場。

そして、この世界の第四次聖杯戦争の真実（笑）が明らかになる！！

更新遅れてすみません。

黒銃ノ紫苑・貳

千雨 side

魔法先生や魔法生徒が強制的にトラウマ系魔法少女アニメを観せ続けられて数日が経ったある日、一通りシオンに道案内を終えた千雨はとある用事で麻帆良大学情報通信学部の研究室を訪れていた。ちなみに工学部ではないのはやはり超を警戒しているからであったりする。

コンコン・・・・・・・・

「あー、倉橋くらはしさんはいますかー？ 蒼崎ですけど・・・・・・・・」

静かにドアをノックして時計を見ながら待つこと1分。

ガタツガタガタガタ！！ガツチャーン！！ゴトツ！！ズズン・・・・・・・・
・・ジャー・・・・・・・・「にゃー！？」

途端に中で何かが壊れたり倒れたり流れたりする音が響き、猫のよ
うな叫び声が聞こえたが………何なのだろうか？

「ひゃ、は、はい！！ちょ、ちょちょ、ちょっと待ってください
ねー！！！！」

「そんなに慌てなくていいですよ………」

ドジっ子口調でそう返事が聞こえると苦笑しながら千雨は待つ。し
ばらくして、軽く白衣をはだけさせ目が前髪で隠れている若干小柄
の少女……倉橋来未^{くらはし くるみ}がひょっこりと現れた。

「う、ごめんね、千雨ちゃん！！徹夜で開発に勤しんでたら寝ちゃ
ってて！！」

「あ、いいですよ、別に………って、それよりも何でそんな
短いスカートなんですか？」

「へ………？」

彼女が何気なく視線を向けた先にはパンツをギリギリ隠すことがで
きる程度の短さのミニスカート（たぶん、革）があり、なおかつ太
ももを覆い隠すほどの白いオーバーニーソックスが異性を卒倒させ

るような色気を放っていた。……あれ、先輩からなんか変な匂いがするが気のせいかな？

「ああああー！ー！ー！つ！？こ、これにはわ、わ、訳があつてね！？」

「……訳があるんですか、そうですか（またいつものアレだよな？）」

「う、うんうん！！そうなんだよ！！」

必死に手を振って何かを隠そうとしている倉橋の思考を軽く読み取ると、かなりピンクなお花畑が見えたのですぐさま中止する。というか刺激が強すぎた。

「さいですか………まあそれは兎も角、頼んでおいた例のアレ……完成してますか？」

「ああ……アレだね、完成してるよ？ちゃんど、千雨ちゃんの注文通りの特別仕様にしておいたから！！」

そう言っただけからともなく蒼い小型トランクを取り出し千雨に「はいどーぞ」と可愛らしく微笑みながら手渡すと、早速千雨は仕上がり具合を確かめるべく中身を確認する。そこには、一見「ただの橙色の携帯電話」に見える携帯電話とUSBサイズのイヤホンマイクが納められていた。

「これが・・・・・・・・・・」

「現代科学と魔術を融合させた新しい『魔術』のカタチだよ。・・・
・・・といつても、これは戦闘用のタイプじゃないから戦闘用のと
比べて少し劣るけどね」

「それは承知ですよ・・・・・・・・でも、情報戦には強いんでしょう？」

「うんうん！！そのとおり！！通常なら電波が届かない場所であっても問題なく使えるしエネルギーも消費しないし、どんな妨害も受け付けない次世代コンピュータが積まれているからね！！」

「それはたとえ超のものであってもですか？」

「当ったり前だよ！！いくら世界の各国が未だ開発できていない人並みの人工知能を備えたロボットが造れるからって、彼女が完璧超人ではないんだよ」

「『優れた才能を持っていたとしても、それが完璧な人間である証明ではない』ですね」

よく来末が口にする言葉・・・・・・・・『優れた才能を持っていたとしても、それが完璧な人間である証明ではない』には「この世に完璧な人間などいない、ただ単に能力が秀でている人間がいるだけだ」という意味があり、自身の能力の^{ちから}意味を再認識することができる千雨のお気に入り言葉だ。

「千雨ちゃんは最強ともいえる空想具現化マイブル・ファンタズムに対抗できる可能性を秘めた妄想具現化リアルブートを使えるけれども、弱点は存在するもんねー？」

「ええ、数えたらどのくらいあるのかわかりませんが、確実に存在するのは確かです」

たとえ食べ物の好き嫌いであつてもそれは弱点に含まれるはずだ。故に私はそこそこ強いだけの人間であつて、最強の人間ではない。

「だから彼女（超さん）がどれほどの知識と技術を持っていようが、必ず対抗できる弱点という名の隙が存在するんだよ」

「今回は特に超が知らない 魔術 や 超能力 などがその隙ということですかね」

「そゆこと」

來未はウインクをして冷たいレモネードを一気飲みする。

実は來未くみさんは超に匹敵するほどの隠れた天才であり、こちら側の人間……つまり魔術師だ。

別に「根源」を目指しているわけではなく、彼女は……彼女のー

族は魔術を「社会に適応させる事」を目的としているという変わった考えを持っていて、発明品のなかには魔術回路を携帯電話内に構築し、通常は膨大な詠唱時間を要する強力な魔術でさえもごく僅かの間に発動することができるようにしたものなどがある。以前は某小さくなくなった高校生探偵が使う麻酔銃やツボを刺激してキック力を強化するシューズなんて造っていたこともあったりしたものだ。

ちなみに來未さんとの出会いは遡ること4か月前……つまりまだ入学して間もない頃であり、まだ魔法先生・生徒がピリピリと私を監視していた時であった。それ以前から密かに麻帆良の動向を調べていた來未さんは行方不明になり突然姓を「蒼崎」に変えて帰ってきた私の情報に耳を疑ったという。

「蒼崎」といえばミス・ブルー、ミス・レッドと共に名のある魔術師（魔法使い）を生み出した一族であり、そんなに同姓はいない珍しい名字である。また、「蒼崎」を保護している「両儀」といえば四大退魔の一族であり、表向きはお金持ちの日本武家として有名であり同じく珍しい名字である。そんな二つの一族と関係していると分かった時点で彼女は私が「魔術師」であると考え接触して来たのだ。

結果は見事ビンゴであったが、まさか宝石爺とも繋がっているとは思ってもしなかったらしい。それ以来、倉橋の魔術師の特性上協力者として行動するようになり拳銃のカスタマイズなど装備面での支援を行ってくれるようになった。何故か性的に興奮すると天才性が発揮されるという奇妙な能力を持っていたりするがあまり詮索しない方が身のためである。椅子が濡れていたとしても変な匂いがしていたとしても絶対に詮索してはいけない。

一言二言話した後、高畑先生から「バトルしようぜ!!」的な連絡を受け模擬戦を行うことになったため研究室を後にした。

目指す場所はエヴァの家……弟子のネギが絶賛引き籠り修行中のダイオラマ魔法球をエヴァも持っているので使うことになったらしい。……ついでにシオンさんも誘っておこなかな？

s i d e o u t

エヴァ s i d e

「まさかいきなり吸血鬼・・・・・・・・いや、死徒を紹介されるとは思わなかったぞ？」

「ああ、ごめん。詳しい経緯を話すの忘れちゃったな」

タカミチとダイオラ魔法球内で拳と拳による肉体言語・・・・・・・・もとい、模擬戦を終えた蒼崎に先程まで話していたシオンの事を話す。どうやらシオンは死徒といえど27祖ではない吸血鬼であるらしく（以前話した死者にならないケースだな）、彼女自身の先祖が27祖の一人・・・通称タタリだという。

「いや、本人から詳しい経緯は既に聞いた。どこまで協力できるかわからないが出来る限りの事はするつもりだ」

「そうか・・・・・・・・で、夜の件は聞いたのか？」

「まあな、お前の言っていた意味がよくわかったよ・・・・・・・・」

既に（セクハラの）被害者が出ていたとはな・・・・・・・・それも友人を（性的な意味で）襲うとは・・・・・・・・

「もしシオンさんがその状態になったらアイアンクローでも何でもして頭を叩きつけて気絶させるよ？大抵はそれで治るから」

「テレビの直し方か!？」

「簡単に言えばそうだな」

それでいいのか！？・・・・・・・・・・思えばこいつの知り合いは変人が多いな、特に吸血鬼とか。

「失敬な・・・・・・・・・・私にだってまともな知り合いぐらいいる！！・・・・・・・・・・と思う」

叫んだと思ったら急に落ち込んだ？

「どうした？急に落ち込んで・・・・・・・・・・」

「いや・・・・・・・・・・まともな知り合いが数えるほどいなかったことに気が付いた。（幹也さんぐらいか、まともなのは・・・・・・・・・・）」

「蒼崎・・・・・・・・・・」

やっぱり変人しかいなかったのか、お前の知り合いには・・・・・・・・・・

「（・・・・・・・・・・どうして來未さんやシオンさんみたいな変態の知り合いができてしまったんだろう）」

蒼崎はこの後ずっと柱に手をついてひたすら落ち込んでいた。・・・

・・・勿論フォローはしたがな？

side out

ネギ side

「・・・・・・・・何処か剣を発注できる所はないのかな？」

ダイオラマ魔法球内の草原の中、使いすぎて脆くなった西洋剣を前に少年は胡坐をかいて悩んでいた。

「並みの剣じゃ困るしな．．．．．先生に電話してみようかな？いや、先生は先生で忙しいと思うし．．．．．ここは千雨さんに頼んでみよう！！」

心の故郷である日本にいる頼れる姉弟子に連絡を取るべく携帯電話を取り出すと、目にも止まらぬ速さで電話番号を打ち込みコールする。

『．．．．．はい、もしもし．．．何か用かネギ？』

「ど、ど、どうしたんですか、千雨さん！？声が震えています具合でも悪いんですか！？」

『いや．．．．．何でもないよ、知り合いの変人ぶりに頭抱えていただけだからさ．．．．．ハハハハハ』

「そ、そうですか、わかりました．．．．．それはそうと、ちょっと頼みたいことがあるんですが少し時間良いですか？」

『頼みたいこと？言ってみるよ』

「はい．．．．．実はですね――」

剣術の鍛錬のやり過ぎで剣が脆くなってしまったこと、新たに剣を注文する必要があることを簡潔に述べると千雨さんは唸りながらこう答えた。「とりあえず日本に来い」と．．．．．

『たまには息抜きに旅行でもしろよ、引き籠ってないでさ。旅行ついでに剣を頼めばいいだろう?』

「……確かにその通りですね、籠りっぱなしは逆によくありませんもんね」

『発注先には心当たりがあるからすぐに連絡を取ってやる、ネギは最低2週間の滞在を考えて準備でもしておけよ?』

「はい!!ありがとうございます!!」

『じゃあ、日本に来たら連絡寄越せよ』

千雨さんとの通話が切れると荷物を整理し外へ出る準備を開始する。

「日本か……早く行ってみたいな」

鼻歌まじりにそう呟くと額から垂れる汗を拭い、作業へ没頭するネギであった。

s i d e o u t

千雨 side

「———という訳なんだけどさ、引き受けてくれないかな志保さん？」

『うん、別にいいよ』

ちょうど折り畳み式のナイフが欲しかった私は宝石爺の関係で知り合った「刀匠・衛宮」こと、衛宮志保さんに連絡を取ってみた。

日本人であるのに赤毛が特徴的な彼女は魔術師の中でも特殊な存在であり、『剣』の投影魔術に特化しているためその才能を活かして剣を鍛えている。彼女の師匠である『エミヤシロウ』の指導の下で鍛えられた剣は達人でさえも唸らせるほどの出来具合で、通な人間のなかでは高値で取引されているほどだ。

『刃はどうする？西洋剣みたいに両刃型？』

「いや、片刃型が良かったって言うていたはずだ。今まで使ってたのは止む負えずの物だったらしいからな」

剣で魔力を通しやすいものを選んでみたもののネギの膨大な魔力に日を追うごとに耐え切れなくなり、結局使い物にならなくなったのだからこの際希望通りの剣を瘡えわせてやろうと思う。

『細かい注文とかある？』

「魔力と気が効率良く伝達できて最大限魔力を開放しても壊れにくいもの。できれば材質はレアメタル系で、鞘付き」

『うーん………やってみるだけやってみるけど、あまり期待はしないでね』

無理な注文かもしれないがそこまでしなければ、この先来るであろう完全なる世界との対決で大変なことになってしまう。

「それは承知だよ………ただ、ネギはそう遠くない未来で因縁の存在と邂逅する。そんな時に鈍らな剣じゃ不味いだろ？」

『完全なる世界か………確かにそうだね、主戦力になる人間の武器が途中で壊れたら士気が下がっちゃうし………』

「隙を付け込まれて、あの世行きかもしれないからな」

主戦力といっても、何もネギだけが戦うわけじゃない。魔術協会に働きかけてそれなりの戦闘準備を行っており、現在では魔法世界で活動するための戦艦の建造が急ピッチで進まれているはずだ。魔術協会が一番乗り気だったのは確か……ロード＝エルメロイⅡ世だったかな？

『あと、MM元老院のこともあったよね………やつぱり排除なの？』

「……状況によるってさ。まあ、膿とも言うべき奴らは排除が決定されているけど」

特に反アリカ派の連中だな……ネギの村を襲った俗物達は必ず消さなくてはならない。物騒な話かもしれないがそうでもしなければ魔法世界の崩壊は回避できたとしても国の未来は崩壊してしまう。

『……話し合えば楽なのに、何で欲に囚われて戦うことしかできないんだろうね』

「全くその通りだ……ちつとは自分達以外のことぐらい考えてみるってんだ」

過去を欲望を割り切らない奴には未来は紡ぐことなど出来はしない。二人だけでなく魔法世界崩壊阻止計画に参加しているメンバーは皆そう思っていた。

『それじゃ、完成次第追って連絡するから楽しみに待っててね』

「了解。ネギも旅行てがらに受け取りに行く予定だから、よろしく頼みます」

『はい♪』

志保との会話後、買い物から帰ってきたエミヤシロウと衛宮切嗣と世間話を交えつつ麻帆良の現状を伝え終わると、喋り過ぎでカラカラになった喉を潤す為に別荘内の台所へと向かった。

s i d e o u t

NGシーン

「・・・・・・・・何処か剣を発注できる所はないのかな？」

ダイオラマ魔法球内の草原の中、使いすぎて脆くなった西洋剣を前に少年は胡坐をかいて悩んでいた。

「並みの剣じゃ困るしな・・・・・・・・先生に電話してみようかな？いや、先生は先生で忙しいと思うし・・・・・・・・ここは千雨さんに頼んでみよう！」

心の故郷である日本にいる頼れる姉弟子の下へ行く為に目にも止まらぬ速さで転移魔法を発動させると座標を宣言する。

「転移座標固定！！目標・・・・・・・・千雨さんの隣！！」

その瞬間、ネギは光に包まれ消えた――

そして。

「ん・・・・・・・・・・・・・・・・？何だこの膨大な魔力量は！？ま、まさか・・・・・・・・・・」

突如として右隣に高魔力を感じた千雨はすぐさま巧みなステップで離れる。すると、その刹那――

ド――――ン！！！！！！

爆発ともとれる轟音と共にそいつは・・・・・・・・・・どや顔で現れた。

「到着！！」キリッ

「到着！！・・・・・・・・じゃねえよ！！」

ブンッ！！とネギの後頭部目掛けて拳が放たれる。しかし・・・・・・・・

・・・

「風牙絶咬!!」

風のように瞬速で駆け抜けてネギは攻撃を回避し、千雨と距離をとった。

「何っ!?!」

「フツ・・・・・・・・甘く見ないで下さい!!」

「いやいやいやいや!!何でナギの息子が此処にいる!?!」

「あ、どうもエヴァンジェリンさん、初めまして。ネギ・スプリングフィールドです」

丁寧に向き直ってお辞儀をするネギ。流石は英国紳士だ、礼儀がなっている。

「あ、ああ・・・・・・・・これはご丁寧に、って違う!!貴様、何時の間に日本に来た!?!というか何故此処にいる!?!」

「転移魔法ですっ飛んできました」

「何で!?!」

「いや、剣が寿命を迎えてしまっ………（以下略）」

「普通に電話しろよ!!」

「そもそも不法入国だぞ!？」

「それを言ったらアンタもだろ………（戸籍も本当だったら大問題だし）」

「まあまあいいじゃないですか………」

「お前が言うな!!」

何はともあれこうして剣を注文することになりましたが、新たな悩みが増えてしまったのでしばらくエヴァと千雨は胃が痛くなつたさ。

[illegible]

（主に宝石爺が頑張った）第四次聖杯戦争 結果報告

・勝者なし
(強いて言うのなら生存者全員)

• 死亡者

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト（説得に応じず、我欲の為に聖杯を求めたために衛宮切嗣によって殺害される）

間桐臓硯
(遠坂及びアインツベルンによって暗殺される↓これに

より事実上、マキリは完全に絶えた)

雨生龍之介 (キャスターの動きを察知した切嗣によって殺害される↓同時に家族を殺害された。志保を保護、養子とする)

概要

数多の平行世界で行われた聖杯戦争のデータから、この世界の聖杯は第三次時のアヴェンジャー召喚により汚染されていると確定した。宝石爺はまず遠坂に聖杯の破壊を命じた。また、元凶であるインツベルンに説教ともいふべき説得で事情を話し聖杯の破壊を要請(なおその際、平行世界の聖杯戦争の記録を包み隠さず公開した)。当初は渋っていたインツベルンだったが宝石爺が気に入らなかつたマキリの非道から襲撃を提案し、マキリの魔術知識を遠坂と共に分割・共有することを条件に協力を宣言した。(これによりマキリは第四次聖杯戦争不参加が決定、桜は平和に暮らしましたとさ)

そして衛宮切嗣であるが、宝石爺の『この馬鹿者があああああああああああああ！貴様の願いは誰かや何かに叶えてもらい達成するものではない！！どうしても叶えたいなら自分自身の手で、世界に抗いながら勝ち取れ！！』という某アジアで負けたことのない人のような説教……つまりOHANASHIと遠坂によって召喚されたアーチャー『エミヤシロウ(答えを得たver)』、自身が召喚したセイバーの存在によって聖杯で世界平和を成すことを断念、聖杯破壊派の主戦力として活動する。(その後ウェイバーは説得に応じたが、ケイネスは拒否したためにソラウに裏切られ脱落した。)

アサシン（捨て駒）・キャスター（マスター死亡）・バーサーカー（自己犠牲）の脱落により聖杯出現ポイントが判明後、各員が被害が拡大しないよう対策を取りつつ総攻撃し聖杯は完全に破壊された。（各サーヴァントはマスターの魔力で存命し、数年後とある人形師によって受肉した）

聖杯戦争に巻き込まれた少女——。志保は衛宮切嗣の養子として引き取られ、平行世界の自分『エミヤシロウ』によって魔術を教わることになった。現在、兄と姉が兄弟シロウ イリヤにいる。（なお、セイバーはセイバールトの記憶を所持しておりシロウと婚約した。当初、士郎「アーチャーだということに驚いてはいたが」）

ウェイバー・ベルベットはソラウの保護下に入りつつ、ロード「エルメロイエエ世と呼ばれるようになるまで成長した。（イスカンダルのオタクぶりには日々頭を悩ませているが）」

ソラウはランサーに英雄としてではなく一人の人間として生きてほしいと願い結婚した。（神父はエセじゃないキレイな言峰綺礼が引き受けた）

以下略。

……つまり第五次聖杯戦争はこの世界では起こらない、全ては宝石翁の活躍によって。

黒銃ノ紫苑・弐（後書き）

コジマのバイトが忙しい。

レジ打ちは何とか慣れた。

でも、水曜日の二時限目（物理入門）をスーツで受けることになってしまった。

着替える暇がないからね！！

多分もう一、二話はさんで月姫編突入予定。

ネロアさん涙目確定。

黒銃ノ紫苑 - 終（前書き）

さらに久しぶりの刹那&真名登場。

完全にネタ回。

影響ゲームの内容がとてつもなくやばかった。

黒銃ノ紫苑 - 終

刹那 side

—— 屈辱だ。

神鳴流剣士、桜咲刹那は一人唸る。

何が屈辱かと言えば、ここ数週間で強制的にプレイさせられた『影響ゲム』で散々被害を受け続けたことだ。

『叫ぶ技名が中二病っぽい名前になる（半年）』に始まり、『髪が腰まで伸びる』『オシャレが無性にしたくなる』『近衛木乃香を見ると顔が赤面する（照れ）（3か月）』『いかがわしい夢を見るようになる（1か月）』『私がガンダムだ！』と起きる時に叫ぶようになる（1週間）』『絵を描くと画伯と何故か呼ばれるようになる』『ウサエルのストラッププレゼント！』など意味不明なマスに止まると本当にその通りになってしまい、現在私はとあるデパートのファッションショップで白いワンピースを試着中である。

……ああ、あと、呪いのせいで髪を切ってもすぐ伸びてくるので下していたりするのだが。

「くっ……な、なぜ私がこんな目に……」

自然に体が動いてしまって、鏡にはセクシーポーズをとった自分が映る。いや、本当に自分は何をやっているんだろうかと思うのだが、まったく体は動いてくれない。

「さ、さ、さつさと会計を済ませて帰らなければ要らぬ誤解を生む
！！」

一度着てしまったのだから買っしかないと考えた（というか、強制的に買わされる）刹那は決意とともに動かせるようになった体で数着の服を抱えて試着室を飛び出し、レジへと一直線に向かう。・・・
・・・そこで、彼女はこんな事になった原因である人物と遭遇してしまった。

「へえあ？」

「・・・・・・・・え？」

視線を合わせた先にはコスプレの為に布地を買いに来た蒼崎千雨が口をあんぐりと開けて立ち尽くしていたのである。・・・・・・・・うわ、まずい！！

「・・・・・・・・お、お前、さ、桜咲だよなあ？」

「・・・・・・・・イエ、ヒトチガイデス!!」

突然の事で口調がカタコトになってしまっているが今はそんなことはどうでもよかった。ただどうやってこの状況を切り抜けるかだけである。

「いや、桜咲だろお前・・・・・・・・」

「ワタシ、サクラザキトイウヒトデハアリマセン!!」

「・・・・・・・・ふうん・・・・・・・・あ、よお近衛!!」

刹那(?)の後ろへ向かって千雨はわざとらしく声をかける。

「え!?!お嬢様!?!何処ですか!?!・・・・・・・・つて、ああっ!?!」

テンパって自分がオシャレをしているところを木乃香に見せまいと急いで隠れようとする刹那だったが嘘だったとわかり、すぐに自分の失態に気付いた。

「ば、バレてしまった・・・・・・・・何たる不覚!!」

「アホ、最初からバレてたわ」

「・・・・・・・・・・ですよね」

簡単に騙せないことはわかっていたのだが、抵抗せずにいるのはどうかと思ひ悪あがきをしてしまった。

「で、どうして普段から服を制服しかもっていなさそうな桜咲が急にオシャレしているんだ？暑さになでもやられたのか、ええ？」

このこの！！と肘で突っついてくるが、別に暑さにやられた訳ではないので反論する。

「違いますよ！！あなたの提供した『影響ゲーム』のせいです！！」

「ああ・・・・・・・・お前達もやったんだっけな、ご苦労さん。これでおあいこだな」

「おあいこって・・・・・・・・蒼崎さんもやったんですか、アレ！？」

「そうだよ・・・・・・・・だからこそ、お前達に良く味わってもらったんじゃないか。ハッハッハッハッハッハッ！！」

眼からハイライトが失せている！？！ということとはそれほどの屈辱を彼女も味わったのか！？

「まあ、安心しろ。お前らがプレイしたのと魔法先生がプレイしたのとはレベルが違うから」

「ちなみにどのぐらいレベルの差があるんですか？」

「そうだな．．．．．天国と地獄ぐらいの差はあるんじゃないかな？」

「．．．．．地獄ってどのぐらい辛いんです？」

「例えばこんなマスがある．．．．．『シヨタもしくはロリに1週間の間なる』」

「うわぁ．．．．．」

「他には『オコジョに1週間なる』『下着がつけられない(3か月)』『足の小指を頻繁にぶつける(100回)』『変質者とエンカウトする(10回)』『性転換する(2週間)』『ツンデレボイスになる(半年)』『中身が入れ替わる(1週間)』『超激辛マーボーを食す』『ドリアン完食』『一ヶ月一万円生活』『一ヶ月サバイバル生活』『夏休みは朝からビリーズブートキャンプ!』『女みたいな名前の生徒に修正される』『チャリをジャックされる』『武装したセグウェイに追いかけられる』『ゴスロリ服姿で事件に巻き込まれる』『巨大なカマドウマと戦う』『エロ本が見つかる』あとそれから．．．．．」

なんとという拷問メニュー(?!?!誰だ一体こんなマス考えたのは!?!聞いてられないぞ!?!

「もういいです!!」

「わかったよ……ああ、そうそう、話は変わるが弐集院先生が肥満体質からマッチョなっていたがまるつきり別人だったな」

体重が減ったからって油断は禁物であり、運動は毎日しなければならいですけどね……

「戦闘に参加しなかったので私達の方で一緒にやっただですよ……一瞬で姿が変わったんで驚きました」

「ちなみに期間が書いてないのはほぼ永久的に続くから覚悟しておけよ？」

「それを早く言ってくださいよ!? 髪が切っても切っても腰まで伸びるようになったじゃないですか!!」

「え? 別にいいじゃんそんな事……女は髪が命だろう、魔力の意味でも」

「それと神鳴流の技が変な名前になってしまったんですよ!? 『天上天下神雷無双剣』とか『私の必殺技……パート2』とか『またつまらぬモノを斬ってしまった……』とか!!」

「ふひひ、それはサーセンwww」

「笑わないでくださいよ!!」

そのあと愚痴るに愚痴りまくった私は蒼崎さんが「龍宮がどんな風になったか見たい」というのでワンピース姿で強制的に連行させられる羽目になりました。・・・・・・ああ、思えば龍宮はもっと酷かったな。

s i d e o u t

千雨 s i d e

「さあ!! 影響ゲームビフォーアフターの時間がやって来ました!! 今回の舞台は龍宮神社!! ここには褐色巫女スナイパーがいると噂がありますが、彼女はどのような変身を遂げているんでしょうね、

桜咲さん!!」

「何でそんなにノリノリなんですか……………」

「お前らが追加でトラウマアニメ観ていたから会つに会えなかったからな、どんな状態になっているのか楽しみで仕方がないんだ」

その間に私用を片づけていたりしたが、こりゃワクワクがとまんねえぜ!!ヒヤッハ……………!!

「酷いつ!!それでもあなた、人間ですか!？」

「はい、人間ですよ!!……………てか、元はといえばお前らが勘違いしてエヴァンジェリン襲ったからこうなったんだろうが」

「うつつ……………私だって本当は襲いたくはありませんでしたよ、ですが……………」

「汚い大人は子供に汚いことを強要する……………ま、今度からは拒否するように心がけるんだな」

「……………わかってますよ!!」

おおぅ、涙目の桜咲萌え……………っ!!
!!こいつは記録に収めなあかな!私は瞬時に携帯を取り出すと高速でシャッターを切り記録していく。

「だ、誰だ!？」

「・・・・・・・・・・ああ、あれが龍宮ですよ」

「え!？ばんなそかな!！あの近衛とはまた違った正統派系巫女さんみたいな女性がか!？嘘だろ!？」

美しい黒髪に純白の肌・・・・・・・・そして、キリリツと整った顔。どう見ても龍宮ではなかった。

「嘘であつたらどんなに良いことか・・・・・・・・・・あの日以来、私は巫女服を着るとこんな姿になってしまうようになった!！どうしてくれる!！」

奥歯を噛み締め、拳を握り締め怒りを露わにするいつもはクールのはずの龍宮だがそんなことは千雨にとってどうでもよかった。

「・・・・・・・・・・ふーん、あつそ」

「あつそつて、蒼崎お前・・・・・・・・・・何でそんなに他人事なんだ」

「自業自得の奴らにかけける同情などないからな、これっぽっちも」

「・・・・・・・・・・お前、それでも人間か？」

「余計にしないでください!!」

「近衛に販売する!!」

「絶対にやめてええええええええええええええええええええええ!!!!!!」

今日この日、千雨は刹那いじりに目覚めた。

s
i
d
e

o
u
t

寶石爺
Side

「もうそろそろ頃合いかのう？」

世界の何処かにある工房の薄暗い部屋の中で老人は一人、ニヤリと微笑む。

「聖杯戦争も無事に終わらせた……残るは魔法世界の崩壊阻止と、そして……」

水晶のような宝石に手をかざすと、眼鏡を掛けた学ランの青年の姿が浮かび上がる。

「彼女と蛇との最後の邂逅………その中で三人目の死
神が紡ぐ物語が始まる」

鎖に繋がれて眠りし姫君の姿が映ると、しばらくして老人は目を閉じる。

「その果てにある未来は最善でなくてはならん……」

・
・
ならば！！」

カツと目を開き映りこんだ一人の少女――蒼崎千雨へと目を向ける。

「新たな未来を紡ぐ可能性のある……ブルーサイズ、お主に賭けてみよう」

期待しておるぞ？と呟くと闇に溶けるように老人は静かに消え去った。

s i d e o u t

最善なる未来……そこへ行き着くための道のりは果てしなく遠く、どこまでも暗い……

だが少年少女よ、これだけは忘れるな

たとえ道を照らす火が小さかろうが、希望は残されているという
ことを……

絶望の中でさえ希望を皆に与える者よ、命ある限り戦い続ける

さすれば永遠なる未来は境界線を越えて紡がれる

とある月の姫の物語のように……

黒銃ノ紫苑 - 終（後書き）

次回、月姫編突入。

基本漫画版沿いです。

一気に時間がたちますが、そこは気にしたら負けです。

第参章「月下邂逅」げっかくいこう

お楽しみに。

月下邂逅・巻（前書き）

原作キャラは登場するもののこの話では倒れていたり。。。。されていたりするだけという扱い。

次回はちゃんと動きますよ!!

では、どうぞ!!

月下邂逅 - 巻

千雨 side

「——しかし、この町の空気はとてつもなく酷いな」

宝石爺からの依頼の為に泊めてもらっている教会の窓へ座り込み、少女・・・・・・・・蒼崎千雨は一人静かに眩き瞳を閉じる。

・・・・・・・・・・思えばあの夏から一年、色んな事があった。

ネギの為の剣『月照』と自分用のナイフ『空鐘』を志保さんから受け取った後、私はウェールズの石化した村人達が治せないかどうか確かめるためにネギと共にイギリスへと渡った。

・・・・・・・・結果的に言えば、まあ、石化は解呪されたのだがその後の隠蔽工作・・・・つまりMM元老院に情報が漏れないように情報規制を行ったり、自分の痕跡を消したりするのが面倒であった。

シオンの事に関しては毎晩夢遊病の如くやってくるのをアイアンクローで対処したりと忙しかったが、何とか目的の吸血鬼化治療薬への一步を踏み出すことに成功した。そう、吸血衝動と細胞の劣化の治療薬が完成したのである。

開発に当たって自身を実験台にするシオンには度肝を抜かれたが、身近にいる死徒がシオンだけしかないのでしょうがなかったと割り切ることにした。（その後、宝石爺に投与し効果は抜群であることが確認された。太陽の下で生活できるので終始テンションが上がりまくっていたが・・・）友好的な死徒に配布するかどうかはまだ未定である。

学園生活は新たに桜咲と龍宮をからかうという趣味が生まれたことにより少しは充実するようになったと言えよう。一応桜咲とは一緒にシヨッピングを楽しんだり稽古をする仲にはなりはした。

だが、龍宮は会ったたびに腹黒くなっていたが（変な黒いオーラも出し始めた）・・・・・・なぜなんだ、まったくわけがわからない。

というか、急に巫女みたいな攻撃（なんか凄い刀による斬撃）出すのはやめてくれ、お前は銃が専門だろうが。それと『フフフ・・・』と怪しく笑いながらストーキングするのはやめろや、お前は何処のヤンデレだ。

アスナはガトウさんと定期的に文通を取りあい、最近じゃ威化法を勉強（復習）したりエヴァや私を師事するようになった（エヴァには正体を説明済み）。

「ネギは私が守るんだ……絶対にやらせない」とブツブツ呟いていたがまさかブラコン化でもしたのか？（一応外見年齢的に従姉弟という関係になっているけどさ）

そんなこんなで一年が過ぎて、毎日地道にコツコツ仕事をしていた矢先に宝石爺から「真祖の姫君が家出したから護衛してやってくれ」という依頼が舞い込み、イギリスに留学という嘘の理由で学園を一時的に離れることになった。

………実際は問題の姫君がいるという三咲町にいるのだが。

「——もうそろそろ寝た方がいいですよ、ミス・サウザウンドレイン」

回想により深く潜っていた思考がカソック服の女性の声で現実へと引きずり出される。

「………ああ、シエルさん。わかってますよ………ただ、寝つけないだけですから」

「………それはあなたが気にしている町の空気のせいですか？」

「ええ……何か血生臭い事件がこの町で起こる気がするんですよ、何故か」

それはこの町に吸血鬼（死徒）がいるという何よりもの証拠である。だから余計に胸騒ぎがして眠ることができないのだ。

「そうですね……なら、巡回は念入りに行なった方がいいですね」

「ですがシエルさん、ここは『遠野』のテリトリーなんですからくれぐれも気を付けてくださいよ？下手に動けばどうなるかわからないんですから」

式さんに聞いたが、ここ三咲町は鬼との混血の一族……通称『紅赤朱』の遠野が管理する土地である。そんな中を行動するには最善の注意を払わなければならない。

「それは十分承知です。しかし、今回のロアの転生体は三咲町で確認できる異能者……つまり遠野の関係者である可能性が大きいのです」

シエルさんが三咲高校に潜入しているのはその長男を通して情報収集するためだったな……確か長男の名前は『遠野志貴』。

「……その長男がロアでないことを精々祈りますよ、いきなりエンカウントじゃこちらに対策が取れませんから」

そう言ってベットに横たわり目を閉じると、シエルがおやすみなさいと言ってドアを静かに閉めた。

——その翌日、つまりは今日……巡回に出た私はまさかこんな所に出くわすとは思っていなかった。

真祖が『遠野志貴』によって十七分割にされて 殺..
場にな。 されている 現

「なん・・・・・・・・だよ・・・・・・・・これはあ!？」

宝石爺に護衛を依頼されたというのに、その護衛対象が既に殺されて
いましたなんて有り得ねえだろう。・・・・・・というか、真祖
には「死」が存在していないはずじゃなかったのか？

「いや・・・・・・・・ロアの血を吸ったことにより吸血衝動が生まれ
てしまって「死」が発現してしまったのか？」

例えそうだとしても、一つ不可解な点がある。「死」が生まれてし
まったとしても視えなければ何の意味もないのだ。

「・・・・・・・・まさか『遠野志貴』は「死」が視えているとも言
うのかよ、おい」

それ以前に口アだったなら、直死の魔眼持ちの最悪な敵が出来上がつてしまう。

血だまりに嘔吐して気絶している『遠野志貴』を警戒して無理矢理動かしベンチに横たわらせ、周囲に認識障害の結界を張ると千雨は荷物の確認をことにした。

真祖に関しては……体が消滅していないので「線」を切られただけだから、時間をかければ復活すると思われる。（俗に言う『真祖の吸血鬼がそんな簡単に死ぬはずがない』である。ああ、ちやんと宝石爺に電話して安全を確認しましたよ？若干パニックになりながらも）

「教科書に筆箱に財布と……うわっ、全然金が入ってねえ！？」

俵約家なのかただ単に小遣い不足なのかは知らないが五千円と少しの小銭しかなかった。……この面だけでも、とても口アとは思えないな。

「あとは……持っていた飛び出し式ナイフか。何か彫つてあるな……うーんと、『七夜』？」

……あれ、七夜って確か退魔一族の一つじゃなかったけ。どうして遠野の長男が七夜のナイフを持っているんだ、おか

しいだろ？

「まあ、それは後々調べるとして・・・・・・・・問題はこの魔眼殺しだな」

ロアが自作したにしては設計がちゃんとなされているし、何だか女性が生み出した感じがバリバリ有りまくりなんだが・・・・・・・・うん？

「この残留した魔力は何処かで・・・・・・・・」

こめかみに指を当て、記憶の海の中から関連する記憶を手繰り寄せる。ええと・・・・・・・・確かあれば人間ミサイルランチャー？

「ってああっ！？思い出した！！母さん、昔魔眼殺しを奪われたって・・・・・・・・まさかコレなのか！？」

自身の魔眼殺しを外してよく比較してみると、少し差異は有りはしたが基本的に同じ作りをしていた。

「ということは、ミス・ブルーの関係者なのかこの人・・・・・・・・」

もしロアだったのならミス・ブルーがすぐに気付^しき、破壊^{くわ}している

はずだ。でも、それをせずに魔眼殺しを与えられたとなると・・・
・・・うん、白だな。

「しかし、直死の魔眼か・・・・・・・・・・」

自身を含めて三人目の保有者に出くわすとは思わなかった。とりあえず、これは母さんに報告しておこうかな。

死んだように倒れているので心配になった私は念のために瞳孔を確認する。――すると、瞳はずっと蒼いままだった。

「って、おいおい！？よく確認したらこの人魔眼展開しっぱなしじゃないか！！」

そんな状態で良く生きていられたなと思わず驚愕してしまったが、今は手元にある魔眼殺しの意味を思い返して理解する。

「・・・・・・・・・・なるほど、無理矢理視えないようにしていたってわけね」

無理矢理奪った魔眼殺しを魔眼を無理矢理封じるために使うなんて妙にできているな〜と感心しているとふと携帯が鳴る。相手は・・・
・・・女子高生の化けているシエルさんか。

「はい、もしもし?」

『ああ、千雨さん突然すみません。遠野君の行方を知りたいのですが何か知っていませんか?』

「え?ああ、ここでぶっ倒れていますよその遠野君は」

『そうなんですか?貧血という情報は得ているのですが、まさか・・・・』

「倒れたには倒れたんですが、ただ単に貧血で倒れたわけじゃないんですよ、ええ」

『・・・・・どういことですか?』

うう・・・・・。「真祖ぶっ殺して倒れていました」「しかも直死の魔眼持ちです」何て言えないし・・・・・どないしよう。

「上手く説明できません。しかし・・・・・一つだけはわかったことがあります」

この状況で遠野志貴の状態を的確に伝えることができる言葉を、今思いついた。それは――

「遠野志貴は——多分ロアじゃありません」

「先ず、安心できる状況であることを伝えることだった。」

s
i
d
e

o
u
t

式
s
i
d
e

「……………わざわざお前がオレに電話してくるなんてどうしたんだ、おい？」

いつになくのほほんとお茶を飲んでいたオレは突如としてかかってきた電話に嫌々ながらも出ることにしたのだが、相手は現在仕事とやらで学校サボり中の千雨からだった。

……………珍しいな、いつもはトーコを通すのに。

『実は式さんなら知っていると思うある一族について教えて欲しいんですよ……………仕事先で出くわしてしまったんで……………』

「というと、退魔絡みか？」

『ええ、そうです。今回の仕事先は三咲町……………遠野のテリトリーなんですが、思わぬ一族の関係者がいることがわかったんですよ』

遠野……………鬼との混血か。そんな奴らの所に何処のどいつがいたっていうんだよ。

『……………七夜 って言ったらわかりますか？』

「!?……おい、その話本当か？」

七夜っていったら、数年前に壊滅したはずの遠野の天敵じゃないか・
・・・・・まさか、生き残りがいたのか？

『はい、まだ良く調べていないので断定はできませんが、七夜と彫られたナイフを遠野の長男、『遠野志貴』が所持していたので可能性は大かと』

「天敵の奴らのナイフをわざわざ持たせるわけがないもんな……」

七夜を壊滅させたのは間違いない。遠野だろうな。でなければ、七夜のナイフが遠野の下にあるはずがない。

てか、遠野……いや、七夜の生き残り（？）の奴もシキって名前なのか……。偶然とは思えないな。

「それについてはオレの方で調べてやるよ、必ずどこかに何らかの痕跡が残っているはずだから」

遠野志貴……ではなく、七夜志貴が一体今までどうやって生きて来たのかを詳しく知る必要がある。遠野が関わっているのは当たり前だろうけどな。

『是非お願いします……こっちはリアルタイムで監視を続けているので迂闊に動けませんから』

「リアルタイムってお前……今、何処で何してんだ？」

『教会宿舎の屋上に設置した極指向性（EXカーディオイド）のレーザーマイクで、遠野志貴及びその同居人の会話を集音していますか？』

「……おい、それ盗聴じゃないか？敢えて口の出さないけどさ。」

『現在わかったことは遠野家には確認できるだけで4人が生活していると思います。名前は順に遠野秋葉（現当主）、遠野志貴（監視対象）、琥珀（使用人）、翡翠（使用人）で、使用人は多分双子でしょう』

「使用人の姓はわからないのか？」

『やはり、今は何とも……ですけど、珍しい名前ですし遠野家に住んでいるので退魔関連で調査すればすぐにわかるかと』

混血に暗殺者に謎の双子か、どんだけ魔窟だよ遠野の家は……

そう電話越しに呆れていると、急に千雨は話を変えてきた。

『それとついでに言うておきますが、私の護衛対象の真祖の姫君が今日殺されました』

「はあ？ トーコから聞いた話じゃ真祖つて奴は不死なんだろう、なのに殺されたつてお前……冗談だろ？」

『冗談であつてほしいと私も思いますよ……けど、駆けつけた時には遠野志貴に確かに十七分割にされて殺されていました』

おいおい……いくら暗殺者だからって、そんな十七分割つて芸当できるわけないだろう。

まさかとは思うがそいつも直死の魔眼を持っているとかじゃないだろうな……？

「……で、そいつはどうやって真祖殺したんだ？」

その問いの答えはわかっているけれども、オレは一応聞いた。

『答えはただ一つしかないじゃないですか・・・・・・・・直死の魔眼です』

まったく冗談じゃないよ・・・・・・・・三人も覚醒者がいるなんてさ。ホント、神様って奴は何やってんだと思うぜ。

「その根拠は？」

『・・・・・・・・実は不死とされる真祖を瞬殺したこと以外に判明したことがあるんです。遠野志貴は・・・・・・・・母さんが作った魔眼殺しをかけていたんですよ』

「トーコのか？そりやまた何で・・・・・・・・」

オレの知らない間に魔眼殺しでも作っていたのかと一瞬思ったが、すぐさまその予想は千雨の返答によって遙か彼方へと吹き飛んだ。

『人間ミサイルランチャーの強奪品って言えばわかりますか？』

「ああ・・・・・・・・アイツね・・・・・・・・」

突如として現れる破壊者こと蒼崎青子が何時の日か魔眼殺しを強奪していったってトーコが愚痴ってたな・・・・・・・・

『それが経緯は知りませんが、遠野志貴の下にあるってことは・・・』

「十中八九、関わってるだろうなアイツが」

確か1994年に来襲されて強奪されたって言っていたから・・・
・遠野志貴は少なくともそれ以前に直死の魔眼に覚醒しているってことか。・・・おい、オレや千雨より早いじゃないか。

『それじゃあ確認されたのは三番目、覚醒したのは一番目ってことになりますね』

「ああ、そうだな」

オレは電話を切る前に絶対に遠野志貴から目を離すなと忠告すると、空腹を感じたので先程まで飲んでいたお茶が入った湯呑を回収し台所へと向かった。

s i d e o u t

月の姫と蒼き死神が邂逅する時、混沌の夜への招待状が落ちてくる

無数の獣を乗り越え、彼らが目指す先は血に濡れた世界か

それとも、美しい満月が夜空を照らす世界か

その答えは誰にもわからない・・・・・・・・・・

月下邂逅 - 壱（後書き）

いきなり一年飛んですみません。

オリジナルの学園祭とか書けなかったわ………

外伝でいずれ書くかもしれないけどね。

次回はやっと本格的邂逅。

対ネロ戦その一ではオリジナル展開があるかもしれません。

ヒントは漫画版の被害者が………

月下邂逅・弐（前書き）

千雨は更なる魔改造を加えられたようです。

しかも、無理矢理。

今回はあの人が登場。

キャラが壊れているかもしれないが、気にしたら負けだ。

月下邂逅 - 貳

アルトルージュ side

「面白いことになりましたね．．．．．まさか、あなた以外にも直死の魔眼を持つ者がいたとは」

とあるお城のアンティーク品が数多く揃えられた一室で、一人ソファーに腰掛けながら紅茶をお楽しみ中の黒いドレスを着た少女は目の前にある鏡に向かって語りかけていた。

一見、何もない所に話しかけている危ない人に見えるかもしれないが、ちゃんと鏡には少女以外の人物が映りこんでおり冷静に返答していた。

「何を呑気なことを言っているんですか．．．．．あなたの妹が生き返るとはいえ一度殺されたんですよ？」

話し相手は——蒼崎千雨。

宝石爺の命を受けて少女の妹、アルクエイド・ブリュンスタッドを密かに護衛することになった少し変わった直死の魔眼を持つ少女である。

ちなみに彼女といつ関わりを持ったかと言えば今年の冬のある日、ユーラシア大陸のとある場所で見つかった小さな地下遺跡の調査で訪れていた千雨がある事に巻き込まれた時なのだが、詳しい経緯はお互い他人に必要な以上に話さないという契約を結んでいるので話せない。

「ええ、それはわかっています。ですが、これが必然なのか偶然なのか考えてみるとつい楽しくて……」

「……はあ、そうですか」

千雨としてはどちらでもいいと考えているのだが、口に出さず適当にスルーすることにした。下手に返答すると長話になり仕事に支障が出てしまうからである。

「ところで千雨、あの子は今何をしているか教えてくれませんか？」

感情を表に出さずに育った妹が殺されて今何を思っているのか、気になって仕方がない姉は一旦カップを皿の上に置いて尋ねた。

「……えーっつとですね、『自分にあんなことした奴を同じ目に遭わせてやる』って感じに凄い顔してガードレールに座っています」

「あらま……」

てつきり無感情でいると思っていたのだが、憎しみとはいえ感情を持っているのは彼女をよく知る姉にとって驚きだった。

「……………あれ？今度は急に微笑み始めましたよ」

「まるで反転したかのような勢いですね……………」

突然の事が縦続きに起こったためか、体に震えが止まらなかった。
……………妹の成長に自分は感動しているのだろうか。

「遠野志貴を発見した模様……………声をかけようと後ろをついて行っています」

——何っ！？まさか、ストーカーというものを妹はやっているか！？

「私の知るアルクエイドちゃんと違う！！」

「はい？（なんかクールさがなくなった？）」

自分が知っている彼女は無表情で放っておけない子であったはず。

なのに千雨からの実況中継によれば、復讐心を抱きその上うって変わって微笑み、あまつさえ自分を殺した男のストーリーキングを始めたという。

・・・・・・・・・・一体何があったというのだ我が妹よ!?

「遠野志貴に『こんにちは。昨日はお世話になったわね』とあいさつし、『あら、もう忘れちゃったの? 昨日わたしを・・・これでもかってくらいにナイフでバラバラにしてくれたじゃない?』と語りかけています。・・・・・・・・あ、今遠野志貴が驚いて逃げていきました」

「なん・・・・・・・・ですって・・・・・・・・(あいさつまで出来ているという!?)」

「逃げた遠野志貴が落とした鞆を拾いました。追跡はスローペースですがしているようです」

鞆を拾ってやるという配慮まで見せるとは・・・・・・・・誰だ、私のアルクエイドちゃんを魔改造したのは!!!!!!

出て来なさい!! したら全力で・・・・・・・・・・ありがとうと言っ
てあげるから!!

「……………とりあえず、巡回行ってきますので……で話し切りますよ……?」

一人のシスコンを放って千雨は教会の外へと飛び出した。

side out

志貴 side

「カバン、落としていったわよ」

——唐突にまた声をかけられた、それも自分が殺してしま
ったはずの女から。

今朝方再会した死んだはずの女は夢だったと自分で言い聞かせシエ
ル先輩や弓塚さん、有彦といつものように談笑して過ごした俺は、
自分を心配してくれ一緒に帰ると言い出した弓塚さんと中学時代の
話をしながら帰路についていた。

その後、弓塚さんと別れ昨日の事が夢だったと自分に改めて認識さ
せるために公園を訪れると逆に現実であつたことを認識させられる。

……夢であるならそう何度も話しかけられたり会うことは
ないのだから。

「どうやら言葉は通じるらしいな……なら、ついてこい……」

受け入れたくない現実をこんな人気のある公園で認めるわけにもい
かず、俺は人気のない路地の奥へとその女を連れて突き進んだ。

「・・・・・・・・で、何なんだよお前は？」

振り向きざまに強い口調で問うと、その女はまったく・・・と首を振りながら言った。

「酷い言い方ね、人を殺しておいてそれはないんじゃない？」

「・・・・・・・・ち、違う!!」

「違うないわよ、貴方はわたしをいきなり17個の肉片に変えてくれたのよ。忘れていなかったから、さっきあなたは逃げたんじゃない？」

「う・・・・・・・・」

「すつごく痛かったんだからね、生き返るのだって丸一日かかったんだから!!」

生き返るだって・・・・・・・・？そんなこと人間にできるわけがないだろう!!

「な、何言っただ!!死んだ人間は生き返るわけがない!!」

「ええ、そうね。けど、わたしは人間じゃないもの」

はあ！？人間じゃないって・・・・・・・・そんな馬鹿な！！

「じゃ、じゃあ、人間じゃなかったら何だっというんだよ！？」

「うーんと、そうね。一般的には『吸血鬼』って呼ばれているけど」

「吸血・・・・・・・・鬼？」

おいおい、架空の存在じゃなかったのか吸血鬼って・・・・・・・・

そもそも吸血鬼って生き返ったりできるもんなのか？もし本当にこいつが吸血鬼ならそうなんだろうけどさ・・・・・・・・

受け入れたくはないけれど、こいつ自身が自称する吸血鬼でなければ『殺したのに生きている』という話に筋が通らなかった。

「・・・・・・・・それよりも貴方こそ何者？どうしてわたしをあんなに手際良く殺せたのよ」

「え・・・・・・・・そ、それは・・・・・・・・」

答えられるわけがない・・・・・・・・変な「線」が視えてそれをなぞったら何でも切断できるなんて。

そこから話は跳躍して、自称吸血鬼の女はこの街を騒がしている吸血鬼退治をわたしは弱っているからという理由で手伝えと一方的に宣言した。

ちよつと吸血鬼が吸血鬼を退治ってどうなっているんだよ……
……縄張り争いとかでもしてるのか？

そう尋ねようとした時、ふとカラスの鳴き声が上空から聞こえる。

『くあう』

「ん？カラスか……」

特に気にすることもないと判断し女の方に顔を向けると、女の眼はまるで猫のような瞳をしてカラスを見つめていた。

「あっちゃー………まいったなあ、もう見つかったちゃうなんて」

女は額に手を当て、まずいなあ〜と声を漏らす。

「お、おい見つかったって何に……………」

「しっ、来るわよ……………」

視線を向けた先には路地の入口からヌツと荒い息を立てながら侵入して来る大きな黒い犬がいた。

黒い犬は女を捕捉すると一気に駆けてくる。

「避けなさいっ!!」

「うわっ!？」

半ば突き飛ばされる形で回避するとドラム缶が大きな音をたて空を舞った。……………あれ、さっきの犬は何処に行った!？

「上よ!!」

「なっ……………嘘……………だろ?」

先程の犬は重力を無視した状態で壁にさも同然のように立ち、こちらに向けて構えている。そして強く壁を蹴り再び女に飛びかかるうとする、対する女も爪を異様に尖らせた手を構えて迎え撃つ体勢をとる。

志貴はこのまま女の攻撃により犬は倒されるであろうと考えた。

・・・しかし、女の攻撃は突如として飛来し犬を串刺しにした紅い大剣によって中断されることになった。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・！』

犬は壁に礫にされるようにして悲鳴を上げると、灰のように消えていく。

「何なんだ今度は！！剣が降って来たぞ！？」

「見て、上に誰がいるわ！！」

女が先程までカラスがいた所を指さすと、そこには季節的にまだ少しばかり早い橙色のコートを着た少女がこちらを見下ろすようにして立ち、そして――

—そして、飛び降りた。

「……………ちよっ、危ないって何やってんの君!!」

必死に叫ぶものの時は既に遅し、少女の落下はもう始まってしまっていた。

このままでは固いコンクリートに激突し大怪我は免れないだろうと思ひ、少女の落下地点になるであろう場所に素早く移動する。……だが、少女は一向に落ちてこなかった。

—なぜなら、腰のベルトから射出された頑丈そうなワイヤーが壁に突き刺さったままの剣の持ち手部分に引っ掛かり、少女をぶら下げているからである。

少女はゆっくりとワイヤーを伸ばしていき自身を降下させていき、終いには何事もなかったように安全に地に足を付けた。

「よっこいしょういちさんと・・・・・・・・・・・・・・・・」

何処かの芸能人の名前ようなことを言って服を整え、突き刺さった大剣を手繰り寄せると少女は女に向かって話しかけた。

「復活したてなんですから、もう少し力を使うのは控えた方がいいですよ、アルクエイド・ブリュンスタッド姫」

「貴女・・・・・・・・・・誰？」

明らかに警戒した目で女は少女を睨みつけるが、少女はまったく微動だにすることなく話を続ける。凄い度胸があるんだな、この子・・・・・・・・

「宝石爺から貴女のお手伝いをするように依頼された、ただの使いぱっしりの魔術師ですよ」

「え、爺やからの!？」

「はいそうです・・・・・・・・・・そして私の名前は蒼崎千雨。人間ミサイ・・・・ゲフンゲフン!! 蒼崎青子の方じゃなくて、蒼崎橙子の義理の娘です」

「……………今、さり気なく『先生』の事を人間ミサイルとか言おうとしたよな、この子。というか、先生の関係者なのか!？」

「蒼崎橙子って確か、人形師のミス・レッドの事よね？」

「ええ、歩く人型決戦兵器ミス・ブルーの姉になります」

先生にお姉さんっていたんだ……………初めて知ったよ。って、先生の扱いがエヴァンゲリオンになってる!？」

「細かいことは気にしない方がいいですよ、遠野志貴さん」

「何で俺の名前を!？」

そもそも何故俺が考えていることがバレているんだよ!？超能力か!？」

「……………あー、それについて説明していると日が暮れてしまいうのでとりあえず場所を移しましょう。……………ついでにあなたが何故この人を殺せたのか説明してあげますから」

「!？」

一瞬、少女——蒼崎千雨の瞳が蒼く光ったような気がしたのだが、女——真祖という区分に該当するという吸血鬼アルクエイド・ブリュンスタッドが殺した責任をちゃんと取れと言われたのに氣をとられてそれどころではなくなってしまった。

s i d e o u t

千雨 s i d e

混沌ことネロ・カオスのアニマル使い魔の追跡を今の所は振り切ることができた私達は自分の部屋がバレているかもしれないと警戒し

たアルクエイド姫の提案により近くにあったのホテル、センチュリーホテルへと休憩ながら身を隠すことにした。

「うん、割といい部屋ね」

部屋の中を一通り見まわしそう感想を漏らすと、彼女は急に体をよるめかせたので慌てて志貴さん（名前でいいと言われたのでそう呼ぶことにした）が支える。

「ん……ごめんなさいね、貴方にやられた傷がまだうまく治ってないのに無理をしたせいで限界が近いみたい」

「あ……いや、元々は俺が悪いんだし今は横になってるよ」

「話は夜でもいいですし、私も報告しないといけない事があるんで別に気にしないで寝てください」

「そう、じゃあ少し早いけどおやすみなさい」

そう言つてアルクエイド姫がベットに横になり瞳を閉じて眠り始めたのを見届けると、コートの中にしまっておいた注射器を取出し組み立て始める。

「……そんなもの取り出して何しているんだ、千雨ちゃん」

「何って……志貴さんが原因で治りにくくなっている所と訳ありで弱体化してしまっている所をその場しのぎですが治そうとしているんですよ」

「できるのかそんなこと……」

「できなければやってませんよ、安心してください。——あ、そうそう。近くのコンビニでもいいですから簡単な治療用キット……つまりガーゼとかなんですけど買ってきてくれませんか？」

「え……何でだ？」

「そりゃあ内側から治すのは私にしかできない仕事だけでも、外側は貴方でもできるからです。ちつとは責任感感じて積極的に動くべきなんじゃないのかな？」

「よく見てください、左のあばらの方……少し血がにじんでいるでしょう？」

「あつ……ホントだ……」

「このにじみ方は明らかにろくな手当をしていないってことですよ……多分、テープでも貼ってしのいでいたのかもしれない」

その予想が志貴が帰って来て包帯を巻こうとした時に真実となるとはこの時二人はまだ知らなかったのだが。

「今の内に行っておかないと夜に襲撃を受けた場合に十分に動けなくなりますから、なるべく急いでくださいね」

「ああ、わかったよ」

別に自腹で買いに行けとは言っていないので、必要な分だけ私の財布から取り出して渡すとコンビ二へと向かうために志貴さんは部屋を出た。

「さてと………私もやれるところまでやってみますかね？」

エヴァンジェリンやシオンさんが合同で作り上げた吸血鬼化までは治せないけど吸血衝動や細胞破壊はどうかできる治療薬の改良版を容器から注射器に移すと、寝息を立てている彼女の左腕の血管へと突き入れ注射する。

「貴女にどこまで効くかはわからないけど……………」

最大限効いてほしいと祈るように少しずつ体内へと運ばせ注射し終える。

「ふう………これで一先ずは安し『ドクンツ!』……
……ッ!？」

安心しようとしたその瞬間、突然心臓を掴まれたような感覚に陥った。……それは、かつて味わった突然の衝撃よりも弱かったものの、手を地について体を支えなければならぬ程度の攻撃力を持っていた。

「ッ………く、くそっ………何だってこんな時に……
………」

胸を掻きしめるように強く抱くと、息を荒げながら千雨は呟く。

「はぁ………はぁ………お前は………また、あの時のように
するつもりなのか!？」

ベッドで眠るアルクエイド以外の何者かに向けて叫び、眼を手で覆い隠す。

彼女の瞳は直死の魔眼を発動させた時の蒼色とは違った黒ずみかかった黄金の色を輝かせており、同時にオレンジがかかった茶髪がまる

で鱗粉をまくようにして白く発光していた。

「、」

「だからって……私を好き勝手に押しのけるなよ」

「、」

「簡単に言っんじゃない、人の体を使っているくせに……」

「、」

「」

「……そんなに表に出たいのなら、まずは私の許可を取りやがれ。必要と感じたのなら譲ってやるからよ」

まるで見えない誰かを自分の中に内包しているかのように会話をする千雨は重たい体を近くにあったソファーに預けると携帯を取り出しコールする。

『ふあい……はむっ……もしゅもしゅ?』

「何ですか今の間は……って何か食べているんですかシエルさん？」

電話の相手はシエル。

今日の巡回を終え、一人夕食を千雨を待つことなく食べているようだ。心なしか、夕ご飯が少し早いような気がする。

『カレーです』

「……………おいちよつと、昨日もカレーだったろうが」

思わずため口になってしまっぐらい私の怒りのパラメータは上昇した。何でカレーを飽きずに食えんねん！！

『寝ても覚めてもカレーを食べる……………それが私の信念ですから』

・
そのうち栄養失調で倒れるんじゃないか、この人は……………

カレー以外でしか取れない栄養素だつてあるんだからな？

「というか、人が必死に頑張っているのに何でアンタは一人で呑気

にカレー喰ってんだよ！？仕事しろや仕事！！」

『何を言っているんですか、腹が減っては戦はできぬというでしょう？』

「じゃあ、簡単に済ますなりして工夫しろよ！！わざわざカレー作って食べてんじゃねえぞ！！」

こっちはカロリーメイトでお昼をしのいだというのにつ！！

『はいはいわかりましたよ……それで、何か今日は収穫がありましたか？』

「本当にわかってんですかね……？——まあ簡潔に言えば、ネロ・カオスの使い魔二匹（カラス、犬（？））と今日はエンカウントしましたよ」

『！！……もうですか、早いですね』

「そして現在、真祖の姫君と遠野志貴とセンチリーホテルにて一時休憩を取っています」

『……どうして遠野君がそこにいるんですか？』

そこから話さねばならないか。

昨日は過剰に反応するのを避けるためにあえて黙っていたが、もは

や話すしかあるまい。

「昨日、真祖を『直死の魔眼』を使って殺したから責任とっているんですよ」

『真祖を殺した！？しかも直死の魔眼って・・・何故昨日のうちに報告してくれなかったんですか！？』

耳を劈くような声で叫ぶシエルに対して千雨は冷静に返す。

「潜入し始めからフルに警戒させないためですよ・・・・・・迂闊に話したら次の日からずっとストーキングやりそうですし」

『だとしても、少しぐらいは話してくれても良いのではないのですか？』

「うん、だから『遠野志貴は多分ロアじゃありません』って言いましたよね」

ロアだったら少なからず血のにおいがしたはずだからな。でも、遠野志貴にはそれがなかった。

『そういう意味でしたか・・・・・・』

「わかってくれましたか？——それと追加情報ですけど、

遠野志貴はおそらく遠野楨久の實の息子じゃないっぽいです」

『え、何ですって!?!』

「いちいち叫ばないでくださいよ、耳が痛くなります。……
・・・知り合いの退魔一族に調べてもらったんですが、遠野志貴が
所有していたナイフに彫られていた 七夜 という文字はその名の
通り、数年前に壊滅した退魔の七夜一族のことを指すらしいです」

ちなみに七夜の中でナイフを使っていたのは父の七夜黄理ではなく、
妻の深姫^{みき}だったという情報がいち早く得られた。つまり遠野志貴が
持っているのは母の形見ということらしい。……本人は自覚
してはいないようだが。

『まさか、混血の遠野が壊滅した。……いえ、もしかしたら
壊滅させた退魔の一族の子供を引き取ったということですか?』

「ええ、そう考えると筋が通ります」

そこで何故敵対する一族の息子を引き取ったかという疑問が生まれ
てしまうが、それはここで議論しても仕方がないので後々情報が入
り次第話し合うことになった。

「——で、話を戻しますが近日中にネロ・カオスからの襲撃の
第二波が来る恐れがあるんです。勿論こちらに対策は取っているん
ですが。……」

『手負いの真祖と正体不明の高校生、そしてあなたと・・・・・・・・・・
・・戦力不足ですか、わかります』

「今の段階では防戦もしくは撤退しか道がないんです。できれば今夜、見張っててくれますとありがたいです」

『その中で真祖を逃がす手伝いをしろと？・・・・・・・・・・まあ、いいでしょう。引き受けましょう』

ロアと決着をつけるためにも彼女の存在は必要ですからねと言って、カレーを掻っ込みながらシエルは電話を切った。

「・・・・・・・・・・私も少しばかり眠ろうか。・・・・・・・・・・ふわあ」

千雨はクッションを抱き枕のように抱え込み丸くなると深いまどろみの中に落ちていった。

s i d e o u t

月下邂逅・弐（後書き）

本当はネロ・カオス戦までいくつもりでした。

でも、無理でした。

次回は説明＆戦闘です。

——千雨を苦しめている存在が具現化する。

月下邂逅・参（前書き）

長いような・・・短いような・・・

戦闘描写が難しいな・・・

千雨は。。。の眷属と化してるようです。

しかも、テイルズのあのキャラたちの技を・・・

月下邂逅 - 参

千雨 side

「もう！どこ行ってたの！？」

唐突にベットの方から怒ったような声が聞こえた。声の主は……
・・アルクエイド姫か。

げ・・・・・もうこんな時間かよ！？

「どこって・・・・・買い物だよ、買い物。千雨ちゃんが陽が出ているうちに買ってきた方がいいっていうからさ」

袋の中身を備え付けの小さなテーブルへと並べると、そこには消毒液にガーゼ・絆創膏・包帯など様々な治療道具があった。

「ううん・・・・・ああ、すみません。あなたの服が血でにじんでいましたから、手当てをしつかりしようと思って」

背を伸ばしつつ志貴が買い物に出かけた経緯を説明すると、アルクエイドは驚いて服を確認する。

「あ、本当だ。．．．．．やっぱり、ガムテープじゃ塞げなかったか」

「「やっぱりな．．．．．」」

私達は予想通りテープで塞いでいたことに驚きつつ呆れかえっていた。．．．．．まあ、そうせざる負えなかったのは全て志貴さんのせいなのだが。

責任感を感じている志貴さんが進んで手当てをしようとする、包帯などを興味深そうに手で弄んでいた彼女はきょとした顔になった。

「え．．．いいの？やってもらって．．．．．」

「ああ、自分で蒔いた種だからな、こういう事ぐらい進んでやってやるよ（怪我したらガムテープつけるような人間に対して、自分でやらせるようなことはしたくないしな．．．．．）」

「（だから違うって、志貴さん．．．．．この人は本当はやれるんですよ？ただ、周りにガムテープしかなかったせいでこうなっただけであって．．．．．）」

志貴はガムテープを丁寧に剥がし傷口をきれいに消毒すると、ガーゼで押さえつけ包帯を一周、また一周回していく。

・・・・・・・・・・手際がいいな、意外に。

「ん・・・・・・・・・・終わったの、志貴？」

「少し待ってくれ、後はテープを切れば一応終わるから・・・・・・・・..
ええと、ハサミはっ」と

通学鞆をガサゴソと探すと何かを見つけたみたいで志貴さんは硬直する。手に握られているのは・・・・・・・・・・七夜のナイフ。

「何でこれが・・・・・・・・・・」

「ああ、それ志貴さんのナイフでしょう？倒れていた時にちゃんと処理して戻しておいたんですよ」

「じゃあ、公園での跡が消えていたのは・・・・・・・・・・」

「私の仕業です。一般人に見られるわけにもいかなかったんで」

あと、遠野の人間にも見させるわけにはいかなかったんでね、注意深く痕跡をなくしておきましたよ。

「ふ〜ん・・・・・・・・・・これがわたしをバラバラにしたナイフか、切れ味は良さそうね」

「一応、私が調べてみましたが概念武装の類ではありませんでしたよ」

強いて言うなら退魔用に特化してただけで、本来なら真祖にダメージなど与えられるはずもないナイフだった。

「概念武装って何だ………?」

「簡単に説明すると特殊能力がある武器のことですよ。ほら、RPGとかで貫通、先駆け、属性攻撃とかあるでしょう?」

ちなみに日本で有名な概念武装（宝具）といえば、童子切安綱や雷切のような刀が上げられたりする。今は何処に存在しているのか知りはないけどな。

「それが本当なら、ねえ志貴………何故わたしを殺せたの?」

「そ、それは………（どう説明すればいいんだよ………）」

志貴は自分でも良くわかっていない力をいざ説明するとなると混乱しまい、口を閉ざしてしまった。

「（仕方ないな．．．．．）それはわたしが説明しますよ、アルクエイド姫」

「そう？なら、お願いするわ」

「では．．．．．志貴さん、このナイフを使ってその椅子でもいいですから『視て』なぞって下さい」

「ッ！？．．．．．わかったよ」

なぜ自分の力を千雨が説明できるのか．．．．．いや、理解しているのかと志貴は疑問に思ったが、ここは言われた通りに眼鏡を外して椅子を『視て』ナイフでなぞることにした。

．．．．．蒼い瞳を輝かせながら一つ、また一つと。

バラバラに椅子を解体し終わると千雨はそこから大きめの破片を選び取り、同じように眼鏡を外し『視る』。

「俺と同じ眼の色！？」

「まさか．．．．．」

——そして、一閃。

同じようにして椅子の破片は『殺された』。

「——そう、なるほどね。わかりやすい 説明 感謝
するわ・・・・・・・・・・それならわたしを殺せたとしてもおかし
くない。——『直死の魔眼』か・・・・・・・・。」

「直死の魔眼・・・・・・・・・・？」

「ええ・・・・・・・・あらゆるものには発生した瞬間から予め決まっ
ている崩壊の時期——つまり、死期 が内包されている
わ」

「その『死』の情報を志貴さんは・・・・・・・・いや、私達は
『線』という形で視ているんだよ」

「私達つて、やっぱり君は・・・・・・・・。」

「持っているよ、『直死の魔眼』を・・・・・・・・まあ、かな
り変わったタイプだけれどもね」

私の魔眼は有機物の死を微かにしか理解できていないが、無機物や

魔力や気などの 異常 を誰よりも理解している変わりモノだ。

したがって、志貴さんや式さんのように人の死を視ることはできない。

「要するに、志貴はあらゆる物を外的要因も魔術的要因も無視して殺せる眼を持っているのよ」

「ま、今の志貴さんの眼はかなり危険な状態でデメリットがありまくりだけだな」

主に眼鏡で無理矢理押さえ込んでいる点に関して。

「……そのデメリットってやつを早く教えてほしいんだけど、いいかな？」

「別に良いですよ、では今の志貴さんの状態を説明しますと——
——「!?!」

説明しようとしたその瞬間——ホテルが揺れるような感覚がした。

「くっ………あああああああああああ
ああああっ!!!!!!!!!!」

——いや、それだけではなかった。絶叫を上げると共に
千雨の瞳までもが先程までの蒼い瞳から金色へと変化したのだ。

「どうしたんだ千雨ちゃん!？」

「何があつたの!？」

心配そうに二人は千雨に駆け寄るが………今度は髪の色までもが白へと変化し発光し始めた。

「………救わなきゃ救わなきゃ救わなきゃ救わなきゃ
救わなきゃ救わなきゃ救わなきゃ救わなきゃ救わなきゃ

[illegible]

「!？」

涙を流しながら頭を抱え、呪詛のように救わなきゃと叫ぶ千雨の言葉の意味をいち早く理解したアルクエイドは志貴の手をすぐさま掴む。

「……志貴！！奴が来たんだわ、逃げましょー！！」

「逃げるって……何処に!!」

「奴から逃げられればどこでもいいの!! 最悪、朝まで逃げることになるかもしれないけどね!!」

「千雨ちゃんはどつするんだ!？」

「引つ張つてでもいいから連れて行きなさい!.....さあ、行くわよ!..!」

「わ、わかつた!..!——行くよ、千雨ちゃん!..!って.....
.....いない!？」

志貴は千雨がいないことに気付き、急いで部屋中を確認する。

だが、さっきまで苦しみながら蹲っていた千雨の姿は部屋の何処にもなかった。

「何処へ行つたんだよ.....千雨ちゃん」

s i d e o u t

?????side

——— センチュリーホテルロビー前、そこはこの世の地獄と化していた。

上半身を、下半身を、頭部を、腕を、脚をなくした死体がロビーの大理石の床を血で汚し散乱しているのだ。

そして鉄のような臭いが充満し、数少ない生存者の姉弟の鼻孔を刺激する。

「う・・・・・・・・つく・・・・・・・・あう」

「静かにするのよ・・・・・・・・私がいるから・・・・・・・・」

絶望の中で姉は必死に泣きじゃくれる弟を慰める。

二人がこうして隠れなければならない状況を作ったのは他でもない、
混沌——ネロ・カオスの仕業であつた。

「パパ・・・・・・・・ママ・・・・・・・・」

姉が祈るように助けを求めると、ふいにコツコツコツ・・・と靴音がしてきた。

自分達と同じ生存者と思いチラツと顔を出すとその人物は周りの人間達を喰らい殺した黒い犬を連れている。・・・・・・・・つまり、自分達を助けてくれるような人物ではなかった。

「!?(誰か・・・・・・・・誰か、助けてよおおおおおおおおおおおお!!)」

心の中で絶叫し助けを求めるが、その人物は自分たちに気付きもしないように隣に立った。

・・・・・・・・そして、二人は男のコートから出現した鋭い牙を持つ獣に喰われ————なかった。

「えっ!？」

少女は驚いてその光景を目にした。

なんと、黒いコートの男は突然何処からともなく放たれた何かによって吹き飛ばされたのだ。

「何っ!？」

不意を突いた強烈な一撃を避けることができず、直撃したネロ・カオスは壁から起き上がりながら驚きを口にする。

——そう、そこには……妖艶に微笑み、白く発光した大剣をまるでのごぎりを構えるが如くこちらに向けている白髪の少女が立っていたのだ。

光のない黒く濁った金色の瞳で男と姉弟を見つめながら。

「こんなに人を殺しておいて今度はその子供達まで殺すというのかしら、ネロ・カオス？」

「貴様・・・・・・・・何者だ!？」

魔術師上がりの吸血鬼であるネロ・カオスは少女が魔術師であると一度は考えたが、詠唱もろくにせず強力な魔力の塊を大剣で放ったことからその考えを捨てる。

そこから抑止の守護者の類かと考えたが、明らかに相手は受肉している人間だったために正体が掴めず混乱した。

少女はネロ・カオスが喰らい殺そうとした姉弟を自分の下へと転移させると、その問いに返答する。

「私が何者であるかなんてそんなのはどうでもいいの・・・・・・・・・・
・私はただあなたの行動・・・・そしてその存在が気に入らないから戦い、駆逐するだけよ」

「ほう・・・・・・・・先程は不意を突かれてしまったが、そう何度もうまくいくと思うか？」

「いくわよ、私が直々に出て戦うんですからね」

そしてクルリとターンすると姉弟に向かって微笑んで言う。

「安心しなさい、私が必ず安全な所へ避難させてあげるから……
・・・そこから、動かないでね？」

「は……はい」

結界を張り二人の子供の安全を確保するとネロ・カオスに向き直る少女は――蒼崎千雨であってそうでない存在は大剣を構える。

「命は生まれた瞬間から計り知れないほど重いモノなの……
でも、あなたはそれを忘れ『食事』と称して喰らい尽くした」

「それがどうした、今の私にとってはそれが当たり前の事だ」

「確かにそうね、人に食欲があるのと同じであなた達のような吸血鬼には『吸血欲』というのがある。……けれども、それはこんなことをしなくても満たすことができるはずよ？」

「私に輸血パックなるものに頼れというのか？ 下らんな……
」

「はあ……ここまで酷い価値観のズレって嫌なものね、事を穏便に済ませるとか考えないのかしら……」

これだからマナーを守れない大喰らいの馬鹿は嫌いなよね、と溜息をつく。

「——まあいいわ、私は私がやるべきことのために、今ある命を守るために……あなたを邪魔をさせてもらうわよ?」

「フン、面白い——
かかってこい、人間！
！！！」

血に塗れたホールの中で、矛盾を抱えた 異常 の少女と混沌の獣を抱えた男の戦いの火蓋が今切つて落とされた。

ネロ・カオスのコートからオオカミ・鹿・トラなど多彩な獣たちが飛び出していく。

「喰らえ」

狙うはただ一人、無謀にも立ち向かう魔術師蒼崎千雨だけだ。

獣たちは直線状に少女へ向かって突き進むが………対する少女は口を開いて呟く。

「落ちる鳳凰、落凰破」
「コラプション」

持っていたデイスードをわざと回転するように投げ真空の波を作り出すと、一番接近していた三体を吹き飛ばし後方にいた獣たちに叩きつける。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！？」

先行していたオオカミが悲鳴を上げ倒れる。．．．．．その隙を逃さず彼女は詠唱を繰り出した。

「凍牙、其は非情の槍と化し殲滅の宴を開け！
凍槍、アイシクルペイン！！！！！」

手を振りかざし、空中から六本の巨大な氷柱が飛来させて次々と獣を突き刺さしていく。

「私にそう簡単に近づけると思わない事ね．．．．．次っ
！！！」

グルリと周りを見回せば、今度は一直線に向かってくるのではなく四方を囲むようにして獣たちは接近してきた。．．．．．その中には蛇もいる。

「あらやだ．．．．．私相手に触手プレイでもするつもりなのかしら？意外にスケベなのね、あなた」

「フン、貴様が私をどう判断しようが勝手だが．．．．．私は変態ではない」

「へえ．．．．．コートの下が裸のあなたが変態ではないと？．．．．．」
「冗談はやめてよね！！」

いやらしい笑みで彼女が微笑んだ次の瞬間――
彼女を中心として巨大な嵐が発生する。彼

それは鎌鼬の如く閉じ込めた獣たちを一匹、また一匹と斬り裂いていき、シュレッダーの如くバラバラに解体した。

．．．．．いや、解体するというよりは「散り散りにする」と言った方が正しいだろう。

何せ、獣たちは――
痕跡すら残らず塵となっていたのだから。

死の「線」を滅多切りにされて。

結果、ネロ・カオスが内包する獣の命は滅った。

「馬鹿な……私達をいとも簡単に消滅させた……
・！？何をした貴様！！」

自身の一部が『殺された』ことに驚愕し固まるネロを放って、少女は今度は自分の番だというようにゆっくりコツコツと靴音を鳴らして近づいていく。

「別に何もしていないわよ？ただ単に鎌鼬の嵐の中にあなたの同居者を放り込んで（死の線を）これでもかってぐらいに斬ってあげただけ」

ふわりと後ろ髪を揺らめかせながらさらに少女は接近する。

少女……蒼崎千雨であつてそうでない存在が何故獣を殺せたのかといえば、それは『直死の魔眼』が原因であるのだが、ここで問題なのが本来千雨が生物の死を僅かしか理解していないという点だ。

魔法や気などの 異常 でしか死の「点」を視ることができない彼女は、本来ならば生物は『切断』するだけしかできないはずである。

しかし、今の彼女は「点」ではないにしろ「線」をはっきりと何十本も視て斬り続けている。

体は全く同じ千雨であるはずなのに生物の「死」の理解度が違う……これはおかしいと思われるが理由は実に簡単だ。

——今、千雨の体に憑いて動かしている存在は生物の「死」を通常の千雨より理解しているのだ。

そう、「点」が視ることができなくても「線」を限界まで視ること

対する少女はというと……六連装型リボルビング・グレネードランチャーことアームスコーMGLを構えていた。

「……こういう近代兵器はあまり好きではないのだけれど、せつかくこの子が用意したんですからありがたく使わせてもらうとするわ」

狙うは胴体ではなく、これまたゾンビゲーに代表される的である頭……つまりはヘッドショットである。

「そんな銃器で私を倒せると思ったかああああああああああああああああああああ！！！！」

「ええ、思ってるわよ。私達はね」

腰を深く落とし照準を整え、息を吐くとウインクをしながら叫ぶ。

「じゃあね、混沌さん……次はこんな血に濡れた場所ではなく、もっと広い場所で殺しましょう！！」

刹那、銃口からグレネードが二つ吐き出される。

一つはネ口の右肩を掠めるようにして後方へと飛んでいき、もう一つは狙い通りネ口の頭部……ではなく口へと何故か吸いこまれた。

そしてネ口の喉元からゴクンとした音が聞こえる。

「……………あ、やっちゃったわ」

己が仕出かしてしまったことが起こる前に退却しようと待たせている姉弟の下へと急ぎ、二人を両脇に抱え込み階段の方へ走ると背後で爆発が起こる。

それもただの爆発ではない……………何処かニンニクのよ
うな臭いが漂う感じがした。

——否、ようなではなくてニンニクその物である。

「こ、これは……………ニンニクだとお!？」

「……………フッフッフ、大正解♪今のは高濃度で濃縮されたニンニクエキスがたんまり入った特製グレネードよゝありがたく受け取りなさいゝ!!!!!!」

振り向かずに大声で返答するとスタコラサッサと彼女達は逃げていく。

ちなみに何故こんなふざけたグレネードを千雨が持っていたかと言えば、脱出用……………その一言に尽きる。

これは創作でよくある吸血鬼がニンニク嫌いであるのと同じように死徒がニンニク嫌いであることを利用したある意味最強最悪の切り札であった。

……………まあ、口に直接入るとは計算外ではあったりしたのだが。

一先ず、瞬動で階段を飛び越えていき、安全そうな屋上を目指す。

「よつと、ほつ!!……………うん？」

途中、何者かが……………多分、志貴の仕業だろうが体を切り裂かれた獣たちの死体が散乱していたので、巧みなステップでそれを彼女は乗り越えていくと背後から剣が数本壁に傷跡を付けながら接近してきた。

「黒鍵が屋上に向かっているってことは……………エレイシアがいるってことよね。なら、元に戻りましょうか」

シエルにこの姿を見られるわけにもいかなないので意識を奥深くへと落す。

すると途端に瞳と髪の色が『サア……………』と流れるように元の色へと変化するとそこには紛れもない蒼崎千雨がいた。……………若干、イラついてこめかみに怒りのマークがついているみたいではあるが。

「（あの野郎……………勝手に死の情報を頭に送りやがって、殺す気か私を!!）」

突然ホテルを覆い尽くした多くの人の死を強制的に見せられ、ましては意識を乗っ取られ生存者を救いに行かされた彼女にとって――
『』の存在は今ほ怒りの元凶だ。

結果的に二人の子供を救えたとはいえ、通常の倍以上の死の「線」を見せられたのだから堪ったものではない。

「お姉さん・・・・・・・・どうしたの？」

度重なる恐怖で気絶してしまった弟を心配する姉は自分達を救ってくれた千雨に恐る恐る声をかける。

髪の色や瞳の色がいきなり変わったのには驚いたが、少女にとって千雨は命の恩人なのだからそんなことはどうでもよかった。

「ん・・・・・・・・いや、何でもないよ。怖がらせてごめんな」

できるかぎり怖がらせない声色でやさしく返事をし、頭を撫でてやると屋上のドアを蹴破る。

蹴破ったドアの先にはフードを被ったカソック服の女性、シエルが風に身を任せて立っていた。

「・・・・・・・・千雨、無事だったのですね」

「ええ、まあなんとか・・・・・・・・」

ネロと意識乗っ取られながらガチバトルしたんだけどね。

「今回はネロに逃げられてしまいましたが、まだこの町に彼はいるみたいです」

「でしょうね・・・・・・・・」

どさくさに紛れて思考盗撮してやったら、ネロの奴・・・・・・・・口アと繋がっていやがったし。

「ん・・・・・・・・その子達は？」

「・・・・・・・・ああ、この二人はネロに見つかりながらも助けることのできた生存者です」

「そうですか・・・・・・・・この二人のご両親はやはり――」

「ええ、もう此処には・・・・・・・・」

いない、とまではあえて言わず千雨は首を横に振って答えた。

事実とはいえ二人にそれを言葉に出して認識させるのは酷だと思われる。

「一先ず、教会に連れて帰りましょう。身元の特定もしたいですし」

「わかりました」

教会敷地内の孤児院の一室に二人を連れて寝かせた後、アルクエイド達の行方が気になった千雨は夜明けの中で戦いの疲れを引きずりながらも、合流するために事前に教えてもらっていたマンシヨンの中の隠れ家へと歩を進める。

「畜生・・・・・・・・頭がクラクラするし、魔力も不安定だ・・・・・・・・」

壁に手を着いて姿勢を維持しているのがやつとなほど体は重く感じられた。

「まったく、好き勝手に暴れやがって……後始末がどれだけ大変だったと思うんだよ」

喰われた死体が公に見つかることがないように隠蔽工作したり、自身の作った痕跡を消したりするなど数時間のうちに終わらせなければならなかったのもはや眠さは未知数の領域である。

目的の部屋の前へと着くとインターホンを震える指で柔らかに押す。

ピン、ポ——ン……………

『——はい、どちら様かしら？』

「カレイドスコープからの派遣護衛人こと、蒼崎千雨です……
・眼鏡をかけた謎の高校生と家出中のお姫様は御在宅でしょうか？」

眠すぎてテンションの具合がおかしくなっている千雨はインターフオンにこれでもかと近づき淡々と話す。

『え、千雨なの！？何処へ行っていたのよ！！』

「何処つて……………ホテルでネロの奴とガチでバトルしていただけです」

何度も言うようだが意識乗っ取られていたけどな。

「とりあえず中に入れてください、眠くて死にそうです。床でもトイレでもクローゼットの中でもいいですから寝かせてください」

『わ、わかったわ！！』

すぐにドアは開き、アルクエイドが顔を覗かせ招き入れると千雨は中に入り――事切れるようにして倒れた。

「ちょ、ちょっと！？千雨、廊下で寝るなんて駄目よ！！せめてソファーまで行きなさい！！」

「……………ZZZZ」

「もう寝てるの!？」

「そんなわけじゃないですか……私を寝かせたら大したものでしゅよ……ZZZ」

「ねえ、寝てるのか起きてるのかはつきりさせなさい!!」

「……寝起きてます」

その後ノロノロとソファアへとダイブして眠りについた千雨を見届けた後、アルクエイドは冷静に思考して現在の状況を理解しようとする。

・ベットには軽傷（魔眼の使用により疲労有り）のお休み中な志貴。
・ソファアにはネロと戦っていたという寝不足&肉体疲労
その他もろもろでダウン中の千雨。

「……」

両者とも直死の魔眼持ちという共通点を持っており、アルクエイド

にとって最高の切り札なのだが………現在、例によつて戦闘不能中である。

「どうすればいいのかしら、こんな時………」

その事で10分ほど真剣に悩んだ末に、彼女も結局寝ることにした。

s i d e o u t

月下邂逅 - 参 (後書き)

なんか、ごめんなさい。

次回も説明回になりそう。

千雨に取り付いている正体も若干明らかになります。

月下邂逅・肆（前書き）

説明回と言っておきながら、後半はほぼダイジェストギャグパート・

・

すみません、昨日アルバイト先のコジマでななめ立ちを注意されてからこんなテンションなんです。

ななめ立ちの理由はただ単に左足の長さが長いから曲げるしかないからなんですけどね。

治すにもなかなか時間がかかります。

ぶっちゃけ、二階担当ではなくて1階担当がよかった。

（二階で指導してくれる人が冷たい……………）

月下邂逅 - 肆

（精神世界）

——そこは真つ白な空間だった。

まるで地の果てなどないというようにどこまでも無で、広く、白く、暖かった。

——千雨は一人、その中で起き上がる。

「ここは・・・・・・・・確か・・・・・・・・」

立ち上がり辺りを見回すと、そこにはいつか見た孤独な世界だった。

「どうして、またここに・・・・・・・・・・って、まさかっ!？」

背後に気配を感じ振り向けばそこには――千雨と瓜二つの少女が後ろに手を組んで立っていた。

髪の色と瞳の色は言うまでもなく、白と黄金色で・・・・・・・・・・

『おはよう、千雨・・・・・・・・・・といっても外ではまだお休み中だけれどもね?』

「てめえ――」

地面を蹴り跳びかかると少女を地に伏せ、首を絞める勢いで胸元を掴む。

「――勝手に出てくんじゃねえって言っただろうがっ、このヤンデレイ野郎!! 何であんなタイミングで出てきやがるんだよ!？」

『何でって・・・・・・・・・・そうでもしなければ貴女はただ真祖達と逃げるだけだったかもしれないじゃない』

「だからって、何であんなに私に『死』を視せたんだ!! 下手すれ

「は頭がイカれたかもしれないだろう!？」

「最悪、廃人ってことも有り得たかもしれないというのに何でこいつは呑気に涼しい顔していられるんだよっ!？」

『それなら大丈夫よ、貴方は私が憑いている時点でただの人間じゃないもの。どんなに頭に負荷をかけようが平気よ?』

「——なっ!？」

知らされていなかった衝撃の事実^に千雨は硬直する。

つまりその意味するところは……悪く言えば人外、良く言えば超人ということである。

「じゃあ、どうして今回はぶっ倒れるまで疲労が蓄積してるんだ!？お前の言っ通りならこんなことにはならないはずなんじゃないのか!？」

『それは簡単な話よ、体がまだ慣れていない——その一言に尽きるわ』

「慣れていないってお前、まさかわざと慣れさせるために……」

『勝手に出てきたって訳』

少女はウインクをして姿を消すと一瞬のうちに千雨の背後に回り抱きしめた。

対する千雨は抵抗し引き剥がそうとするも実力差があるようですぐに大人しくなる。

『ねえ、千雨。私は貴女が目指す道を決して邪魔するつもりはないの……むしろ、協力してあげたいくらいよ』

急に真剣な眼差しを見せながら少女は千雨の耳元で官能的に話を始める。

「だったら………何で私を苦しめる」

『別に苦しめたくて苦しめているわけじゃない。……でもね、必要な痛みが今は伴うのよ』

「『必要な痛み』ね………お前はそれが終わるまで私に耐えろって言うのか？」

『ええ、悪いとは思っているのだけれどね………』

この世に必要な悪という存在がいるのと同じように痛みを伴わなければならぬ時がある。

そんな事はわかってるつもりだが――千雨は一つだけ少女に問うた。

「なぜ・・・・・・・・・・私を『抑止の精霊』の器に選んだんだ？」

忘れもしないあの冬の出来事で私は最上級の 異常 をさらに体に抱え込むことになった。

『抑止の精霊』と呼ばれる、封印されたこの星の抑止力の一つである始祖の精霊達が融合した魂をこの体に・・・・・・・・・・

『私・・・・・・・・いや、私達が貴女を選んだ理由はただ一つ、この星と人類を存続させるために動ける強力な体を持った憑代が欲しかったのよ』

彼女の話によれば、世界はこのままではかつて犯した過ちを繰り返すことになり星も人類も滅ぶ運命にあるというが、そうさせないためにガイアとアラヤは存在するのではないのか？

この二つは相対する関係ではあるが結果に星を守ることは人を守ることに繋がることもあるだろうに。

「………だったら、私より最適な人間がいるんじゃないのか？」

例えば、 根源 に最も近いという式さんとかな。

『確かに両儀式は特別な存在で興味深いわ………けれど、私達が求める器の持ち主じゃない。私達が求めているのはあくまで【人】という霊長であり【星】の定めた秩序に逆らって世界に干渉する力を行使できる器なの』

「ギガロマニアックスの力の事を言ってるのか？なら、西條さんだってそれに当てはまるんじゃない………」

この世で自分と同じ力が使える唯一の存在である西條拓巳を何故選ばなかったのか千雨は疑問に思った。

『いいえ、彼は貴女と違って魔術師ではないし魔力を行使する術^{すべ}を持ってないから当てはまらないわ』

「おいおい………まさか、私がギガロマニアックスに覚醒して魔術師としての道を歩むことさえなければ、お前と出会うこともなかったのか？」

『その通りよ。………まあ、その代わり未来は滅びへの道をゆつくりと歩いていくことになったでしょうけどね』

そうなる可能性はこれっぽっちもなかったのだけれどね、と囁くと少女は千雨から離れる。

——すべては世界によって仕組まれていた。

私が麻帆良から逃げたのも式さん達に助けられたのも全部、世界が存続のために仕組んだことだったらしい。

ネギも本来ならば、まだ精神が未熟で問題ばかり起こしてしまう少年で少しずつ成長していく人生を歩んでいたらしく、今のように幼い頃から自分の行動の過ちに気付いて精神を鍛えるなどしなかったという。恐らくは魔法世界を滅びから救うための抑止力として成長させられたのだろう。

何でそんな重大な問題の解決の為に私やネギの人生が狂わされなければならぬのだろうかと憤りを感じ抗議したが、少女の一言で取りやめることになった。

——少女は言ったのだ、『なら、貴女の子供が戦いに巻き込まれることになるけどいいの?』と……

世界に私はそう遠くない未来に誰かと結婚して出来たであろう子供を人質に取られた。

それは即ち、世界を存続せるために戦わなければ、お前の子供・孫達を殺すと言われたようなものである。

もはや、自分の人生を捨ててまで戦うしか子孫達の未来を守る術は残されていなかった。

「最初っから、私は抑止力の眷属になる運命にあったってことか……そうならずに済んだ平行世界の私が本当に羨ましい限りだよ」

そんな世界の私はネットアイドルを続けて、いつしか何らかの夢を叶えていたんだろうなと思うと涙が止まらなかった。

一体、この世界は何処まで残酷で何処まで優しいのだろうか。

『何も貴女一人で戦えとは言っていないわ、抑止力の一端を担っているからには貴女には多くの仲間が現れるはずよ』

「・・・・・・・・・・多くってどんぐらいだ？」

『さあね？全ては貴女の頑張り次第よ・・・・・・・・その分だけ人の出会いは増えていくのだから』

ようは多くの人と出会って友情を育めってことなのか？そらまた、難しいんだか簡単なんだかわからない課題だな・・・・・・・・

『——さてと、もうそろそろお別れの時間よ。何か最後に言いたいことがあるかしら？』

「特にないって言ったら・・・・・・・・嘘になるな。・・・・・・・・
・一つだけ言いたいことがあるけどいいか」

『何かしら？』

「お前に乗っ取られっぱなしで戦うのは癪に障るから、私にちゃんと戦わせろ」

これ以上好き勝手に体を使われてしまつては堪ったもんじゃない、せめて同時に意識を表に出すとか工夫をしてほしいものだ。

『別にいいわ、そんな事ならお安い御用よ』

「言いたいことはそれだけだ、じゃあな……マクスウェル」

精神世界に別れを告げると、私は瞳を閉じ外の世界へと旅立った。

s i d e o u t

千雨 s i d e

「——だから、私が処分に来たの。人間も“死徒”が増えたら困る『へぶっ!?』で……………しよう?」

窓に手を当てて外の景色を眺めながら志貴に死徒の説明をしていたアルクエイドは突然割り込んできた声に話を遮られた。

「……………あ」

志貴がチラリと横を見ると……………そこでは千雨がソファーから転げ落ちて床に鼻をぶつけながらキスしていた。

「痛っ——————！！鼻が、鼻が、鼻が
あああああああああ！！」

先程まで精神世界でシリアスタймだったというのに現実に戻って来てみれば突然出ばなをくじかれてしまった千雨は鼻を押さえて床をゴロゴロと動き回る。

「落ち着くんだ、千雨ちゃん！！今は鼻が腫れていないかどうかを確認するんだ！！」

「あ、そうだった……………うおし！！洗面所にちよっくら行っ

てくる!!」

ダッシュで志貴の提案に受け答えると目にも止まらない速さで洗面所の鏡に顔を映すと、ついでとばかりに洗顔を開始する。

・・・・・・・・・・5分後。

「復活!!そして、おはようございました!!」

「いや、何なのその変な日本語・・・・・・・・・・ございましたって・・・・・・・・」

「テンションもおかしいわよ、貴女・・・・・・・・」

そりゃあ、起きてすぐに鼻を強打すればこうなるわ!!若干、昨日

の変なテンション引きずってるしさ!!

アルクエイドが用意した朝食(?)のパンをはむはむ頬張りつつ会話を続ける。

「——ところで、千雨。ネロと戦ったって言ってたけど……奴は私の事で何か言ってた?」

「いえ、特には何も……ああ、蛇野郎と通じているのことはわかりましたけどね」

「(蛇野郎……?)」

「ふうん……そう、わかったわ」

「後は……奴の中の獣を少しばかり減らしたぐらいですかね?それでもまだ660ちょいぐらいはいますけれど」

「「え!?!」」

あれ?二人が驚いているがどうしたんだろうか……

「ろ、ろっぴゃくだって!?!ネロって奴はそんなに使い魔使役してるのか!?!」

「私は精々数十体だと思っていただけ……そんなに居たの?」

「そうですね………」

ネロは陰で歩く動物園とか言われているほどなんだから、たかが数十体なわけがあるまいて。

「それと、何を勘違いしているか知りませんがあの獣たちは使い魔ではなくてネロそのものですよ?」

「そうだったの!？」

「ありや、てつきり知っているものだと思ってましたよ………」
「……」

ニンニクグレネードで脱出を図ったことまで話し終えると二人には「どんな逃げ方だ………」苦笑されたが、こっちは必死だったことを伝えると話はず日話せなかった直死の魔眼についての話へと移り変わった。

「——それで、デメリットっていうのは何なんだい
千雨ちゃん?」

危険な状態の直死の魔眼を持つ志貴は身を乗り出して尋ねる。……
……すると、千雨はペンと紙を取り出し何やら図を書き始めた。

「・・・・・・・・これが今の志貴さんの魔眼の状態だよ」

すぐに出来上がった図には、理科や技術の授業で習うような豆電球と電池が導線で繋がった回路が書かれていた。

「この図にはなくてはならないものが一つ欠けているんです・・・・・・・・
・・わかりますか？」

「・・・・・・・・なるほど、そういうことね」

「スイッチ がないな・・・・・・・・・・」

そう、スイッチが存在しないのなら電池はただひたすらエネルギーを豆電球が発光するために使われて、いつかは光は消え電池は使えなくなってしまう。

この図式を脳や眼に置き換えたりすると、電池が脳、電球が魔眼、導線が視神経になる。

「志貴さんの眼鏡は言っなれば、電球を無理矢理覆って光を隠していたり電球を緩めて悪あがきしているだけなんですよ。このままじや間違いなく早死にします原因になります」

「そんな・・・・・・・・」

自身が早死にする運命と知って、志貴は絶句し頭を両手で抱える。

アルクエイドはそんな志貴を励ますために千雨に問いかけた。

「このままなら・・・なんでしょう？それを打開するための手段を取れば志貴は貴女のように助かるんじゃない、違う？」

「ッ！？そうだよ、千雨ちゃんが眼鏡なしで魔眼を操っていたんだから出来るはずだ！！」

「・・・・・・・・・・ま、その通りなんだけど・・・・・・・・・・上手くいくは保障できないですよ？」

志貴を救う方法はただ一つ・・・・・・・・・・それは、魔術回路を用いてスイッチを作ることだった。

「・・・・・・・・・・確かにそれが一番試してみる価値のある方法ね」

「一応、実例みたいなものがありますし理論上は可能だと思います」

式さんは自身の魔力を用いて気合で押さえつけているとかいないとか聞いたことがあったし、自身も似たような方法で魔眼をオン・オフできるようにしている。

「ただ、魔眼の強さがどのくらいによって成功率が変化しますから不安は尽きませんけど……」

それに魔術回路を起動させるということは丸一日戦闘不能になるということだが、ネロがいつまた襲撃してくるかわからない以上、迂闊に時間を浪費することはできない。

なので、千雨はボトルシップのように一般的な別荘の建築物が入ったガラス球……ダイオラマ球（携帯用）をトランクから取り出すと二人の目の前に置き、出入り用の魔法陣を描き始めた。

「……これは？」

「説明の時間も惜しいので、とりあえず出来上がった魔法陣の上に立つてください。すぐに追いつきますから」

「え、すぐに追いつくって……わあっ!？」

瞬間、志貴の姿が部屋から消え失せる。

「あれ、志貴が消えた!？」

「消えたんじゃないですよ、この中に入っただけです。よく目を凝らしてみればいるでしょう?。」

「本当だ・・・・・・・・」

小さな別荘の前にはキョロキョロと周りを見る学ランの人影がちよ
こんと立っていた。

「さて、何時までも待たせているわけにもいかないので私達も入り
ましょうか？」

千雨はアルクエイドの手を掴むと魔法陣の中へと招き入れ、別荘へ
と転移した。

志貴の魔術回路無事に（倒れはしたが）起動し終えた千雨とアルクエイドの二人は、ベランダへと出てドリンク片手にひと時の談笑をしていた。

「……へー、私が知らないところで魔法っていうのが生まれていたんだ」

「ええ、元々は精霊魔術の一つだったんらしいんですけどね、突然変異というか何というか枝分かれしてしまったそうです」

「この……ダイオラマ球だっけ、これってある意味固有結界の一種でしょ。そちらの方じゃ普通に売ってるものなの？」

「値段は割と高めですが種類は豊富らしいですね、オアシスタイプとか古風武家屋敷タイプとかお城タイプとかジャングルタイプとか色々……」

特にエヴァの持っていたものは凄かった。

海辺の別荘、膨大な範囲の城、極寒の吹雪の中、果てしない砂漠と目を疑うような光景が今でも目に焼き付いている。

「——ねえ、千雨。話は変わるけどいいかしら？」

「いいですけど、何でしょうか？」

急に真剣な眼差しになってアルクエイドは千雨を睨みつける。

「ネロがホテルを襲撃してきた時……貴女がなった姿、アレは何だったの？」

「!？」

いつかは問いただされるかも知れないと薄々思っていたその事を言われ千雨は激しく動揺し重々しく口を開く。

「……………言えません。私はその事について許可なく話すことが禁じられているんです」

「禁じられているって、貴方まさか……………セルフギアス・スクロール自己強制証文で契約を結ばされているの？」

「……………それについてもノーコメントです」

実際にはアルトルージュによって、血を使ったもつと強力な契約を結ばされているから話せないのだ。

その事実さえも話せないの、千雨はただ黙っているだけである。

「余程話せない事なのね………いいわ、このことは保留しておきましょう」

「そうして頂けるとありがたいです」

残りかけのドリンクを一気に飲み干すと微妙な空気になってしまったこの場をどうにかすべく千雨は別の話題を振った。

「そういえば言っていないませんでしたね、宝石爺と私の関係とか」

「え？ああ、そうね、聞いてなかったわね」

「宝石爺と私は………まあ、依頼主と傭兵みたいなものですよ。深い付き合いがあったりしますが」

主に魔法世界関連の仕事はよくあの人から回されてきたりする。

「何時頃初めて会ったの？」

「二年ほど前ですかね……ちょうどその時、知り合い（バゼット）

と無名の死徒を討伐中でしたから」

ダメット………もとい、バゼットが何処ぞに消え失せてしまったために単独で死者狩りしなければならなかったからよく覚えて
いる。

「止む負えず直死の魔眼を使って死徒を狩ったら倒れてしまいました
て、目覚めたら宝石爺に介抱されていました」

「……………どうして突然現れたのよ、爺やは」

「そりゃ、その死徒が気に入らなかったからでしょう」

陰で何をやっていたのかまでは知らなかったが、宝石爺を怒らせる
ほどのヤバイことを仕出かしていたんだろうな。

「それから何かと仕事を依頼されるようになって、今は麻帆良学園
に魔法世界関連で派遣されています」

「その麻帆良学園ていつのは？」

「魔法使い……………といっても、第二魔法とかが使えるわ
けではない、先ほど言った枝分かれした魔術師が創り上げた学園で
すよ。あちら側で真祖って呼ばれている見た目10歳の吸血鬼が住
んでいたりしますが」

「真祖ねえ・・・・・・・・でも、私のような力を使えるわけではないでしょう」

「そうですね。空想具現化は使えませんし、こちら側から見れば変異した死徒という認識になりますね」

あと、泳げないけど太陽や吸血衝動その他もろもろは平気っていうあちら側で最強の魔法使いでもあったりする。

「ちなみに1年前ほどから死徒27祖の番外位として登録されましてよ、承認したのは宝石爺以下略の友好的な死徒達ですけど」

「番外位って、ロアだけじゃなかったんだ・・・・・・・・・・」

エヴァンジェリンはロアと同列なのは嫌がっていたけれどね。

・・・・・・・・ああ、話すネタが切れそうだ。仕方ない、もうあの事も話してしまおう。

「で、ぶつちやけ正直なところあなたの下を訪れたのは、宝石爺とあなたのお姉さんにロアを排除してきてくれって言われたからです」

「・・・・・・・・・・今、さらりと凄いこと言われたような気がするんだけど気のせい？」

「アルトルージュさんからさっさと蛇ぶっ殺してこいと言われまし

た」

「余計酷くなってる!?!」

「アルトルージュさんから『やっぱり、アルクエイドちゃんはロングヘアの方がいいね』と言われました」

「姉さん何言ってるの、って……姉さんが髪を切ったんでしょうが!?!」

「アルトルージュさんから『アルクエイドちゃんの寝顔を写真に収めてきて、そしたらご飯三杯いけるから!?!』と言われましたが、やめておきました」

「ナイスよ、千雨!?!」

「その代わりとしては何ですが、寝言を録音して送りつけておきました」

「写真よりもつと性質が悪かった!?!」

「アルトルージュさんからあなたの服をコーディネートするように言われました」

「ああ……みんな同じデザインだしね」

「コーディネート後の服装の写真も撮るように言われました」

「だから、撮らないでね?」

「拒否した場合は更衣室を盗撮してやれと言われましたが？」

「それだけはやめて」

「『アルクエイドちゃんは、誰と恋をする？』と何故か誘われたカラオケでアルトルージュさんは歌ってました」

「何やってんの貴女達！？」

「帰りにナンパされましたが、通りすがりの黒騎士さんと白騎士さんに助けられました」

「スヴェルテンとシュトラウトは何やってんの！？」

「アルトルージュさんの大きな飼い犬に特注のバウリングルをプレゼントしました」

「プライミッツ・マードーに何やってるのよ貴女は！？」

「何故か会話が成立するようになって懐かれました、ガイアの怪物って案外優しいんですね……………」

「霊長の殺人者を手懐けた！？」

「数か月前には……………そうそう、関西弁の死徒が閉じ込められて困っているそうなので助けて、その後たこ焼き食べに行きました」

「コーバック・アルカトラスと大阪行ったの！？」

「とりあえず帰りにメアド交換しましたけど」

「・・・・・・・・・・貴女、どれだけ吸血鬼との交友関係があるのよ？」

「さあ？」

あの冬の日を境に私の知り合いには必ず「吸血鬼」というタグが付くようになったが、もう気にしないことにした。

いつ吸血鬼の知り合いが100人超えても私は特に驚かない。

喋り疲れたので冷蔵庫からおかわりのアセロラジュースを取出しコップへと注ぐと、死んだように眠る志貴を眺め千雨は思う。

「この人は真祖を守るために選ばれたんだろうな・・・・・・・・ホント、運命って抗えるモノなのかって不安で仕方がないよ」

ただ見えない明日を目指して歩み続けることしかできないもどかしさに私は奥歯を噛みしめた。

月下邂逅・肆（後書き）

お客様って言ってるのに、お客さんて言ってるよと注意されたり、声が小さいって言われたりしたけど……

私、ちゃんと言ってますけど？

それに初めてですから緊張して声が出ないだけですから。

そんな感じで鬱モードが続き、反転してテンションハイになった紅雷でした。

ああ、2階はやりたくない……

月下邂逅・伍（前書き）

まさかの一言に戻る。

更新遅れてごめんなさい。

月下邂逅 - 伍

丸一日（といっても外の時間では一時間しか経っていないのだが）眠っていた志貴を起こし、魔眼の状態を確認すると奇跡的にスイッチ作りに成功していることがわかった。

「よし……これで一先ず安心ですね」

「そうか、なら良かった……」

肝心の魔眼殺しはというと、魔術回路が万が一暴走した時の予防のために常時かけることになった。せっかく母さんが作ったものだしね。

「——あ、志貴さんが寝てる間にテレビで昨夜の事件のニュースを観てたんですが……」

「ああ……やっぱり、生き残ったのは俺達や千雨ちゃんが助けた子供達だけなんだろう？」

ネロに喰われた惨殺死体を目にした志貴にとって自分達以外に生存者がいることは絶望的に見えたのだが——次の瞬間、千雨の口から思わぬ一言が飛び出した。

「いや、生存者が他にもいましたよ」

「は・・・・・・・・・・？」

「しかも、運よくキャンセルしていなかった親子です。さて、果たして誰でしょう？」

「え、ここでクイズ？」

何処からともなくフリップボードを取り出すと、ドンッ！！とテールに突き立て志貴に見せた。

デデンッ！！！！

生き残った子は誰！？

A・さっちゃん

B・薄幸少女

C・しまじろう

D・ツインテール同級生

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さあ、誰でしょう!?!」

「いや、これって・・・・・・・・全部、弓塚さんでしょう?」

「なっ・・・・・・・・なぜ、わかつたんですか!?!」

「Bはともかく、AとCはクラスで聞き覚えがあるしDは心当たりが一人しかいないからに決まってるじゃないか!?!」

「ですねー」

「まあ、何はともあれ貴方のクラスメイトが無事でよかったじゃないですか」

「そりゃそうけど・・・・・・・・何でホテルに行かなかったんだろ

う?」

「ここで第二問!」

「またか!」

なぜ彼女はホテルに行かなかったのかの理由を次から選べ

A ・何故か知らんが親の不倫が発覚した

B ・何故か知らんが高熱が出た

C ・何故か知らんが誘拐された

D ・何故か知らんがネットゲに夢中になった

E ・何故か知らんが ピーッ!! に夢中になって気絶してた

F ・何故か知らん

「Fがもはや理由ですらない!!」

「知らないものは知らないってことですよ、ぶっちゃけ不正解ですけど」

「AもDもEも弓塚さんの言動と性格からありえないって!!」

「…….おお、よくわかってらっしゃる」

「Cはありえなくもないけど、なんか違うような気がする」

「勘が冴えてるな…….」

「ということで、現実味を帯びたBだろう?」

ファイナルアンサー
「FA?」

「ファイナルアンサーだ!!」

もう選択肢には戻れません…….

シキ……つまりは式さんからメールが送られてきました。
何か調査に進展でもあったのだろうか？

志貴から一旦離れると、素早い手つきでメールを確認する……
・そこには恐るべき事実が書かれていた、たった一文で……
・……

『遠野の家には四季^{シキ}という名の子供がいたらしい』と。

「——ふん、なるほどね。少し読めてきた……
・……」

空前の名前にシキと付けるブームはさておき、もう一人シキがいた
ことからある仮説を思いつく。

実は今いる志貴はその四季という人物の代わりにされ育てられたの
ではないか、と。

そんな馬鹿なと思われるかもしれないがそう考えれば話に筋が通る

のだ、志貴に七夜時代の記憶がないのも長男として扱われ存在しているのも全てだ。

だが、問題はいたはずの四季の行方についてだ。

「可能性としては既に死んでいるか、監禁されて生きているか、それとも――ロアとして生きているのかのどれかか……」

この町にロアがいることは間違いないのはわかっている、現に吸血事件が数件起こっていることだし。

しかし、遠野家が実質支配するこの町にロアの転生体になり得るほどの素質を持っている魔術師うんぬんはない。となると、支配されている側ではなくて支配している側に疑いの目は当然行く。

第一、東洋の鬼の血を引く紅赤朱という一族であるのだから疑わない方がおかしい。

「これはネロを倒し終わってからじっくり調べてみる必要があるな……」

最終手段としては潜入して関連資料（あるのかどうかは定かではない）を手に入れる必要があるが、その辺は追々考えるところ。今は時間がないし地道な方法しか取れないのだから。

懐から來未と協力して作り上げた特殊なカメラを取り出すと、コウモリのマークが描かれたUSB型メモリを開いているスロットへと差し込む。

『バット』

蒼いカメラは瞬く間にコウモリのように変形し千雨の周囲を回り始める。

「気付かれないように遠野家のこれまでの動向について調べてきてくれ」

機械のコウモリ……バッドショットにそう伝えると、翼を二・三度羽ばたかせて転移用ゲートへと向かっていき姿を消した。

「……………あの、正解なのか不正解なのか教えてくれないんじゃないかな」

志貴の言葉も届かぬまま結局、答えを得られず対ネロ戦への作戦会議へと移ってしまうことになった。

後日、本人の口から伝えられわかる事なのだから別にどうでもいいのだけれど。

パチンッ！！

「――話をしよう」

「「！？」」

千雨から地下に存在する暗闇の部屋で待機するように言われた志貴とアルクエイドの二人は、突如としてスポットライトに照らされて現れた黒シャツにジーンズ姿の千雨に一瞬ギョツとする。

そんな二人を余所に千雨は口を続けざまに開いた。

「あれは今から3年前だったか、いや・・・それとも4年前の事だったか。いずれにしても君たちにとっては過去の出来事だ」

「え、何なのこの展開？」

「俺に聞くなよ・・・」

「色々言いたいことはあるんだが、今は『直死の魔眼』について説

明しよう」

もう一度指を鳴らすと背後に白い背景が現れ、その上に黒い「線」が出現する。

「『直死の魔眼』の正式名称は『バロールの魔眼』、ケルト神話に登場するフォモール族の魔神の邪眼だ」

「本来は見たものを誰でも殺すことができる邪眼であるのだが、現在確認されている保持者は皆「点」と「線」という死の情報を視ることしかできない。これが何故だかわかるか？」

「……体のつくりが違うからじゃないのか？魔神って言うてるぐらいだし」

「良い答えだ。魔神と人とは脳の機能が何から何まで違うからな、死の理解度に大きな差がある」

今度は「線」だけではなく「点」も出現し背景をより一層黒く染め上げた。

「ああ、それと先程「点」が視えると言ったな。これは「線」が収束している場所であって、いわば弁慶の泣き所やアキレスの弱点が足であったのと同じような部分だ」

「ということは、そこを突くとまさか一撃で相手を倒せるのか？」

「そういつことだな。……だが気を付けろ、長時間視過ぎれば脳が耐えられなくなつて魔眼が暴走する恐れがある」

特に生物の死を視過ぎることは危険だ、無機物ならまだしも同じ人の死を理解するとなると脳の負担が大きすぎる。つまり、視るのはほどほどにすることだ。

「それと私の使っている剣についての説明がまだだったな。まあ、目にしたことはあると思うが」

ディソードをリアルブートし床に固定すると千雨はその周りをコツコツと歩く。

「これは『ディソード』……綺麗な造りをしているだろう？これはディラックの海と呼ばれる負のエネルギーで満たされた観測不能の境界面に干渉することのできる特殊な剣なんだ」

「普段は不可視状態になつていて透過するんだが、持ち主が任意で具現化すると途端に発光して不壊となり凄まじい切れ味を持つようになる」

「その剣にはどんな能力があるの？」

「そうだな……限定的空想具現化能力を使えると言つたらわかるだろうか。真祖が空想具現化という能力を持つようにディソ

ードの持ち主は第三者の立ち合いの下という限定空間において、空想・・・言い方を変えれば『妄想』を具現化することができるんだ」

「!?!?・・・それって、ある意味互角にやりあえるってことじゃない!!」

「力を最大限活用すれば互角までは行くかもしれないな。だが、こちらは具現化するにあたって多少精神を消耗する」

故に好き勝手に具現化できる真祖と戦ってもギリギリ引き分けるか、負けるかのどちらかしが残されていないのだ。

「——とまあ、ふざけた解説はここまでにしておき、ネロ・カオス討伐作戦を始めましょうか？」

「あ、やっぱりふざけてたんだね・・・」

「いや、だっていきなり作戦会議は重苦しいと思ひまして。ちょっとした余興ですよ」

にしては、少しやり過ぎた感はあるけどさ。あははははは・・・

「さて、先日も話した通り・・・ネロ・カオスは使い魔を使役して

攻撃しているわけではなく、自分そのものをわざと外に出して攻撃しているんですが……」

「問題はその数ね……666体も内包しているんじゃないわ」

「それに大きな力は使えるけど手負いの貴女は戦うことを避けた方がいいですから、結果的に戦力になるのは私と志貴さんだけですわ」

アルクエイド姫に長期戦とか持久戦とか今は無理だということで編成した結果、考えたのは至って単純なこのコンビだった。

まあ、私じゃネロを完全に倒すことは流石にできないけれど、「点」を視ることができる可能性を持つ志貴さんの支援ぐらいは楽勝だろう。

「俺がメインで倒すのか！？こんな奴を！？」

モニターに映ったネロの姿を指さし、無理無理と首を振る志貴。――

――そんな彼に容赦なく千雨は事実を突きつける。

「真祖は殺せたのに無理だとおっしゃるんですか、志貴さん？」

「けどあれは、不意打ちみたいなものだし……俺はただの

高校生なんだぞ？できることには限りがある」

「不意打ちね……それはわかりますけど、志貴さんの言うただの高校生はナイフ片手で真祖を瞬殺し17の肉片に変えられるんですか？」

「そ、それは………」

返答に詰まる志貴。

無理もない、彼の並み外れた解体技術は本来暗殺を得意としていた退魔『七夜』一族によって身に付けられたもの。その時代の記憶もなく遠野の人間としてただ生きてきた彼にとって受け入れがたい能力なのだから。

「ありのままに受け入れた方が身のためですよ。でないと、いつどこでまた死にかけるのかわかりませんから」

「ちょっと待ってくれ、『また』ってどういうことなんだ!？」

「何を言ってるんですか、私達は一度死んだから視えているんですよ『死』が」

正しくは死線をさまよっていたからだと言った方がいいのかもしれないがな。

「志貴……直死の魔眼を手に行っているってことは、絶対に一度は死に近づく何かときっかけがあったはずよ。そうでなければそう易々と手に入るモノじゃないもの」

「ああ、言っておきますけど『交通事故でガラス片が胸に突き刺さった』ぐらいじゃ視えるようになって普通ならいいですから」

私の場合は死を受け入れそうになり、なおかつ視えないものを視る力があつたりと幾つかの偶然が成り立って視えるようになったのだろつと言われた。実を言うとき式さんにも少し当てはまるらしい（視えないものを見据えていた所とか）。

つまり、何かしら常人とは違ったチャンネル（視えないものを視るというチャンネル）を持っていて死にかけると視えるという証拠に他ならない。

「視えない何かを視る力が……」

「これは推測だけでもね、それが変化もしくは進化して直死の魔眼になった可能性は否定できないんだ」

「そうね……ポツと突然発現するとかなんて考えるよりは現実的で筋は通っているわね」

第一、人類は進化して生きてきた動物だしね。

「……時に志貴さん、あなたは幽霊を見たことはありませんか？ちなみに私はありますよ」

うちのクラスのさよさんとかがいい例だ。

「幽霊か……確かに二・三度は見たことはあるよ」

小学校で一回、駅のホームで一回、迷い込んだ道で一回志貴は目撃したことがあった。

その時自分以外にも見えたという人がいて確認しあったのだが、どうも自分の方がより鮮明に見えていたようだ。

「ただ単に霊感が強いだけじゃなさそうですね……（やっぱり、七夜独自の魔眼か何か？）」

詳しくはやはり式さんに聞いてみないと退魔関係はわからないので一時保留するとして、後の問題は現状で志貴がどこまで戦えるかどうかだった。

「——という訳で模擬戦やりませんか？」

「模擬戦って……俺と千雨ちゃんが戦うってことか!？」

女の子に手を出すことに躊躇いがある志貴さんは私の提案をすぐに受け入れることはできず、他に方法はないかと尋ねてきた。

そこまでして私と戦いたくないんかい、アンタは。

「なんなら、姫と戦いますか？」

「それは全力でお断りだ」

「即答!？」

「いやだつて、実際千雨ちゃんより強いんだろアルクエイドは。だから瞬殺されたくないし、言い出しっぺの千雨ちゃんならいいかなつて……」

「というか、そもそもこんなことで力を消耗させたくないですし最初から私と戦えばいいんですよ」

何かすんごいこのやり取りで時間喰ったな……外じゃまだ一時間も経ってないんだけど。

「言っておきますが手加減は程々にしておきますよ、下手に甘くしたら話になりませんからね」

「それじゃあ殆ど本気ってことじゃないか……」

「……………志貴、ファイトよ!!」

「応援はありがたいけど、何か負けフラグっぽくて不安だよ!!」

「じゃあ、『俺、ネロ・カオス倒したら平穏な生活に戻るんだ!』
とえばいいんじゃないですか?」

「それは平穏な生活に戻れないフラグ立てているから!!しかも、
今は千雨ちゃんと戦うんでしょ!?!」

「フン、誰が戦つかよ」

「言い出しつpegがこの話の根底をひっくり返した!?!」

さ、冗談はこれぐらいにしておき、さっさと模擬戦始めましょうか。

おっと、その前に志貴さんの戦闘データ収集の為に思考盗撮つと……
……あれ?急に頭が……ぼー……と……
……して……

『悪いが、少しばかり君の身体を貸してもらおうか……蒼
崎千雨』

——頭の中へ何者かの声が聴こえた後、私の意識はそこで
途絶えた。

s i d e
o u t

志 貴 s i d e

準備があると言って先に部屋から出た千雨ちゃんを追いかけるように暫くして俺とアルクエイドは外の広場へと向かったんだけど・・・そこにいたのは先程までの千雨ちゃんじゃなかった。

何処が違うと言えば、いつも着ていたコートを脱ぎ捨てて最大限動くためにラフな格好をしていおり、右手には折り畳み式の蒼色をした変わったナイフを握りしめていた。

それに雰囲気もどことなく女の子が持つような雰囲気ではなく、明らかに戦闘態勢に入っていると感じさせるほどの殺気を放っていた。こちらに背を向けていた彼女はこちらの姿を確認すると妖艶めいた笑みを浮かべて語りかけてきた。

「—— やつと来たか、志貴。待ちくたびれたぞ」

「え？ああ、ごめん・・・・・・・・」

「（志貴を呼び捨てにした・・・・・・・・？雰囲気が違うのはわかるけど、いくら何でもいきなり呼び捨てはおかしいわね）」

アルクエイドはいつもとは違う千雨の態度に疑問を持った。

それに何故か今の千雨はどことなく男のような感じを持ち合わせているのだ、おかしいと思わない方がおかしい。

「吾はお前と殺り合いたくてうずうずしているんだ……さつさと構えろよ」

「（おれ……だって？何でわざわざ一人称まで変えているんだ？）」

違和感に志貴もようやく気付いて背後にいるアルクエイドにアイコンタクトを取るうとするが、それよりも先にアルクエイドが隣に立つて千雨（？）に向かって話しかけていた。

「ねえ……貴女、誰よ？」

明らかに千雨とは異なり、ナイフを先程から弄んだりしている少女はその質問に対して笑いながら答えた。

「クッククク……吾が誰だって？別に答えてやってもいいが……それじゃあ、つまらないな」

「はぐらかさないで！！貴女に黙秘する権利はないの、今すぐ貴女が何者なのか話しなさい！！」

隣に立つ志貴を軽く怯えさせるほどの殺気を込めて睨みつけると、髪を掻き上げて少女は苦笑する。

「おお、怖い怖い．．．．．ま、いいだろう、アンタみたいに解体されたくないしな」

——千雨（？）が指をパチンツと鳴らすと青空が途端に闇に包まれ周りを木々が囲い始め、一瞬にして彼らの周り是不吉な雰囲気漂う異次元空間と化した。

「これは．．．．．!？」

「生ぬるい場所で殺り合っても面白くないからな、工夫を凝らさせてもらった」

『やはりこの空気は堪らないな．．．．．』と呟く少女に対して俺はいい加減キレた。

「．．．．．さっきから殺り合う殺り合って、一体何な

んだよお前は!！」

七夜のナイフを少女に向け俺は怒鳴りつける――する
と、少女は両手を広げ歌を歌うように語る。

「吾は面影糸を巣と張る蜘蛛・・・・・・・・・・ようこそ、吾【七
夜志貴】の素晴らしき惨殺空間へ――!！」

少女――否、【七夜志貴】は駆け出し月を背景に躍りか
つた。

s
i
d
e

o
u
t

月下邂逅 - 伍（後書き）

千雨は色々と憑りつかれ過ぎ……

まあ、理由があるからなだけだね。

次回は久しぶりのバトル!!

そして外伝（ガトウ＆ネギが主役の話）の公開が迫る!!

……ネロはどうした？

月下邂逅 - 陸（前書き）

外伝のためのフラグ投入および七夜さんの災難のお話です。

次回でネロカオスフルボッコです（多分）

月下邂逅 - 陸

——キーン！！！！

七夜のナイフと千雨のナイフ『空鐘』がぶつかり合い激しい金属音を打ち鳴らし、二人は鏝迫り合いを繰り広げる。

「・・・・・・・・くっ！！」

「ハアッ！！」

その硬直状態を先に打ち破ったのは【七夜志貴】と名乗った千雨で、志貴の左頬擦れ擦れに高速の蹴りを放ち薄っすらと切り傷を負わす。

「くそっ！！」

対する志貴は負傷しながらも距離を取るために巧みなステップで後ろへと下がり再び構えを取った。

「・・・・・・・・フッ、やはり頭では覚えていなくても体は覚えてい

るようだな、志貴？」

「何の事だよ……………」

「【七夜暗殺術】……………吾とお前がたった今した動きだ」

「七夜…………暗殺術？」

その言葉から自分が握りしめているナイフに彫られた文字をとっさに見る——そこには紛れもなく「七夜」という文字が彫られていた。

「……………何なんだよ、七夜って！？お前の名前も俺と一体何の関係があるんだ！！」

「何の…………と言われたらそれは『血』なんだが、今のお前に何を言ってもわかりはしまい」

ふるふると首を横に振り諦めたような態度を【七夜】は見せると、志貴は奥歯を噛みしめて地面を強く蹴り駆け出した。

「だったら、意地でも聞き出してやる！！」

「お前が吾に勝てるのなら、教えてやろう！！」

——千雨の顔をしたらもう一人の志貴も駆け出し、再び刃と刃が交わり合った。

アルクエイド side

目の前で繰り広げられる千雨（【七夜志貴】憑依 ver）と志貴の戦いを余所に、彼女は一刻も早く戦いを止める為の手段がないか思考していた。

「割って入ろうにも、二人は直死の魔眼持ち……前みたい
にバラバラにされるのがオチよね」

それになるべく力を行使しない方がいいと千雨から忠告されている
ので、自分が介入して止めるという手段はもはや使えないものとな
ってしまった。

「第一、千雨の状態を何とかしないと止めようがないわ。けど、ど
うすればいいのよ……！！！」

具体的な案が見つからず苛立つアルクエイド。

——そんな時にふと、彼女はスカートの裾が引っ
張られる感覚を覚える。

（クイクイ）

「ん？」

裾を引っ張っていたのはオーソドックスな恐竜の形をした白い小さなロボットだった。

アルクエイドが自分に気付いたと分かると、別荘へ向かって時折振り返りながらとことこ駆けていく。

「……………ついて来いって事かしら？」

もしかしたら千雨を元に戻す方法をあのミニ恐竜ロボは知っているのかもしれないと思い、私は小さな希望に賭けてその後を追うことにした。

……………まさか、あんなモノが観られるとはこの時これっぽっちも思わなかったのだけれどね。

s i d e o u t

志貴 side

「ふっ!!」

奴が飛んだかと思えばすぐ背後にいる、そんな状況がずっと続いて
いた。

「・・・ちい!」

こちらも負けるわけにもいかないの、すかさず蹴りを放つが・・・
・・・奴はその足を左脇に抱え込み宙返りをしてそのまま地面に叩
きつけてきた。

「かはっ・・・」

咄嗟に受け身を取ったものの衝撃は完全には防げず軽くミシミシと体が悲鳴を上げる。そこへ向かって更なる攻撃を与えようと蹴りが降ってくる。

「蹴り碎く!!」

「・・・・・・・・・・ッ!!」

体を素早く転がし間一髪回避すると口の中を満たし始めていた血を吐きだしつつ立ち上がる。

「うおおおおおおおおおおおっ!!!!!!」

ボロボロな身体に無理を通して突進し水平に薙ぎ払うように斬撃を飛ばす。

対する奴も同じ方法で・・・・・・・・いや、自分よりはるかに洗練された動きで攻撃してきた。

「斬っ！！」

「はあっ！！」

キンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンッ！！

二人は何度も何度もナイフを連続で繰り出し音楽を奏でるように金属音を鳴らしていく。

それはさしずめ、刃と刃のワルツと言ってもよかった。

「そんな満身創痍な体で吾と殺り合えるとは……………感心したぞ」

「勝手に言ってる、変態……………」

「それを言っならお前もだろうがっ！！」

右の林の方へと駆け抜けけると、今度は木々を足場にして三次元的動きを持って二人はぶつかり合う。

……………実はその度に木が倒れ伏していくが当の本人たちはま

まったく無関心だった。

「この場所なら吾の方が有利だ!!」

「そう言ってられるの今の内だ、こん畜生!!」

両者とも譲らないで斬撃だけでなく、蹴り、拳、投げ技などを駆使してお互いの体力を奪っていく。

しかし、ほぼ無傷の【七夜】とは違い体に負担がかかっている志貴は突如として体のバランスを崩してしまった。

「そらっ!!」

「うわっ………!!?」

技術レベルで劣る志貴の動きのその僅かな隙をついて強力な蹴りを喰らわせると、その衝撃に耐え切れず志貴は広場へと飛ばされて大木の下へと寄りかかるように倒れる。

そして志貴を追って広場へと戻って来た【七夜】はそんな状態を気にせずに一歩また一歩と歩み寄っていく。

「・・・・・・・・やれやれ、最初は威勢がよかったのにもう終わりが？」

「ぐっ・・・・・・・・ま・・・・・・・・だ・・・・・・・・や、れ・・・・・・・・る」

「とてもそうには見えないんだが・・・・・・・・ま、どうでもいい」とだ、ここで安らかに眠るんだしな」

「!？」

千雨の顔をした死神は歪な笑みを浮かべて大きくナイフを上へと構えた。

「じゃあな・・・・・・・・七夜の誇りを忘れし亡霊よ」

——そして、容赦なく突き刺すために勢いよく振りかざす。

が、その凶刃に志貴がやられることはなかった。

——なぜなら、ナイフを持った右手を不自然に左手で押さえている千雨自身によって阻止されていたのだから。

「・・・・・・・・え？」

「何っ・・・・・・・・どうして体が動かない!？」

自身でもわからないと混乱する【七夜】の問いに答えるように『千雨』の口から言葉が紡がれる。

「——悪いが、こういう意識が乗っ取られるとかのシチュエーションには慣れているんでね。主導権を取り戻させてもらったよ」

「その口調は……千雨ちゃんか!」

「ええ、間違いなく私が千雨ですよ……憑りついている色男じゃなくてね」

いつものような普通の笑みを浮かべて千雨は志貴へ優しく語りかける。

すると、背後から何やら棺桶めいた大きな箱を広場の中心へと置いたアルクエイドが見えた。

「……さてと準備も整ったことだし、そろそろ幕引きとさせてもらおうか【七夜志貴】?」

突如として腰の部分に謎のL字スロット口があるベルトが光に包まれて出現する。

「何をするつもりだ!」

「お前が無理矢理私の制御を奪ったように、無理矢理奪い返すだけだ!……来いっ、フイング!」

千雨の呼び声を上げるとアルクエイドの肩に乗っかっていた恐竜型ロボットは千雨の掌へと鎮座する。

そして、素早く千雨はそれを変形させ恐竜の顔へと姿を変えさせた。

『FANG』

よく見ればその恐竜にはUSBメモリのような物がついており、ボタンを押すと同時に電子音が鳴る。

「変身っ!!」

勢いよくスロットへと変形させたそれを押し込み、右手を使って右側へと押し倒した。

『FANG!! GYAOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!!』

すると途端に獣・・・いや、恐竜のような大きな鳴き声と共に一人

の白き牙を持つ仮面の戦士が降臨する。——その名は・
・・・・・仮面ライダーファング。

ある二人のアーティファクトを参考に來未と千雨が共同で開発した『ロストドライバー』に『牙の記憶』を封じ込めたUSB状メモリを差し込むことで変身可能な仮面の戦士である。

「かつ・・・・・・・・格好いい・・・・・・・・!!」

「嘘・・・・・・・・そんな機能がついてるなんて私聞いてないわよ!」
「？」

志貴とアルクエイドがそれぞれ驚きを露わにするが、まだ驚くのは早かった。

白い装甲で包まれている彼女の身体から志貴の姿をしたミスト状の何かが弾き出されたのだ。

「吾を追い出しただと・・・・・・・・!!?」

「ああ、お前は所詮志貴さんの意識体に過ぎないからな、強力な別意思を持つコイツで押し出させてもらったんだよ」

「・・・・・・・・何時の間にこんなことを考え付いたんだ?」

「さあね？ 真実は私のみぞ知るってことで……ファイナールと行きましようかね？」

ケラトサウルスの頭部に似た『FANG』メモリのタクティカルホーンを3回弾き、右脚に白い刃……マキシマムセイバーを出現させる。

『FANG！ MAXIMUM DRIVE！！』

「さあ、お仕置きタイムだ！！ 色男！！」

一気に上空へと飛び上がると体を高速回転させて【七夜】へと向かう。

「ちよっ……悪い、吾が悪かった！！」

「罪の意識を持つのが遅いんだよ、ド変態！！——ファングストライザーアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「うわああ！！？」

見事に渾身の一撃は命中し、【七夜】は先程中央にアルクエイドが置いた棺桶へと吸い込まれていくとガタゴトと音を立てて沈黙した。

s i d e o u t

千雨 s i d e

暫くしてFANGメモリを引き抜き変身を解除した千雨は志貴を殺すためではなく治療するために駆け寄る。

「大丈夫ですか志貴さん！！」

「はは……あちこち痛むけど……なんとかね……」

口ではそう言っているが傷は多く、あと一歩間違えば確実に死んでいたであろう。

「ああもう、かなり体に負担がかつてるじゃないですか……・動かないで下さいね」

乗っ取られていたとはいえ自分が傷つけたのには変わりないと責任を取り、治療魔術を施していく千雨は今でも泣きそうな顔をしていた。

「……別に君が俺と戦ったことは気にしてないから泣かないでくれ、見てるこっちが悲しくなる」

「え……でも、事実は事実ですし……」

「いいや、これも全部【七夜志貴】って奴が悪いんだ!!千雨ちゃんが悪くない!!」

何処かの乾さんに有らぬ罪をなすりつけるようなセリフを志貴さんは堂々と吐いた。……そんなキャラには私は絶対になっただけほしくないのだけれど。

「それより千雨……貴女の機械でできた使い魔に頼まれるがままにアレを持ってきたりしたけど、何なのアレ？」

敢えてメモリの事は話さないことにしたアルクエイドは背後にある黒い棺桶箱に指をさし千雨に尋ねた。

「……………ああ、アレですか？見ればわかりますよ」

「でも、鍵かかって全然開かないわよ？」

「大丈夫です、私が開けますから問題ありません」

歩けるまでに志貴を回復させると肩を貸して箱へと近づくと、何故か千雨は驚いた顔をした。

「へえ……………ファングの奴、よりもよってコイツを選ぶとは……………結構いいセンスしてるな」

「え、何、どういう事？」

「いえ、こつちの話です」

自分の魔力でのみ開けられるように設定した箱に魔力を流し込むとカチンという音と共に鍵が開く。

「開けますよ」

蓋をゆっくりと上へと開けていくとそこには

ピクピクと白目をひん剥き震えている、どういつ事がメイド服姿の黒髪のグラマラスな美少女が倒れていた。

「・・・・・・・・・・は？」

「ふむ、ちゃんと器に納まっていたか・・・・・・・・成功だ!!」

「いや、何がっ!？」

「というか、誰!？」

ツツコミを二人して千雨に繰り出すと、どや顔で彼女は答えた。

「【七夜志貴】ですが……………何か？」

「ばんなそかな!？アイツさつき見た時、男だったぞ!？」

「そうですね。でも、私に憑りついたのだから男も女も関係ないと思います」

「確かにそうかもしれないけど……………」

「何故にメイドなんだ？」

フリフリのエプロンにミニスカート……………ガーターベルトにニーソックスと完璧までに萌え萌えなメイド姿であるのにはとある理由があった。

——それは遡る事今から1年前、母さん（橙子）が金を稼ぐために狂ったように参加したあの秋葉原メイドサミットの日
の事だ。

メイド服の歴史について詳しくそしてわかりやすく教えるために、

生身の人間に歴代メイド服を着せるのではなく人間に限りなく近い人形（表向けは特殊なマネキン）に着させることになり（人員の問題もあつたりしたからでもある）、偶然、主催者側に何故か母さんの旧知の人間（荒耶とかアルバじゃない）がいたので、多額の報酬を条件に十数体ほど人形を造ることになったのだ。

おかげで暫く母さんは眼鏡かけっぱなしでテンションがハイになっていたのは今でも覚えている。

「その後に処分するように言われたんですけど、数体だけ自費で買って保管しておいたんですよ」

「……そしてこれがその内の一体なのか」

「母さん曰く、そのイベントで展示した中では最高に出来が良いらしいです」

こんな事にまさか使う破目になるとは思いもしなかったけれど、まあ、いいか。

「あと、これでちゃっかり戦力確保できましたね」

「えー………そんな簡単に言う事聞いてくれるとは思わないけどな」

「大丈夫です、問題ありません。——この器に入っただけで

上、私の奴隷ですから、（ニヤリ）」

「（黒いわ、この子意外に黒いわ！！）」

事実、奴隷というより千雨の従者の行動を行うように細工が施してある。戦闘に関してはまるで問題がないので敢えて呼ぶなら 殺人メイド と言うべきか。

何はともあれ、3人は新たな仲間（？）……………七夜志貴（inメイド）を手に入れた！！

「とりあえず、また休みましょう！！」

「「おー！！」」

「……………」

アルクエイドに掛け声とともに別荘へと彼らは舞い戻った。若干一名引き摺られているが気にしてはいけない。

「(何だか悪寒が・・・・・・・・)」

当の本人は深い意識の中で震えていた。

s
i
d
e

o
u
t

月下邂逅 - 陸（後書き）

まさか、この小説でかつて別の小説で書こうと思いついた構想を使うことになるとはね！！

ちなみに七夜さんの容姿は生徒会の一存の紅葉知弦です。

キャラ崩壊で毎度毎度すみません。

月下邂逅 - 質（前書き）

大学から更新。

今回はシリアス率を高めてみました。

ギャグは少ない方です。

少しネタは出てきますが、七夜哀れ・・・・・・・・

月下邂逅 - 質

七夜の志貴殺害未遂からダイオラマ球で1日が経った早朝、美少女メイド化した七夜を加えて朝食をとった千雨は祈るように腕を組みテーブルに向かい合う三人を見回すと口を開いた。

「――さて、本日の夜に決行予定のネロ討伐作戦についてのブリーディングを始めますが・・・・・・何か開始にあたって質問はありますか？」

「特にないな」「特にないわね」

既に色々と情報を提供してもらっていた志貴とアルクェイドは淡々と紅茶を口にしながら答えた。

「大アリだよ・・・・・・」

約一名、アンティーク物の椅子に亀甲縛りにされ拘束されている「超」が付くほどの黒髪美少女メイドはそれにツツコンだが皆誰も気にしなかった。

彼女の名は【七夜志貴】。元男で志貴の殺人衝動としての人格であ

り、現在千雨の逆襲により女の子にされてしまっている哀れな人間だ。

「……………本当なら昨日外に出て作戦を実行に移す予定だったのに、私のミスと志貴さんの裏人格……………つまりお前のせいで体力回復に時間を割いたりした結果こうなってるんだが、文句あるのかエロスの塊？」

「もしくはド変態」

「あるいはM男」

「そこまで言う必要があるのかっ！？お前ら！！」

しかも、先日までの緊張感のないギャグっぽいお前達の日常はどこ行っただんだ！！と抜かしてくるが……………私達だって、シリアスになるべき場をわきまえている。お前が遅れているだけだ、新参者。

「こっちは七夜と遠野については一先ず保留にして真剣に考えているんだ、邪魔するなら黙っててくれないか七夜？」

「そうよ、少しは自分の立場を考えてみたらどう？」

「……………」

何時になく冷たい二人に額から汗をダラダラと流す七夜は少しばかり何かを考え、徐に口を開いた。

「ちゃんしますから・・・・・・・・・・縄解いてくれませんか？」

「お、割と素直だな・・・・・・・・・・けど、解くには条件があるぞ」

「何だつ、何を吾はすればいい！？」

椅子とドッキングしたまま立ち上がり身を乗り出す七夜。そんな彼・・もとい彼女に千雨はとんでもない条件を突きつけた。

「二度と志貴さんを攻撃しない事、私の従者になること、そして・・・・・・・・学校へ通え」

「・・・・・・・・・・は？」

一番目は絶対言われると思った条件だったから別にいいだろうと彼女は思い、二番目の意味は・・・・・・・・自身の服装を見て大体理解した。

だが、三番目はどういう事なのだろうか？

「ただでさえお前は志貴さんの殺人衝動だ、まともな思考力を身に付けさせるためにも学校には通うべきだ」

「ちょっと待ってくれ・・・はむう・・・これでも、まともな思考はあると思うんだが」

「「ねえよ」「

「・・・んっ、何で即答なんだ？」

まともなら自分の分身を襲ったり、人の身体乗っ取ったり、メイド服を着ていたりしないと思う（自分が着せたのは放っておいて）。あとさ、何でお前は空気も読めずアンパンをはむはむ食ってたんだ。アルクエイド姫もわざわざちぎって食わせてあげんなよ・・・

「ま、三咲町での仕事が終わり次第私の通っている麻帆良学園に編入手続きしてやるから、今は一般教養を身に付けつつ戦いに集中しろ。わかったか？」

「（こっちは一応年上なのに・・・何でこんなに舐められているんだろうか）」

「お返事はできますか？」

「・・・（第一、何で女の身体なんだ？胸が重くて肩が凝る）」

」

「返事をしなさい」

「（トイレの仕方だってまるで違うし、どうすればいいんだよ・・・）」

「返事は？」

「（吾、これからちゃんとやっていけるのか？）」

「・・・七夜ちゃん、へん・じ・は？」

「ひ、ひゃい！-」

超至近距離・・・つまり、鼻と鼻がこすれ合いそうになるまでの距離まで千雨は近づきアルカイクスマイルで強く言うと思うの海にダイブしていた七夜は一気に引き上げられ縮こまりコクコクと頷いた。

「よろしい——では、作戦会議に移ります」

部屋を暗くしスクリーンの電源を入れると、そこには決戦の場所となる公園が映し出された。

「ここは……」

「二人が初めて出会った美咲自然公園ですね。ここは広さがありますし、こちらが動きやすい場所になります」

「ネロの戦い方云々は置いての話だけでもね」

そう、ネロのオールレンジに対応できる戦い方を考えず無視すれば一見こちらが有利に見えるが、現実にはどちらにしてもこちらが少し劣勢だった。

「敵は一人ではなく、多勢か……」

「たった四人で挑むとなると数的にヤバイかな？」

元は同一人物の二人が真剣に腕を組みこちらの戦力と相手側の戦力について冷静に考える。相手は約六百に対しこちらは四人……単純に計算すると一人当たり百五十体相手をすればネロの戦力を削ぐことができるが、奴は並みの攻撃でどうこう出来るほど甘くはない。

「そうになると、やはりメインになってくるのは志貴さんと私になり

ますね」

「でも、それだとかかなり危険が伴うわよ。本当に大丈夫なの？」

確かにアルクエイドが言うように直死の魔眼持ち二人がメインになって攻撃するのには常に死と隣り合わせという途轍もないリスクが伴うのだ。それに万が一の場合、二人のどちらかが倒されてしまえばこちらが大幅に戦力が削られることになってしまう。

「大丈夫です。何も特攻して『点』を突き刺すっていう超短期決戦的作戦ではないので、やり方はいくらでもありますよ」

特にマクスウェルがホテルで表に出た時に使用できた嵐を発生させる攻撃「フィアフルストーム」を用いる『線』のシュレッダー的攻撃は有効だということが証明されている。したがって、数だけ減らすなら「点」をいちいち突く必要はないのだ。

「つまり、ネロの弱体化を千雨ちゃんが試みた後、俺が止めを刺せってことなのか？」

「確かにそれなら理論上は可能だろうな……しかし、あと何手が欲しい」

「そうね……念の為に策を重ねておいた方がいいわ」

「だが……具体的にどうする？ ホテルで私が使った手はもう使え

ないだろうし」

ニンニクグレネードをお口に投入して弱体化作戦に二度も引つかかるとは絶対にならないだろうしな。

「なら……落とし穴はどうだ？下にニンニクを大量に入れたプールを作っておくとかすれば……」

トラップにやけに詳しい七夜が顎に手を当てそう提案すると、千雨は苦笑しながらこう答えた。

「私の知り合いにその手でやられた奴がいるけど……ネロには効果的とは言えないな」

エヴァンジェリンと違って、奴の中には嗅覚が鋭い獣がいるから気付かれる恐れがあるし、後々処理が面倒そうだからな。

面白い案だが止む負えず却下しようとする、志貴さんが待ったをかけてきた。

「——いや、事前に準備するんじゃないかってその場で作り出せばいいんじゃないか？」

「え？」

「ほら、千雨ちゃん言ってたじゃないか、妄想を具現化することができるって。それを使えばわざわざ仕掛けておく必要もない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

志貴の言う通り、その方法ならば効果的にネ口を弱体化することが可能だろう。が、千雨は暫く押し黙ったままだった。

「・・・・・・・・千雨？」

「——なんだ」

「へ・・・・・・・・？」

「ダメなんだ志貴さん。今回の作戦では妄想具現化は使リアルブートうことができない」

三人とも顔をしかめて何故だと視線を送るが千雨はただできないと沈黙するだけであつた。

——当然、そう言うのには深い理由がある。

実は【マクスウェル】を表に出して戦っている時は千雨の思考で完全に妄想することができないためディソードのみしかリアルブートができないのだ。

「……その代わりと言っては何だが原素魔法エレスというく魔法使い>側が使う魔法に極めて近く限りなく遠いものが使うことができるので戦力に特に問題はないのだが、それでも妄想具現化による攻撃ができるというアドバンテージが失われてしまう。」

「事情は本当に話すことができないんです……ごめんなさい」

「いや、よく考えてみればこの案じゃ千雨ちゃんに頼り過ぎになっちゃうし、別に謝らなくていいよ」

「どんな能力が見てみたかったけれど、無理はさせられないしね」

「提案した吾も悪かった、事情があるとは知らなくてな」

しょんぼりと申し訳なさそうに謝る千雨を慰めると皆は代案についてそれぞれ思い思いに考え発言を開始した。

「吸血鬼の代表的な弱点というと、やっぱり太陽光だよな」

「ええ。私は少し怠い程度に感じるけど死徒にとっては克服することの難しい弱点の一つよ」

「しかし、奴を誘き寄せるのは夜・・・朝は引き籠って出てこない以上どうすることもできん」

「夜に太陽光並みの光なんて出せないからな」

そもそも出せた所で周りにいる自分達が危なくなる。

「金属とかはどうなんだ？」

「物によるわ、効果的なものとそうでないものがあるから・・・
・一番良いのは銀だけど調達が難しいわね」

「対吸血鬼用の加工を施せば何とか効果的だけれども、ネロに効くかは保証できないな」

実際、それを用いて返り討ちにされた者も少なくはない。

「ここは発想を変えて・・・電撃とかはどうだ？」

「意外な発想だ・・・が何故に？」

「いや、ネロは元人間の吸血鬼だろう？それにいくら獣を大量に内包しているとはいえ高電圧に耐えるのには無理があると思うんだ」

確かに生物が耐えられる電圧の度合いはそう高くない……ネロ・カオスとて吸血鬼ではあるが一応は人間で生物だから、もしかしたら効果的かもしれない。

「公園内の外灯のケーブルを上手く使えばどうにかできるかもしれないな」

「倒すまでは多分いかなだろうけど、その案なら一時的に動きを封じることができると思う」

その代わりこんがりと焼けたネロ・カオスを目にする可能性があるのだが、そこは気にしない事にしよう。

こうして作戦会議を何時になく真剣に行なった一同は、アルクエイドを別荘内に残し（迂闊にネロに気付かれることがないよう夕方まで）公園での人払い・電撃作戦の下準備をしに公園へと向かった。

「・・・・・・・・ねえ、千雨」

「はい、何でしょう?」

空が光を失い黒く染まった満月がきれいな夜の下、アルクエイドと千雨は公園のベンチに座り話していた。

「何も貴女までここに座っていることはないんじゃないの?」

「ああ・・・・・・・・すみません、本当なら志貴さん達と隠れている予定だったんですけどそうもいなくなっちゃって・・・・・・・・」

「へ？どういうこと？」

「……………実は私も狙われているんですよ、ネロに」

ホテルの一件でネロと一戦を交えた千雨は完全にネロの殺害対象になってしまっているために、下手な手口で姿を隠しても無駄だったのだ（だからこそダイオラマ球を使ったのだ）。

故に、準備の際には志貴や七夜に遠くから指示を与えてつつ気配遮断や魔力殺しに注意して行動していたほどの警戒ぶりを彼女をみせた。

「……………ま、正確には私ではない——『私』を狙っているわけだけどね」

刹那、アルクエイドの瞳にはホテルの時に千雨が見せた髪の色をした「千雨ではない何者か」が映った。

「——ッ！？貴女は……………」

「そう警戒しないで、お姫様……………『私』は千雨の半分みたいなものだから、ね？」

人差し指を唇に当て、優しくウインクする白髪の千雨……………
【マクスウェル】は微笑み警戒を解くように促す。

すると、アルクエイドは何処か納得したような顔を見せてこう言った。

「……………なるほど、——貴女が千雨の妄想具現化を使えなくしている理由なのね」

「ええ、妄想具現化は千雨の思考があつてこそ発揮される能力………割り込んで出てきている『私』には到底扱えない能力よ」

「そう……………で、貴女は何て呼べばいいのかしら。千雨と呼ぶわけにもいかない事だし」

完全に目の前にいる存在は千雨とは別物と判断した彼女は静かに問うた。

「——そうね、【マクスウェル】の名は名字みたいなものだし……………ここは千雨の名前に肖って【レイン・マクスウェル】と名乗ることにするわ」

手を差し出し「よろしくね♪」と握手を彼女は交わした。

———そうして暫く経った数分後、ネロ・カオスは
公園に姿を現し長い夜の宴が始まった……。

月下邂逅 - 質（後書き）

次回はネロ・カオス戦クライマックス！（多分）

今回はやつとカオスヘッドネタ「ヤンデレ五段活用」が出せたよ・
・
・
・

ちゃんとはできていないかもしれませんがね。

それはそうと外伝でのネギ編でMM元老院がマジ外道になったよ、
どうしよう・・・

外伝予告・ネギ&ガトウ編・（前書き）

あの仮面ライダーWの伏線はこのためにあつたのだ・・・

作者の妄想はここにリアルブートする！！

外伝予告 - ネギ&ガトウ編 -

外伝―ネギ編―

2002年夏。

少年は一人、魔法世界を駆け抜けてアリアドネーから少し離れたある町へと訪れていた。

「・・・ここが、反メガロメセンブリア政府組織<lore
m ipsum>がある町か」
ロレム・イプサム

そして、少年はその地で戦う一人の少女と邂逅する。

「君は何故戦っているんだ？」

「奪われたモノを取り戻すためかな・・・」

戸惑いの中で出会った少女との仲を深めていくが、そこに次第に影が忍び寄る。

「何だコイツ!?!」

「攻撃がまるで効いてないよ!?!」

謎の襲撃に倒れ伏す者達。彼らが絶望を感じ始めたその時――

一人の戦士が立ち上がる。

「後は俺に任せてくれ……………すぐに片づける」

「無茶だ!?!いくら君でもアイツには……………」

「無茶と言われようが僕は……………いや、俺は止まるわけにはいかな
いんだっ!?!」

少女の制止を振り切り、ネギは強大な敵の目の前に立って叫ぶ!!

「変・・・身っ!!」

逃れられぬ運命を背負いし加速者よ、
世界を駆け抜け果てを目指せ。

外伝 - ネギ編 > 加速する運命編 > - 近日公開!!

そして同時に進行するストーリー<ガトウ編>は!!

貸し切りのホテルのレストランで二人の男が真剣な顔で向かい合い、若い方の男が口を開く。

「実は貴方に頼みたい事があるんですよ……ガトウさん。いえ、今はガトーさんでしたね」

「どちらでもいいぞ、クルト」

突如として舞い込んだ元仲間からの依頼、その内容は……違法研究所の探索う！？

「……なるほど、MM元老院がついに本格的な暴走を始めたってことか」

バイクを駆って辿り着いた見るからに怪しい霧に包まれた研究所。そこで彼はとんでもないものに出くわした！！！！

「おいおい……これは何の冗談だよ？」

襲いかかる謎の敵の間を潜り抜け彼が目にしたとんでもないものは一体何だ！？

い、男の熱き魂を蘇らせる。

過去と今と未来が複雑に絡まりあ

．．．．．あれ、誰かがガトウの手を握っているぞ！？こ、この
顔は！！

外伝 - ガトウ編 - 流離う骸骨編 -

鋭気執筆予定！！

融合する。

そして、最後に二人の物語は

> i 2 6 4 9 6 | 3 0 0 6 <

これが男たちの物語だ！！！！！

外伝予告・ネギ&ガトウ編・（後書き）

シリアス全開編がもうすぐ始まります。

それまでどうかお待ちください！！

月下邂逅 - 終（前書き）

更新遅れてすみません。

グダグダですが、どうぞ・・・

月下邂逅 - 終

「待たせたな……真祖の姫君、そしてあの時の女よ」

作戦に沿ってベンチに堂々と腰かけていた二人の目の前に黒コートの男……ネロ・カオスが静かに現れると、レインは唇を軽くつり上げニタリと微笑みながら返事をした

「遅いわよネロ・カオス。待ちくたびれて眠いったらありやしないわ」

「ええ本当。随分と待たされたわ、ネロ・カオス……それとも、フォアブロ・ロイワンと呼んだ方が良かったかしら？」

「――！！」

アルクエイドがかつて人の身であった頃のネロ・カオスの本名を口に出すと、一瞬だが言葉を失った。そして数秒ほど間を開けた後に再び口を開いた。

「よもやな……人であった頃の名を呼ばれるとはな。さすがは真祖達が用意した処刑人、というべきか。我々二十七祖の経歴など知り尽くしているということか」

「二十七……という事はやはり貴方達は蛇を同胞として認識して

いないのね」

「そうだ。奴は吸血種としての意味を有していない吸血種だ。とはいえ、私自身は奴を他の死徒よりは理解しているがな……………」

『永遠』を求める同志だからこそ、ロアとネロは通じ合っているのだろう。しかし、その事と真祖を狙う理由はあまりにもかけ離れすぎており少しばかりレインを苛立たせた。

「で、貴方はその蛇さんをお願いされて彼女を襲いに来たってわけ？」

「それもあるが私個人の目的もある……………特に貴様だ」

殺意の籠った鋭い視線をさっそくレインに向けて放つネロ。理由は簡単でホテル内の戦闘で自身の一部をごく僅かではあるが失ったことを未だに根に持ち引きずっているのだ。

「へえ……………まさかとは思うけど、自身の一部を失った腹いせに私を取り込みたくなったのかしら？」

殺気をもろともせず余裕の表情でクスクス笑いながらそう彼女は返す……………光が失せ狂気染みた黄金の瞳でしっかりとネロを見据えながら。

「フン、その通りだ。ある意味貴様は真祖よりも興味深い存在だからな」

「あらそう。……ま、殺意云々を抜いたら悪い気がしないんだけど」

溜息をついて一旦瞳を閉じるとその瞬間、ネロの胸部から一体の獣が彼女目掛けて飛び出した。

「……………ッ!? 危な——『くないわよ、全然』」

アルクエイドがすぐに反応しレインに避けるよう指示するが、瞳を閉じたままのレインは冷静に答え右手を前に突き出した。

すると、どういうことだろう……………突然燃える流星をイメージさせるような杖が出現し獣の口に二つに分かれた杖の先の片方が突っ込まれたのだ。

「グオツ!? ガアアアアアアアアアア!!!!」

「……………うるさい喋るな、汚らわしい獣よ」

先程とは打って変わって鋭い目つきを獣に対して向けると静かに言

い放つ。

「血に飢え生き物としての誇りを忘れたお前達にかける慈悲などものはや一切ないということ————思い知るがいいっ！！」

刹那、杖の先から眩い閃光が放たれ獣の姿を覆い隠す。

「何なのこの魔力の大きさは！？」

覆い隠すだけではなく後方にあつた木々すらも飲み込む………
かと思われたが不自然に消え失せ彼らの周りが一瞬にして元の明るさに戻った。

「……………なん……………だと？」

ホテルでは鎌鼬のような嵐の中で自身の内包する獣たちを減らされたネロだったが今度は……………たつた一発の魔力砲によって塵すら残さず光と共に一体が掻き消されたのだ。

その現実を長年の間味わったことすらなかったネロは驚愕を露わにする。

「意外にあっけなかったわね……てつきりもう少し手こず
ると思っていたのだけれど」

ベンチから立ち上がり杖を弄ぶレイン。そんな彼女の態度にネロは
返す言葉すら思いつかなかった。

「——さあ、始めましょう。ホテルの時とは違って大暴
れできるこの場所で、存分に！！！！」

放り上げた杖が自身の右後ろに落下してきたところを見もせず
に掴み、先をネロに向けると彼女は唇をつり上げてそう叫んだのだった。

志貴 side

「・・・・・・・・始まったか」

「ああ、そうだな」

公園の木々の中にひっそりと身を隠している志貴と七夜が見つめる先には杖を振り回してアルクエイドを守りながらネロの獣たちを一人で相手にする千雨の姿があった。

「あの時と同じように髪の色が変化しているけれど・・・・・・・・ア
ッって本当に何なんだろうな？」

「吾に訊くんじやない……………（憑いた時に感じた違和感の正体はアレだったのか……………）」

七夜が憑いた時はレインが休眠状態にあつたために千雨は対抗することができず簡単に憑かれてしまったのだが、その時彼は千雨の内部に存在する何か……………つまりレインの存在を微妙に感じとっていたのだ。

……………もつとも、その事を話さないように嚴重に千雨から口止めされていたりする。

「しつかし……………さっきの攻撃、お前が『殺して』くれなかつたら確実にやられていたな」

「あ、ああ。さっきの本気でビビったな……………」

不自然に消滅した千雨^{レイン}による高威力の魔力砲は実は進路上に身を隠していた志貴がとつさに殺して食い止めたのだ。

事前打ち合わせになかった行動だったので正直二人はビビったが、何とか反応して結果無事に生還することに成功した。

「……………なあ、あれだけの攻撃を出せるんだつたら俺達は必要ないんじゃないか？」

先生の事を教えてもらった時に観た蒼崎姉妹のバトル映像で登場した蒼い閃光が脳裏に蘇る。しかし、七夜はジト目でその意見に対して返答した。

「馬鹿言え、さっきのは事前に詠唱を完成させていたから放てたものだ。そうドンパチと放てるもんじゃない」

「え、でも、詠唱って言ったって撃つ前に何か呟いていた感じはしなかったぞ?」

精々アルクエイドと喋っていた程度でだったと思うし。

「だからな、ようは自己暗示なんだよ。自身に言い聞かせることができるのならば、わざわざ口に出して詠唱するする必要もないんだよ」

「ということは……………」

「事前に詠唱済みの強力な攻撃を放っただけの事だ。……………ほら、見てみる」

七夜の指が示した先には獣の攻撃を回避しながら口を素早く動かして『マグネティックゲート』を発動させる千雨^{レイン}が見えた。

「今の千雨は先程の高威力攻撃とは違って、そこそこ威力のある比較的短い詠唱で済む攻撃を繰り返しているだろう?」

「本当だ……………」

獣たちが受けているダメージは少なそうだけど、次々と動きを封じられて千雨ちゃんの方へ引き寄せられていく。

「乱れ飛べ翠影! ウィンドニードル!!」

そして、対する千雨ちゃんはカンフーアクション顔負けの巧みな動きで『線』を風の刃で斬り裂き数を減らしていた。

「くそ……………作戦とはいえ俺たちはここで見ていることしかできないのかよ」

いくら実践慣れしていて主戦力を担っているとはいえ、彼女はまだ女子中学生。高校生で年上の自分達が戦わずに待機したままにいるのは流石に我慢ならなかった。

「焦るな、志貴。ここで迂闊に出て彼女を困らせればすべてが台無しになる」

「それは・・・・・・・・わかってるけどさ」

「それに不測の事態が発生する恐れだってある、その時吾たちが動けなくてどうするんだ？」

七夜の言う通りだ。止めを刺すだけの役割とはいえ、そう簡単に上手いく保証はないのだ。ならば、ここで打って出るより自身のコンディションを最善の状態にして待機し成功率を少しでも上げた方が得策である。

「もう少し信じてやれ、彼女を・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そう、だな」

自身の命の危機を救ってくれた彼女を信じなければ自分が今ここに
いる意味がない。そして、アルクエイドを守るといふ誓いを放棄し
てしまうことになる。

それだけは絶対に避けたかった。

——だがこの時、俺達はまさか七夜の言う通り「不測の事態」に巻き込まれるとはこれっぽっちも思っていなかったのだ。

s i d e o u t

千雨^{レイ}s i d e

——視界がやけにクリアに感じる。

精神世界から外を眺めると獣たちの動きがスローモーションのよう
に見え、手に取るようにわかった。

そして、自らの中には怒り、悲しみ、苦しみ、喜びと様々な感情が

渦巻いて一つとなっている。

—— ああ、これが精神を同調させている状態での世界の見え方なのか。

『ええ、そうよ。これが世界の真実^{リアル}……』

今まで一方的に主導権を奪われていた千雨にとってレインと同調したことにより見える世界はまさに新世界だった。

死の「線」ですら美しいと思え、顔の表情には出さないが心を刺激し千雨を興奮させる。

（不思議だ……自然と心地がいい）

右手に握りしめる紅き流星をイメージした杖……『ウォルドエンド』がディソードとは違う己の力を解放してくれている気さえた。

——そして、自分の周囲を三つの青・赤・緑の光が柔らかに包み込む。

(・・・これは？)

『これは私よ。元々はバラバラだった三体の精霊の魂が融合し私という個体を創り上げたの。だからね・・・融合する以前の私達を役する力を今の——私を完全に受け入れた貴女に託すわ』

緑の光は妖精の姿に、赤い光は巨大な拳を携えた竜の姿に、青い光は人魚姫のような姿にその姿を変えた。

『さあ、契約は結ばれたわ・・・千雨、あなたがままに私達の力を振るいなさい』

——刹那、精神世界から一気に現実へと引き戻される。

「……………さあて、そろそろ本気を出すのでしょうか？」

一旦、ネロと距離を大きくとり構え直すと既に合計30体以上の獣を失った彼が眉をピクリとさせる。

「貴様……………私にこれだけの事をしておきながら、まだ本気を出していないだと？」

「ええ、そうよ。今までのほただのお遊戯……………ウォーミングアップってところかしらね」

杖を右肩に乗せニヤリと軽くそう言つと齒ぎしりを立ててネロは拳を握りしめる。

「……………け……………な」

「ん？」

「……………ふざ……………けるな」

「何を言ってるの？声小さくて何も聞こえないんだけど？」

わざとらしく耳に手を当て挑発するレイン。そんな彼女の態度にネロは――

「ふざけるなああああああああああああああああ
あああああああああああああああつ!!!!!!!!!!」

激昂し体を巨大化させレインに突進を仕掛けた!!!!!!

「――そーこなくっちゃ、ね」

水平に浮いた『ワールドエンド』に座り込み、コートをゆらゆらと揺らしながらゆっくりとレインは横へと移動する。

「何をしてるの貴女、早く避けなさいっ!」

このままでは確実にネロの突進の餌食となるに違いないと感じたアルクェイドはマイペースでいるレインに対して警告した。
・ ・ ・ ・
・ が、しかし。

「心配ご無用よ」

レインはあろうことが、呑気に手まで振り始めた。

「何やってんだ千雨ちゃん!? それじゃあ、ぶつかって下さいって言うてるようなものじゃないかっ!」

「——しっ! 声をもっと落とさないか志貴!」

茂みに隠れる志貴は千雨レインの有り得ない行動に思わず叫び、七夜はそ

れを必死に宥める。

そして、口を押え込み何とか志貴を黙らせていると・・・・・・・・・・レインと目があつた。

「瞬きを繰り返している・・・・・・・・・・？」

意図的に瞬きを繰り返し何かを伝えようとしていることに気が付いた七夜は注意深く観察し・・・・・・・・・・理解した。

（出番ってことが・・・・・・・・・・！！）

準備していた即席の電流発生装置の下へ駆け寄り何時でも飛び出せるような位置へと志貴の学ランの襟を掴んで素早く移動する。

「いいか、志貴・・・・・・・・・・吾が出たら5秒から10秒間を開けて出てこい」

「・・・・・・・・ッ！！もう俺達の出番なのか？」

「ああ・・・・・・・・・・千雨が合図してきた。『次の私の攻撃で怯んだところをやれ』ってな」

それはつまり千雨^{レイン}に攻撃の意思があるという事であり、別にふざけて飛んでいるわけではないという事を意味していた。

「舐めるなアアアアアアアアアアアア小娘があああああああああああああああ
あああああああああ！！！！！！！」

怒りに燃え、ただレインを倒し殺すことしか頭にないネロは一直線に駆ける。その巨体からは予想もつかない速さで距離をあと数メートルまで縮め接近すると地面を蹴って飛び上がった。

背には満月が映る。

「これで、終わりだあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああつ！！！！！！！！！！」

渾身の怒りの一撃がレインに迫った時、当のレインはというと・・・

「あれは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・赤い竜？」

レインの背後には同じように拳を突き出す動作をしている謎の赤い竜が出現していた。

「・・・・・・・・妄想具現化ではなく精霊具現化か。そりゃ姉さんも秘密にしたがるわよね」

そう、千雨がレインと化している時に妄想具現化が使えないのはレインが表に出ているからではなくて、本当は精霊具現化に変化しているからであつたのだ。

彼女がアルトルージュと親しいのもただ単に依頼人と仕事人という関係ではなく、お互いの秘密の共有者であるからなのだとアルクエイドは理解した。

「となると、千雨はいずれ――」

抑止の守護者に成り果てる運命にあるのだろう。アラヤでもなくガイアでもない第三の抑止力ともいえる存在として。

「……………世界は本当に何を考えているのかしらね、千雨？」

その時彼女は自分の敵となるのか味方になるのか不安でならないアルクエイドはその瞳に千雨を映し、そつと溜息をついた。

s i d e o u t

七夜 side

ネロ・カオスが千雨の召喚（？）したと思われる何かに吹き飛ばされ大木に叩きつけられたのを見た時、吾はチャンスだと思い茂みから駆け出した。

両手には電流を大量に流し込めるように創り上げた即席の小太刀に電線を繋げたような武器が握られている。

「吾に与えられた役目はただ一つ……志貴にお前の止めを刺させることだけだ!!」

先程ネロがとった行動と同じく満月を背にして飛び掛かる七夜。

柄を強く握りしめ勢いよく首と胸に突き刺すと直ちに志貴に向けて叫ぶ。

「志貴、今だ!!」

「ああっ!!」

お互いに呼応し志貴は麻痺して動けないネロの下へと急ぐが……

-
-
-
-
-

そのとき、不思議な事が起こった！！

[illegible]

「うわっ！？」

「何なんだ!？」

耳を劈くような叫び声と共にネ口の胸からは幾つモノ腕や顔が腰からは恐竜を思わせる長い尾が現れ、顔はもはや人間の物とは思えないほど肥大し異形の怪物と化していたのだ。

すぐさま志貴は後退するがまだ近くにいた七夜は取り残されてしま
う。

「逃げろ、七夜!!」

「言われなくても——ッ!？」

急いで駆け出し後退しようとした時、ネロは長い尾を体に回転を付
けることにより加速させ七夜に迫った。

「——くそ、やられる!!」

仮に避けられたとしても衝撃波によるダメージは免れないだろうと
思いつつ防御姿勢を取ると、尾にぶつかる前に七夜に横から何かが
ぶつかり……。代わりに直撃を喰らった。

「——ぐはっ!!」

「千雨ちゃん!？」

割り込んできたのは千雨^{レイン}。

彼女も防御は一応とったものの、勢いを殺し切れずに吹き飛ばされ地面へと叩きつけられてしまった。

助けられた七夜はすぐに駆け寄る。

「大丈夫か、千雨!？」

「……………くっ、何とかな」

口ではそう言っているが明らかに左腕を押さえている。……………おそらく、受け身を取った時にぶつけてしまいダメージを負ったのだろう。

487

「……………まさか暴走状態になった拳句、進化するとは思わなかった」

「麻痺させるどころの問題じゃないよな、本当に……………」

むしろ逆効果の結果になってしまい罪悪感が生まれる。

「思えば、以前思考盗撮した奴の思考は何処か変だった……………」

何かが渦巻いてるみたいな感覚がしていたし……」

「そうか……吾はそれを電気ショックで目覚めさせてしまったということか……くそっ!!」

拳を地面に叩きつけ余計な被害を出してしまったことを七夜は悔いていると、不意に肩を優しく叩かれた。

振り向けばそこには恐ろしい変身を遂げたネ口を見つめる志貴がいた。

「……志貴、どうしたんだ？」

「……」

返事をせず、暫くずっと何もしゃべらないままネ口を志貴は見続け、そしてポツリと落ち着いた声で言った。

「——俺が後は何とかするから、二人は任せたぞ七夜」

返事も聞かずにネ口の下へとナイフ片手に駆けだす志貴。

そんな彼を止めるために慌てて七夜が声をかける。

「ち、ちよつと待て志貴っ！！無茶だぞ、一人で戦おうなんて！！」

「けど、ここで下手に長期戦に持ち込んだらこっちが持たない！！千雨ちゃんにこれ以上無理をさせないためにも俺が決着をつけるべきなんだ！！」

伸びてきた蛇のような触手を時に切り裂き時に避けながら、確実に志貴は接近していく。

その動きは蜘蛛のように素早く、自分自身の動きによく似ていた。

「志貴、お前・・・動きが・・・」

ダイオラマ球に入っていて戦っていた時より遥かにキレが増している、完璧とは言わないが明らかに七夜暗殺術が上達していた。・・・
・・・それも自身のレベルの近くまで。

s i d e o u t

志貴 side

「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！……！」

体が熱い。

眼が疼く。

とにかく痛い。

そんな状態で俺は只管に駆け抜け「線」を切っていく。

全てはアルクエイドを、七夜を、千雨ちゃんを守るために……
……ネロ・カオスを殺すために……！！！！！！

また、同時に飛来した志貴達にとって最近見慣れた大剣が今度は右腕を切断しそのまま大木へ突き刺さった。

「今のは…………千雨ちゃんか!」

「まあね…………援護ぐらいはしないと罰が当たりそうだから」

七夜に支えられながら右腕を使いディソードを投擲した千雨ちゃんは治療を施してもまだ痛むらしい左腕を押さえながら、微笑んで答えた。

「くつ……………」

「おいおい無理をするな、千雨」

「別にしてない……………」

「……………してるじゃないか」

密かに杖を使って自力で立とうとしている所のどこが無理をしていないというんだと七夜は呆れる。

「大丈夫だ……志貴は強い、心配する必要はないと思うぞ」

「でも……」

「元は同じ存在の吾が言うのだから少しは信じてみたらどうだ、千雨？」

そう言われて志貴に千雨は視線を向けると彼は……ネ口と距離を取り大きく口を開き叫ぶ。

「聴こえているか、ネロ・カオス!!」

[.....] ! ! ! ! !

「お前は人間を……生物を残酷に殺し過ぎた!!」

[.....] ! ! ! ! !

「ましては『自分自身』すら大事にしない大馬鹿野郎だ！！！！！」

今夜までにどれだけの人間やネロの中の獣の命が失われただろうか？

魂の叫びと共に志貴は走る。

走る、走る、走る！！！！

彼はネロ・カオスの死の『点』を突くことだけを考え、風を斬り、地を蹴り上げ、雷の如き速さで、ただ一つの刃と化する。

「
視えた！！！！」

蒼き死神の瞳が目標の終焉の点ともいえる『死』を捕捉する。

………そしてネロが大きく口を開いた時、彼は静かに刃を胸の中央へと刺し込んだ。

顔に薄っすらと切り傷を負いながら。

「・・・・・・・・・・なるほど、な」

理性を取り戻し、元の人型へと戻ったネロは邂逅一番にそう言った。

「お前が・・・・・・・・お前が、私の『死』なのだ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ああ、そうだ」

お互い、これ以上敵意を剥き出しにする必要もないと感じたのか殺気が消失した。

「・・・・・・・・・・あれだけの事をしておきながら私が言うのも
なんだが——礼を言う」

「・・・・・・・・・・そうか」

ネロとてあのまま陽に照らされて朽ち果てるのは嫌だったのだろう。
だから、せめて人型に戻り理性を持ったまま死を迎えたいと願っていたのだ。

灰と化していくネロを見つめる志貴の隣に七夜に支えられた千雨が並び立つ。

「ネロ・カオス．．．．いや、フォアプロ・ロイワン」

「何だ．．．．女よ」

「．．．．もし来世があるのなら．．．．今度は死徒ではなくまともな人間として会えるといいわね」

「!？．．．．フツ、それも．．．．良いかも．．．
しれないな」

最後の言葉を紡ぐとネロは瞳を閉じて．．．．空へと消えていった。

—— 暫くの間千雨はその場を動かず、ネロが消えていった満月の夜の星空を見つめ続けていた。

月下邂逅 - 終

く少しだけ救いのある物語く

「先生ー！！本当にありがとうございましたー！！」

「・・・・・・・・・・ああ、また事故に遭わせないようにしっかりと見ておくのだぞ？」

白衣姿の長身の男が事故で負傷した犬の治療を終え、元気な女の子の飼い主に返すと女の子は元気よく駆け出し親と共に車へと乗りこんだ。

「・・・・・・・・・・ふつ、また一つ命を守れたな」

車が遠ざかっていくのを目にしながら男はポツリとつぶやきを漏らす。

「さてと・・・・・・・・・・コーヒーでも飲んで一息入れるでしょうか」

肩を鳴らしながら待機室へと足を運ぶとそこには――淹れ立てのコーヒーが置かれていた。

「ん？誰かが気をきかせてくれたのだろうか？」

何はともあれ、せっかく美味しそうな香りがしているのだから飲まないの訳にはいけないと思いカップを手にし、コーヒーを口に入れる。

「む・・・・・・・・・・美味しいな」

砂糖もミルクも入れずストレートで飲むのが好きな彼にとってそのコーヒーは絶品であった。

そして、ふとテーブルに置かれていた小さな花柄のメモ用紙を見つめる。そこには・・・・・・・・・・女性の字でこう書かれていた。

『混沌は調和へく祝福のコーヒーをあなたにく by Ms・thousandrain』

「これは……………」

内容の意味が分からなかったが、何処か謎めいた懐かしさを感じる。
それは不思議と頬が緩んでしまうほどだった。

「……………やれやれ、まさか生物学者から獣医師に転生すると

はね
」

本当に探すのに苦労したわ、と愚痴をこぼす白髪の美女が病院の外に杖に跨って存在していた。

「ま、幸せそうにしているのならそれでいいわ」

軽く欠伸をすると美女は病院から遠ざかっていく。

「・・・・・・・・早く帰って私も私の仕事に戻るとしましょうか」

灰色のオーロラが彼女の背後に出現すると彼女を優しく包み込み・・・・・・・・彼女をその場から消し去った。

——雲一つない大空を残して。

少しだけ救いのある物語 E N D

月下邂逅 - 終（後書き）

やっと、外伝に入れるで！！

でも、明日はバイトで遅い！！

書き始めは木曜になるぜ！！

構想はできてるから、大丈夫だ、問題ない。

誠に申し訳ございませんでした。（前書き）

読者の事を第一に考えることを改めて理解しました。

誠に申し訳ございませんでした。

この小説をご覧の皆様、紅雷です。

このたびは一つご報告がありますのでここに書かせていただきます。

感想中に仮面ライダーネタは胸焼けするからやめてくれ、せめて外伝でやってくれ、早く本編を進めてくれという意見が多数送られてきましたのでこのたびは思考した結果、本編と外伝として分けさせていただくことになりました。

本編とリンクさせるつもりではありますが、本編では大幅に仮面ライダーネタは控える予定です。ただし、とある場面では外伝の設定が必要になるところがございますのでそこところはご理解いただけますと幸いです。

・・・さて、ここで申し上げるのは読者には関係ない事なのですが先日、私の所在をほのめかし「これ以上外伝を進めやがったら殺すぞ」的な内容のメールが送られてきました。もちろん嚴重に対処したつもりですが、また同じようなことが再発しないと限らないので読者の意見を参考にしたという形で今回は外伝として別に書きます。

私とて人の子ですから命は惜しいのです。
それをどうか読者のは理解していただけると嬉しいです。

では、次回から外伝をよろしく願います。

<http://ncode.syosetu.com/n0823w/>

また、本編にしましては千雨の麻帆良帰還（ロア編は別連載予定）から始まります。

紅雷。

誠に申し訳ございませんでした。（後書き）

次回予告

「麻帆良よ、私は帰ってきたあああああああー!」

「イギリス行っただんなかったの!？」

「吸血鬼狩りじゃと・・・？」

「来たな、蒼崎!」

予想以上にカオス、シリアス、ギャグが続きます。

・・・ライダー？イスカンダル王の事ですか？

蒼剣帰還・壱（前書き）

朝からじっくり考案を練り直して書きました。

評価を改めていただきありがとうございます。

それでは本編をお楽しみください。

蒼剣帰還 - 壺

季節は秋。10月に入り少し肌寒さを感じるようになってとチラホラと厚着をする人を見かけるようになった。

それに夏まではあんなに緑が茂っていたというのにもう辺りは枯れた落ち葉で一杯だ。

景色が移りゆくのは早いなとその上を歩く黒い毛皮のコートと帽子を纏った少女は思う。

トランクを引きずりながら鼻歌を歌う彼女の先には少しの間・・・約1ヶ月間も地を踏むことがなかった学園がそびえ立っていた。

「——麻帆良学園、か」

一度は決別した学園に何の因縁か舞い戻り、様々な事件を経てまた彼女はここを帰る場所としている。

・・・彼女の名前は蒼崎千雨。

人形師・蒼崎橙子の養子にして宝石爺の秘蔵っ子の、吸血鬼の知り合いを数多く持つ『ミス・サウザンドレイン』と呼ばれる魔術師である。

そんな彼女が三咲町での激戦を終え、この日麻帆良に帰

「麻帆良よ、私は……」

帰って来たああああああああああああああああああああ

千雨side

いかん、いかん・・・久しぶり過ぎて思わず叫んでしまったじゃないか。私はア○ベル・ガトーかつつの・・・

「でもまあ・・・三咲町の空気より此処の空気の方がやっぱり落ち着くな」

あつちは毎日ピリピリしていたようなものだし、地道な工作活動が凄く面倒だった。

ネロを倒した後の事後処理に付け加え、気絶した志貴さんの遠野家への運搬、アルトルージュ姫と宝石爺への中間報告、相次ぐ吸血鬼事件の火消し処理、アルクエイド姫の護衛チーム再編成、志貴さんの強化訓練、七夜の服のコーディネート、そしてシエルさんバーニング。いや、言いにくいから、「シエルバーニング」でいいや。

ロアの件でコツコツと私が調べていたというのにシエルさんが短気なもんだから遠野家に特攻して書斎に侵入するわ、当主である志貴さんの妹に燃やされるわで本ーーーーっ当に苦労した。駆けつけた時にはゾンビみたいに起き上がって当主の秋葉さんをギョツとさせていたもんだから割り込んでディソード構えて止めたけど、それでも何かしようとするもんだからとりあえず凍らせて連れて帰った。それはもう「シエルバーニング」からの「シエルフリージング」だね。

秋葉さんに私も燃やされそうになったけれどコントロール可能になったマクスウエル力で適当に翻弄したら見逃してくれた（お礼にシオン印の反転にも効果があるとされる秘薬のサンプル投げてあげた）から、本当に良かった。ああ、ちなみに帰ったらもちろんシエルさんへ説教しまくったよ。

その後、ロアが姿を現し始めたもんで死者狩りに忙しくなったけれど突如として援護に来てくれたシロウさんがお得意の投影魔術で大量発生していた死者を掃討してくれた。何故来てくれたのか理由を聞いたら「ここで殺人貴に死なれるのは私のプライドが許さんのでな」と答えた。・・・平行世界で好敵手^{ライバル}だったのか、二人は？

そして志貴さんとアルクエイド姫のデートを^{ストーリーキング}監視し終わると空気も読めずにロア参上。黒鍵が荒振りロアを強襲するも紅赤朱のボディとロアの実力もあってかそんな簡単に倒されはしなかった。私も攻撃には加わったが転生阻止の為に下手に殺すわけにはいかなかったんでね、手加減せざる負えなかったんだよ。

そこで妹は最強という常識を引っさげて秋葉さんが登場し仲間に加わったわけですよ。ついでにロアを追っ払ってくれましたからそれはもう感謝感謝。

まあ、一体何がどうなっただけやがるみたいなことを言われたのでお互い情報交換したわけだけど・・・まさか志貴さんが七夜の人間で気まぐれで引き取られたとは思わなかったらしい。しかし、それでも志貴さんを兄と慕う秋葉さん。その姿を見て私は徹底的にロア潰しの作戦に打って出ることにした。

俗にいう集団暴行^{リンチ}である。

聞こえは悪いかもしれないが気にしないでほしい。だってそれ以外に表現する言葉が見つからないんだもの。

ダブル七夜体術にチート投影魔術、マクスウェルモード、完全武装シエル、さっちゃんアーム、バーニング秋葉・・・これだけの面子^{メンツ}がいるんだぜ？勝てる気がしないだろ？

ああ、そうそう。弓塚さつきさんは途中ロアに噛まれてしまったんだけど、すぐさまシオン製薬の薬を打ったから大丈夫だよ。ニンニクは暫く控えた方がいいけどね。

何はともあれ見事、志貴さんがロアの死の「点」ぶっ刺しシエルさんが第七聖典（概念：転生批判）ぶちかましてくれたおかげで丸く収まり、後日アルクエイド姫の切断された髪の毛の返還・魔術協会への報告を行い三咲町での任務を終えることができた。

「・・・ふわあゝ。・・・うつん、眠いなあ」

時刻は23時00分。

既に寮の門限は過ぎてしまっているため入れるに入れない状況だ。別に野宿してもよいのだが多分クラスメイトの忍者とエンカウントしてしまうからな、下手なトラブルはできるだけ避けたい。

「仕方ない、困ったときの――」

エヴァンジェリンだ。

彼女なら交渉次第では泊めてくれるだろう。というか、絶対泊めてくれる。

だって、お土産買ってこいと言うもんだから買ってあるんだもん。泊めてくれなかったら渡さないといえば無理矢理にでも泊めてくれるはずだ。

そう期待を胸に寄せてすっかり暗くなった夜の桜通りを歩いていると………麻帆良に居る以上ある意味お馴染みの音が聞こえてきた。

――そう、銃から弾丸が発射される音と剣が風を斬る音だ。

「この気配からすると………西の方向か」

……ああ、懐かしい気配がしきりに動いているのを感じる。それ

も1ヶ月も会っていないから余計に強く。

『で、どうするつもりなの?』

「決まってるだろ、ただいまの挨拶をしに行くんだよ!」

レインの問いに当たり前のようになると千雨はディソードを握りしめ戦いが繰り広げられている西の広場へと駆けて行った。

s i d e o u t

刹那 s i d e

「龍宮、右を頼む!!」

「わかった、抜かるなよ刹那!!」

一般生徒たちが寝静まる頃、定期的に行なわれる襲撃の掃討作業を私達はいつものようにこなす。

「――神鳴流奥儀・・・斬空閃ざんくうせん・式式改!!」

刀身から気が飛ばされ遠く離れた大型の式神へ向かう。

「ふん、そないな攻撃・・・受け慣れとるんや!!」

しかし、何度も召喚されて斬空閃の特徴を掴んでいたのか鬼の式神はその剛腕を一振りすると攻撃を簡単に掻き消してしまった。
刹那はその驚きの回避の仕方に対し・・・背を向け走り出した。

「なんや、逃げるんかいな嬢ちゃん?」

攻撃が無効化されたことでその場を離れようとした刹那に挑発する鬼。

だが、鬼はある事に気づいていなかった・・・それは・・・

「逃げる?・・・何を言っているんだ、貴様の始末は既に済んでいる。故に他の者達の下へ行こうとしただけだ」

『何を言うつるんや・・・・嬢ちゃんの攻撃は——』

効いていない、そう言おうとした鬼の両腕はボトリと静かに地に落ちた。

「効いていたぞ?・・・それに最初に言っただけだ、『式式改』だとな!」

その叫びと共に鬼の胸は大きく斬り裂かれた。

・・・ここで説明しておく、実は斬空閃には幾つか種類バリエーションが存在する。

気の威力を弱めた気絶させたい程度の時に効果的な弱斬空閃じゃくざんくうせん、確実に相手を倒すために気の威力を強めた斬空閃・改さんくうせん・かいなどが神鳴流では一般的に知られている。一部の人間にはこの技をさらに改良しようとする者がいるそうだが、それよりも他の技を使った方がいいと大体の人間は最終的に考えるそうだ。

そんな中、刹那は千雨の麻帆良内での特異性を考慮して神鳴流の技

の改良に乗り出した。理由は神鳴流の技は強力的で覚えれば使い勝手がいいが、多くの者が学んでいる以上対抗策を取られてしまう可能性が高い。特に技の特性を理解している人間と単純に神鳴流を学んだ刹那が戦えば確実に倒されてしまうだろう。

だからこそ、刹那は考えた。バリエーションを持たせ、木乃香の護衛を全うするための改良計画を。

暇さえあれば参考になりそうな剣術について千雨と共に考え実行に移した。ただ特訓するだけではなく人間の思考回路や心理構造、3Dを用いた自身の動き方の分析などとも中学生がするようなことではないことまで彼女は手を出した。（そもそも超という規格外の中学生がいる時点で麻帆良はおかしいのだが）

結果、自身の癖に関しては追々改善していくとして、全般的に改良を加えることが出来るであろう「キシユア・ゼルレッチ（別名：多重次元屈折現象）」・・・日本でいえば佐々木小次郎が使い手だったとされる「秘剣・燕返し」を刹那は取り入れることにした。（なお、この技を再現するために宝石爺や佐々木小次郎の経験を憑依させることが可能なエミヤシロウの下を千雨は奔走することになったことを刹那は知らない）

「それにしても、千雨さんか・・・・・・・・」

かれこれもう1ヶ月も会っていない。

本人いわくイギリスに私用を兼ねて留学するらしいのだが、その後全く連絡を寄越してくれる様子はなかった。

クラスメイトとして修行仲間としてせめて1回ぐらい連絡をくれても良いのではないのだろうか、忙しいのは承知の上だけれど。

「・・・・・・・・悪かったな連絡ぐらい寄越さなくてよ」

ん？今何か聞こえたような・・・・・・・・いや、気のせいだ。最近襲撃の回数が増えてきているから疲れが溜まってきているんだろう。そのせいで今はイギリスにいるはずの千雨さんの声の幻聴なんかが聞こえたりするんだ、うん・・・・・・・・そうに違いない。

さーて、残り僅かとなってきたようだし龍宮をさっさと手伝って布団に入るとしよう。そしたら・・・・・・・・

「近衛といちやいちやする夢でも見るんだろ、桜咲？」

「それはええなあ・・・・・・・・このちゃんといちやいちや・・・・・・・・・・・・・
・・って、うわあああああああああああああああああああ
ああ！？」

やせいの　ちさめさんが　あらわれた！

「人をポケ。ン呼ばわりとは……いつからそんなに偉くなつたんだ、桜咲……改め、百合咲？」

瞳を怪しく金色に光らせた千雨さんがワナワナと体を震わせながら私を睨みつけ剣を構える。

……な、何故ここに千雨さんがいるんだ！？さっきのは幻聴じゃないや、落ち着け刹那……こういう時は落ち着いて素数を数えるんだ。

「2、3、5、7、11、13、17、19、23、29、31、37、41、43、47、……」

「って、先に言わないで下さいよ!？」

他にどうやって落ち着けというんですか！？教えてくださいよ!!

「おー龍宮ー、おひさー!!元気にしてたか？」

「な……蒼崎、何故此処に……」

聞いてますか!？

side out

千雨side

――場所は変わり、深夜の学園長室。

麻帆良に帰還を果たした千雨は適当に片手だけで残りの式神達を葬り去ると、学園長室にいますというエヴァンジェリンに会いに行った。

「・・・はい、どもども夜分遅く失礼〜！！（バーン！）」

「・・・千雨？」

「・・・蒼崎君？」

空気を読むことなど関係なしに突入すると二人はこんな時間だといふのにチェスをしていた。呑気だな、まったく・・・。

「お、お前……どうして此処に……?」

「そんなに皆、私がいるのが不思議なのかよ。……まあいいや、ほれ約束のお土産だ」

懐から分厚い封筒を取り出しエヴァに放り投げる。といっても、ふんわりと優しくだ。

「……………これが土産だと?」

「ああ。番外位と第10位が完全に抜けちゃったからな、埋め合わせが欲しいんだとよ」

封筒の中身は魔道元帥ゼルレッチ、血と契約の支配者アルトルージュ、真祖の吸血姫アルクエイド、財界の魔王ヴァン、白翼公トラフイムなど有力な吸血鬼からのサインが入った死徒27祖入りの正式証明書だ。

わざわざサインを責任とって貰いに行くのは流石に疲れました、はい。

「……………内容はよくわかったが、これだけか?」

「……………」

「言ったよな・・・イギリスに留学しに行くなら美味しい紅茶のセツトぐらい買って来てくれと・・・・・・・・!!」

うわ・・・本気で怒ってらっしゃる、どうしよう？

「いや、その〴〵実はな・・・・・・・・イギリスにいたのは1日半だけだったんだ」

「・・・は？い、1日半？」

「蒼崎君・・・お主、留学に行っていたんじゃないのかの？」

すみません、嘘ついてました・・・誰にも話すなって言われたもんで。

そして説明すること20分、ようやく真祖の姫君関連の任務についていて三咲町を訪れていたことを理解させると忘れるわけがなかったお土産をプレゼントし落ち着かせた。

「よもや、666の獣を内包する吸血鬼に遺伝子を情報化し無限に転生する吸血鬼の討伐とはのう・・・・・・・・」

「アレは激戦中の激戦でしたよ。絶対にここの魔法使いの連中じゃアレは倒せませんね」

精々対抗できるとすればエヴァンジェリン完全解放Verぐらいじやないかな？カティアも多分できるだろうけど……………

千雨の頭には現在ネギの義妹として生活している訳ありの少女が思い浮かぶ。あの子私の顔を見るとなんかビクビクするんだよね……（平行世界の私はなんかやらかしたのか？）

それはさておき、ネギの修行先はどうなる事やら。（予想では麻帆良かアリアドネーに何らかの形で行くのだと思われるけど）

カティアは先生として平行世界の麻帆良学園男子中等部に行ったんだっけな。その分だと同じ展開になりそうだが……………

「……………ふわぁ〜」

今は物凄く眠いからその事は後で考えよう。

本日は襲撃日だった為此のまま桜咲達と共に寮に戻ることもできたが、明日になった時にクラスメイトの連中が朝っぱらから五月蠅く反応するのはマジでご勘弁願いたいので結局エヴァンジェリン邸に予定通り泊まることになった。

蒼剣帰還 - 壱（後書き）

次回予告。

「通りすがりの殺人メイドだ」

「そんな、どや顔で言われても・・・」

「人間はサルから類人猿に進化する過程で（以下略）」

「何だこれは・・・」

現在ネガティブな作者は無理やりテンションを上げてみた。その結果がこれだよ！！

蒼剣帰還・弐（前書き）

劇場版を見てきましたが・・・ネギが最後以外まるで戦っていない。

しかも不自然カットが目立った。

でも、話といえはあrikanaというストーリーだった。

シーンの使いまわしは勘弁してほしいものだけだね。

で、ここで一言。

魔法世界編完全版をOVAで作ってよ！！このままじゃあのチラシが詐欺になってしまうぞ！！

蒼剣帰還 - 貳

・・・あ、すつごくねみい。こりや完全に時差ボケだな。

眼が覚めるとそこは三咲町・イギリス・ドイツ・そのともろもろの国を訪問してしばらく見なかった1ヶ月程ぶりの天井（ただし、エヴァンジェリンの家のソファアの上から見ただけ）。できれば自分の部屋で目覚めたかったがそれは自分で割り切ったのだから良ししよう。

「・・・にしても」

重たい頭をゆつくりと起き上がらせながら千雨は思い返す。

彼女の脳裏に蘇るのは忘れられない激戦の数々と、マクスウェルと完全同調し戦った記憶だ。

何もかもがクリアに見えたあの光景が頭を離れずしつかりと記録されているため、思い出すのはとても容易だ。だが、その反面決して忘れられないという難点が若干彼女を苦しめていた。

「魂を侵されているのとは違うのはわかってるけど・・・・・・どうもな」

完全同調した結果か、元の黒目は常時金色へと変化し魔眼は少しばかり成長してしまった。

別に瞳の色は変わろうが視力に問題はないのでいいが、生物の死の「線」が以前より良く見えてしまうと見た相手の死期の度合いというモノが自然とわかってしまう。

それが必ずしも絶対的なものではないことは十分承知なのだがどうも素直に受け入れられない、だから千雨は今になってなお困り果てていた。

「・・・受け入れていい現実と、受け入れざる負えない現実か」

「・・・夏の日に出会った」———「との出会いで私は自分が辿る運命というものを少し理解してしまった。

彼女は全てを語ったわけではないが、私の将来のあるべき姿をパズルのピースのように所々ばら撒いていた。そこから予想するに私はマクスウェルに言われた通り抑止力と成り果て、そして■■■■■

■■■となるのだろう。

それがいつ何時なのかは定かではない、成人後なのか成人前なのかすらわからない。

「はは・・・・・・ネギだって覚悟もってんだ、私が持たなくてどうする」

自分と同じように運命に突き動かされ生きているアイツはどんなに辛い現実も受け入れて生きようと既に覚悟している。なのに私は何ここでウジウジ言ってるんだか・・・。。。

「長谷川千雨」から「蒼崎千雨」となった時にもうまっとうに生きれないっていう覚悟はしていたんじゃないのかよ、私は！！
式さんと幹也さんに助けられ、蒼崎^{かあさん}橙子に出会った時の自分を思い返せてんだ、まったく……。

涙を流しそうになるのを必死にこらえる千雨。

彼女はわかっていて、ここで泣いてしまったら自分はもう負けてしまつと。ただ流されるままに虚ろな瞳で運命を受け入れてしまつとしたがって彼女は覚悟をもって運命と戦っていかなければならない、もう逃げ場などこの世には存在などしないのだから。

——そして千雨はこの日思った。

今ある日常を噛みしめて、忘れないよう生きていこうと……。

「——と、朝っぱらから決意はしたものの・・・はあ」

「どうかしたんですか、千雨さん？」

2・A復帰を無事に果たした千雨はお昼休みの時間、刹那と共に歩いていた。

お互い近況報告をし合って修行の成果を軽く確認するとまだ十分ある残り時間を昼食に費やすことにしたのだ。それでもって今はその昼食の舞台となる学生食堂への道を歩んでいるわけなのだが、千雨はふと何者かの気配を察し階段で立ち止まった。

「・・・『いいや、何でもない』と言いたところだけど、危険人物さえ一般人化してしまう麻帆良クオリティに呆れてしまっただけだよ」

「・・・？それは一体――」

どういう意味でしょうか、と刹那が訪ねようとした時二人に戦慄が走った。

「――ッ！？」

「・・・・・・」

刹那は咄嗟に刀なしで徒手空拳の構えをとるが、対する千雨は呆れ顔を晒しながら無言の沈黙を行っていた。

気付けば辺りには誰もいない。お昼だから屋上や教室、外の広場、そして彼女たちがこれから行こうとした学食にいたので誰もいないのは当然だと思いかもしれないがそれでもせめて廊下を走る生徒の姿ぐらいあってもいいものである。

刹那が一人警戒態勢をとるそんな中で千雨が言っていた問題の「危険人物」が上の方から現れた。

> i 2 9 8 6 1 — 3 0 0 6 <

「――やあ、千雨久しぶり。お仕事はもう済んだかい？」

階段の上から千雨を見下ろすのは薄っすらと笑みを浮かべたウルスラの生徒だった。

彼女は髪を掻き上げながら千雨の返答を待つ。

「——ああ、お陰様でな。・・・そっちこそどうなんだ、女子高生活は？」

「まあそこそ楽しんでるよ。ここはここで三咲町より面白いからね」

「それはどうも、気に入ってもらえて何よりだ・・・・・・・・・・で、わざわざ人払いまでして何のようなんだ？」

吹き抜ける風にこの1ヶ月で大分伸びた長髪が揺らされる。

金色の瞳は受け止め方によっては威圧するが如く見え、しっかりと目の前のウルスラ生を映し出していた。

「あ、あ、あの千雨さん？この先輩の方は・・・・？」

膠着状態が続くことに耐えられなかったのか刹那が口を挿み千雨に質問する。

「ん？・・・ああ、こいつは七夜。七夜志希ななやしき・・・つい最近ウルスラに転入してきた高校1年だ」

「『七夜』……ですか？変わった姓ですね……」

両儀と同じぐらい珍しいからな。多分、同姓同名は志貴さんぐらい
しかないだろう。

「よく言われるよ、皆からね」

「……むしろ言わない奴なんていないんじゃないのか？」

「そうでもないさ、少なくとも今日の朝に出会って戦った八極拳の
使い手は言わなかった」

「……ああ〜」

それ、絶対に古菲だ。というかそもそも戦ったのかよ、おい。

「多少手加減はしたとはいえ、あそこまでの使い手は見たことがな
いな。実に良い経験をさせてもらったよ」

「ちょ、麻帆良四天王が一人に手加減で………わからんでも
ないけど、お前は何様のつもりだ」

「通りすがりの殺人メイドだ！……覚えておくのはあなたの勝
手です」

「どや顔でゆーな、そして最後のセリフは意味わからん」

そもそも殺人メイド宣言はやめい。

「殺人・・・メイド・・・？」

ほらー、桜咲が反応しちゃったじゃないか。

「あー、うーんとだな、実は『七夜』はこっち側の人間で暗殺者の中でもプロに行く退魔一族でな、こいつはその当主の一応娘」

「そして訳あって千雨の従者^{メイド}をやっているんだ」

「端折り過ぎだ、まあいいけど・・・ちなみに訳って言っても生活を支援しているっただけだからな？」

支援の理由は当然カット。飯の時間だっていうのにこれ以上のドロドロは必要ありません！！

——まあ、そんなこんなで私達3人は食堂へと向かいあんまり人目につかない席を確保するとそれぞれ昼食を用意した。

私は手頃な日替わり定食（本日は生姜焼きだったようだ）を、桜咲は和食ランチBセット（別名：鯖の味噌煮定食）を、七夜は購買部で買ったと思われるあんぱん・カレーパン・トマトサンドを席に持ち寄り席に座った。

「・・・七夜、例の体術使って争奪戦に参加するのはどうかと思うぞ？」

「れふにいふいらろ（別にいいだろ）、ふあふあいももらふいらんふあから（早い者勝ちなんだから）」

あんぱんを食しながら返事をする七夜。・・・言っていることが理解できる私は異常か？

「でもさ、正直あの動きで争奪戦はないだろう。本当に閃鞘・八穿は何時からパン争奪戦の十八番になったんだ」

本来は姿を消し、一定範囲内にいる相手の真上に飛び上がって斬りつける技の筈なのに何故に一定範囲内のパンの真上に飛び上がって掻っ攫う技なっているんだろう。

何があった七夜。ついでに何で我先にあんぱんを狙った。

「仕方がないだろう。（この体になってから）最近、異常に糖分・甘いモノを食べたいと意識して行動するようになったんだからな」

「まあ、それは女の欲望としては間違っていないけど・・・もう少しお前は恥じらいを持てよ」

「・・・？何の事だ？」

「飛び上がっていた時にスカートの中が見えそうになってた。パンに夢中になるのは良いがそこら辺にちゃんと気を配りなさいな」

この麻帆良学園には一応男子がいるんだからな、下手すればお前みたいな変則的美少女すら狙ってくるぞ。（返り討ちに遭うだろうけどね）

「安心しろ、下はスパッツだ。だから心置きなくパンは手に入れられる」

「なるほど桜咲と同類か・・・よかったな桜咲、念願のスパッツフェチ仲間が増えたぞ」

「・・・何でそこで私に振るんですか。それにフェチと言われるまで私はスパッツに特に思い入れはありませんよ」

「・・・と、いいながらもタンスの中には替えのスパッツがわんさかあるという件。どう思う七夜？」

「「素晴らしい!!」」

ですってよ、最近は黒スト（黒いストッキング）にも興味を持ち始めた桜咲さん。よかったですね、高評価が貰えまして。

しかし、エクセレント評価をせっかくもらった肝心の桜咲は頭上にはマークを浮かべたまましきりに首を捻っていた。

「——すみません、今聞き覚えのある声は何故か一緒に聞こえたんですが……気のせいですか？」

「ふえ？何の事だ？」

「気のせいじゃないのかい？」

「いえ、聞こえましたって……誰かが『素晴らしい』ってハモってましたって……」

向こうの柱の方から……と彼女が続け顔を向けるとそこには――

妙にニヤついた近衛木乃香がこちらから見て左半身を柱の陰に隠し桜咲をじっと見つめていた。

「オジョーザマ！？ナズエミテルンデイス！！（訳：お嬢様何故見てるんです！？）」

おい、滑舌悪すぎて別の種族の言葉になってるぞ桜咲！

ま、当然の如くあの近衛は偽物・・・つまり私が妄想具現化で創りだした妄想の存在だ。肝心の本物は現在、明日菜の奴と楽しく屋上で食事中ですのでご注意を。

「面白いな、この子・・・」

「だろ？こいつは弄ってて全く飽きがこないんだ。もっと絡めばやみつきになるぞ」

一人桜咲がパニくってる間に私は味噌汁を静かに飲み干した。あー久しぶりの味噌汁はうめえな♪

そして今日の放課後。

「・・・どうも、ご無沙汰」

さっそく七夜が木陰から静かに現れて辛味噌じゃなかった・・・絡みに来た。

「むう・・・何なんですか貴女は・・・」

「可愛くすねんな、桜咲」

頬をぶくーと膨らませるのは完全に卑怯だぞ。鼻血が思わず出かかったじゃないか……

でも今回ばかりは雰囲気的に桜咲の奴、ちょっとキレかかっているようだ。

「そもそも、初めて会ったばかりだというのにしつこ過ぎませんか？」

「……それはまあ、考えてみればそうだな」

「これから千雨さんとの予定があるので残念ですが七夜先輩、貴女と絡んでる時間はないのです。……失礼します」

早々に切り上げて私の腕を強引に掴むと彼女はすたすたと立ち去ろうとする。

つられて私も半ば引き摺られるように移動を開始してしまうと、そこで七夜が先程とは違い鋭い口調で言葉を投げかけた。

「待てよ。こっちは本気で似た者同士仲良くなならないかって思ってるんだ、話しぐらい聞いてけよ」

……おっと、桜咲以上に七夜はキレていたようだ。

スパツフェチ云々はさておき、かなり本気で七夜は桜咲と話をしたいというのがその内容はおそらく……

「話しだと・・・？」

「ああ、そうだ。吾^{おれ}達は今はどうかは知らないが幼少期にろくな人生を送っていないだろ、烏族と人間のハーフ君？」

「・・・・・・・・ツ！？・・・・貴様、それを何時何処で知った!？」

夕風を瞬時に構え戦闘態勢へと移行する刹那。

千雨は慌ててそれを制し、七夜との会話に口を挿んだ。

「『浄眼』使うのも程々にしろ、七夜。説明に時間を取られるこっちの立場になってみろってんだ」

「ごめんよ、千雨・・・でも、いくら技術的に彼女が強くなるうが精神が不味いんじゃないと思ってね」

やっぱり、そつち（・・・・）関連の話か。

言いたいことはわからんでもないが、唐突過ぎて普通ついて行けないぞ？

ついでに桜咲につてタブーの言葉をいきなりぶつけんな。

少し冷静さを取り戻したのか刹那は千雨に疑問をぶつける。

「・・・・・・・・千雨さん、その『浄眼』というのは？」

「はあ・・・結局説明担当かよ。・・・あのな『浄眼』っていうのは簡単に言えば【視えないものを視る力】なんだ」

例えて言うのなら靈感が強い人が幽霊を見るのと同じだ。

ただしそのレベルは常人とはかけ離れており、霞のように視えるのではなくまるで実体があるのかと錯覚するほど繊細に鮮やかに映る。

ちなみに志貴さんはこれが8年前に死に近づいたことで発展し、直死の魔眼を手に入れたという話になっている。

「だからいくら背中それの翼を隠そうが七夜には視えてしまっんだよ・・・
・・・無論、状況は違うが私にもな」

「・・・まさか、最初から知ってたんですか？」

「すまないな、知っていた。・・・今だから言うが私の眼は七夜の眼と龍宮の眼すら遙かに凌ぐ魔眼なんだ。それ故にお前の翼も存在あるのが理解できるがその反面背負うモノがデカ過ぎる」

「背負うって・・・何をです？」

怪訝そうな顔で私を見る桜咲に精神的試練を積みさせるために私は敢えてこの際、魔眼の真実を語った。
金色の瞳が青白い瞳へと変化する。

「『この世のすべての死』だよ」

「なっ・・・・・・・・！？」

重すぎる内容だというのに私は自然と笑みを浮かべていた。・・・
自分を嘲り笑うようにして。

「以前言つたよな、長谷川千雨はもう死んだって・・・・・・・・。それが全ての終わりであり始まりだったんだ」

麻帆良での孤独な生活が「私」を『私』に変えてしまった。

もし幼かった頃の私が麻帆良の異常を知らなかったのならば、他の一般生徒のように無知であれば何もかもが変わっていた。
でも、過ぎてしまった時は二度と返ってこない。戻ってこない。

「^{おれ}吾だつてそうだ。幼少の頃から殺すためだけの技術を教え込まれ
ひっそりと生きてきた。その果てにあつたのは自分以外の一族が滅
ぼされた光景だよ」

宿敵だからとか、因縁だからとか下らない理由で母も父も幼馴染も
従兄弟も皆殺されていた。

気が付けば気まぐれで養子にされ偽りの記憶を与えられ生きていた。
そんな翻弄され続けてきた中で彼はやっと救いを手に入れた。

そして刹那は刹那で辛い人生だった。

白い翼も髪も下らない掟だかしきたりで禁忌とされ監禁され、拳句の果てには苛められ親を殺された。

助けられた命に対する恩義の為に努力していたというのに大切な友人を危機にさらしてしまった。

以来、自分から大切なモノに近づくのを止めた。

三者に共通するのは忘れることが出来ぬ辛い過去があったということ。

千雨は二人とは違い、異常から逃げ孤独を選んだ末に救いを受けた。七夜は二人とは違い、自分を見失ってもなお抗い続け救いを受けた。刹那は二人とは違い、救いがあるのに拒み続けて強さを求め続けた。

「普通の人間とは違う以上、真つ当な人生を歩めないのは百も承知さ。けど、だからこそ求めてもいいだろう・・・自分が満たされる日常って奴を」

「確かにその通りだな。得てしまった力はもはや捨てられるものじゃないけど・・・求めた日々を実現させるために使ったっていいじゃないか」

「私は・・・このちゃんと・・・」

昔のように完全には戻れないのはわかってる。

それでもあの無力さを感じる前の輝かしい日々をもう一度手に入りたい。

すぐにとは流石に無理だろうけど、もしも実現可能ならば私は一歩前に進んでみてもいいかもしれない。

だから刹那は――二人が差し出し重ね合っていた手の上に手を置いた。

「まったくやれやれ、お前はやる事が唐突過ぎてフォローが大変だよホント……」

刹那と修行後、七夜の部屋に訪れた千雨はベットの上で寝転がりながらゲーム機を弄る彼女を背に語りかけていた。

「あれは千雨を信じてるからこそできる技だよ。でなきゃ、千雨の言葉すら振り切って戦闘に突入していただろうな」

戦闘狂からお前がここまで成長してくれるとは喜んでいいのか悲しんでいいのかわからないよ。

あてにされているのか押し付け役にされているのか、もう……

・

「次からはもつと私に配慮してほしいモノだよ。……とこ
ろで七夜」

「ん？何だ？」

「さっきから何のソフトやってんだ？」

BGMもボイスも聞こえてこないから何のゲームかさっぱりわからないんだが。

「……ああ、これ？ポケ。ンだけど？」

プレイ中の画面をこちらに向けるとそこには初代シリーズの赤いやつがプレイされていた。

「結構古いのじゃなか、金色とか銀色とかやんないのか？」

「いや、やりたいのは山々だけど吾^{おれ}つて初代すらやったことがないからさ。いきなり最新のは手が出せなくて……」

「ふーん。それで、どこまで進んでいるんだ？」

かつて最短プレイしたことのある私にかかれば攻略など実に簡単だ。聞きたい事があるならぜひ聞いて欲しい。

「今は・・・そうだな、俺のゼ。ガメがタ。シを倒したぐらいかな？」

「ほほう、まだ序盤か・・・・・・・・」

「『かえ。ほうしゃ』で」

「おい、待てよコラ」

覚えないよ！？ゼニ。メはかえん。うしやは！！
しかも水タイプ！！炎タイプの技なんて言語道断だ！！

「実はその前に糸を吐いたりしたこともあったな」

「虫か！？ゼニガ。は虫なのか！？」

「最初はしつぽをふったりするやつだったんだけど、色々弄っていたら糸吐いて火を噴いた」

「尻からフレイムかーーーーーー！！？」

尻尾をもがれた後、ゼ。ガメは糸を吐き何とか取り繕ったものの耐え切れず火を噴出することを選んだのか！！
なんという事だ、それは本当の意味で進化だ！！

「何でも攻略サイトの管理人が言うには『人間はサルから類人猿に進化する過程でその尻尾を失った。そしてその尻尾を失ったことによって二足歩行が可能になり、手を使うということを覚え文明が発

展した。つまり尻尾があるということは自ら『私は下等生物なのだ』
と言ったようなプラカードを掲げて歩き回っているようなものに相
当する。故に尻尾というのは邪魔、いらぬ、無駄なものなのだ。
だからこそ我々はこの不要物ともいえる尻尾を闇の手術・・・また
の名を裏技で切断することにより新たな技の可能性を生み出すべき
なのだ』と自信満々に語っていたな」

「・・・そいつは何処の学者だよ、おい」

正しい事も言っているみたいだけどなんかおかしい。

おかしいんだけど具体的に説明ができない。

徐々に説明担当というポジションに押さまりつつある私が説明でき
ないとは何ということだ！！くそおおおおおお！！！！

そんな実には下らないことに頭を千雨は悩ませていると懐のポケット
に入れた携帯が急にバイブレーションを開始した。

「おっ・・・メールか」

ここのところ特定の人物としか連絡を、しかも電話でとっていたか
ら久しぶりのメールはとても新鮮だ。

できれば最近連絡を取っていない人物がいいなと思いつつ、メール
内容を確認するべくボタンを押していくと本当に久しぶりの相手か
らのメールだった。

『久しぶりに良い作品が書けました。ご都合がよろしければ明日にお会いしたいのですがよろしいでしょうか？』

差出人はまだ橙子と家族になって少しほどしか経っていない頃に鮮花さんに連れられて会いに行った、元異能者の現小説家――

浅上藤乃だった。

蒼剣帰還・弐（後書き）

そーいや、原作で墓所の主はどこへ行ったんだろう？

アリカはナギみたいに乗っ取られているのかな？

それとも一緒に氷漬け？

次回はご要望にお応えしてふじのん登場予定。

原作設定を少し参考にして独自アフターを展開いたします。

蒼剣帰還 - 参 (前書き)

夏休みモードでだらけすぎたよ・・・

いい加減原作を始めたんだけど、かなり迷ってます。

思い切って始めるか、次でオリジナル回を終わらせるかどうかにしようか。

——時は遡ること4年前の、まだ夏だと軽く意識し始めた7月の頃の事だっただろうか。

彼女が生活を歩んでいる地域でその頃は殺人事件が起こっていた。事件の内容は包丁で人を刺したとか縄で首を絞めたとか、鈍器で殴り殺したとかという一見世界の何処かで結構起こっているようなありふれたモノではなく、手・足・頭部・腰部など様々な体の部分が不自然に『捻じ曲げられて』死亡しているという悲惨たる猟奇殺人事件であった。

最初の被害者は不良集団としか言いようがない連中の4人で当時の半年前から放置されていた地下バーにて手足を引き千切られていた女性の幾人かが彼らに性的暴行を加えられたことがあったらしく、警察はその線から調べを進めていった。

だが、その後が続いた事件では不良集団のメンバーと友人関係を持っていた程度の人間がまるでネジのように体中を捻じ曲げられて倉庫街にて惨殺されたことを期に事件は、思いもよらぬ方向へと進んでいくことになってしまった。

なんと、一連の事件とは何ら関係のない『高木彰一』という人物が交通事故を起こす以前に首を捻じ曲げられ殺されていたのだ。

やはり表向きこそ絞殺もしくは偶然起きてしまった接触事故として片づけられたが、裏では実は一般人の人知を超えた魔術や超能力の

戦いが行われていた。

つまり、本当の事件の真相はこうだ。

不良集団にその当時性的暴行を加えられていた礼園女学院に通う少女、浅上藤乃は父親から投与されていたアスピリン・インドメタシン・ステロイド等の薬品によって人工的に感覚をなくされていたために何度性的暴行を加えても何も感じなかった。

しかし、何のリアクションを見せない藤乃にいい加減痺れを切らしたのか一人が背中をバットで殴打したことで事態は急展開を迎える。なんと、背中を殴打したことで一時的に彼女の感覚が復活したのだ。

その事により、藤乃は今まで感じなかった痛みをそれもとびきりのもので感じ 憎い という感情を心に宿してしまった。

故にやつと手に入れた感覚が復讐の引き金となり、自分を刺した（実際には刺されていない）男達への復讐を行い始めその現場にいて唯一逃げおおせた湊啓太を執拗に狙うようになった。

少しずつ彼の周りの人間を殺していくことで追い詰めていくために・
・
・
・

まあ、結果的に彼女は一人の死神の少女に出会って倒され、自分に痛みを与えていた真の理由——慢性の虫垂炎（別称：盲腸炎）の事を知ると共に視力のほとんどを橋壊しの代償として失った。
ちなみに彼女自身が持っていた能力に関しては十分対策が取られ、現在（2002年）においてなお健在だという。

・・・さて、残る問題は浅上藤乃の今後の人生についてだ。

彼女の数少ない友人である黒桐鮮花は彼女のもっとも近くにいたというのにまったく異変に気が付いていなかった。

もし鮮花が性的暴行から彼女を守る事が出来たのなら、復讐に走る彼女を説得し殺人を早期に止めることができたのならと可能性が幾つも湧き上がる。

その事実は鮮花の心を大いに揺さぶると同時にある行動に移させることになった。それは――

> i 3 0 0 7 0 — 3 0 0 6 <

「藤乃・・・ごめんなさい、気付いてあげられなくて・・・」

懺悔だった。

それも病室で点滴をさしながらずっと暗い顔をしたままの彼女に向かったの。

「・・・私、友人失格だよね。藤乃がさ、知らないところで酷い目に遭わされていたのを僅かでも気づいていればこんな・・・手を血で汚しちゃうなんてことは絶対に避けられたと思うのに・・・」

「黒、桐さん・・・」

藤乃とて鮮花を巻き込みたくはなかった。

たとえ心さえ痛みを感じなかるうが大切な友人に迷惑をかけて事件に関わらせてしまうことで発生するであろう事態など容易に予想で

きた。

そう、彼女は鮮花に同じ目に遭わせたくなかったのだ。

橙子の弟子である鮮花からしたら不良集団など蚊を殺すように瞬殺なのだが、それを藤乃は知らない。

今回の事態は酷い言い方ではあるが、魔術師としての特性が強く影響した当然の結果なのかもしれない。

——そして、お互いのコミュニケーション不足が証明されてしまった結果なのかもしれない。

「でさ、兄さん達から話を聴いて思ったんだ。感覚がなくて生きている実感が無いのなら、生きている実感を少しでも持てるような事をしてあげればいいんじゃないかって」

「・・・えっ？」

生きたいという気持ちは式に倒された時から藤乃は強く抱き続けている。

しかし、具体的にどうやって生きていけばいいのかと考えるとうまく言葉に出すことができなかった。

父親からは勘当同然の扱いを受け化け物扱いされた今、彼女が考える出来そうな事とはせめて学院を卒業する程度の事だった。

・・・それさえ、可能かどうかもあるからないのだが。

「例えば・・・ほら、自分の思ったことを素直に書いてみるとかね？」

「・・・・・・・・」

「藤乃はもう少し周りに自分の意見を主張したほうがいいと思うの」

確かに鮮花にさえ誰も憎まず傷つけない娘だと思われていた彼女はあまり自己主張というモノを行うことがない。

いきなり声に出して主張はちよつとキツイかもと考えた鮮花は彼女の思いを文章化して周りに発信すべきだと思ったのだ。

「・・・・・・・・本を書くという形で間接的に自己主張を行なった方がいい、そういう事ですか？」

「まあ私は専門家じゃないからわかんないけど、そうね・・・小説でも書いてキャラクター越しに自分の思いを伝えてほしいじゃないかな？」

無論、藤乃がその気なら出来る限りの事は手伝うよ、と罪滅ぼしも兼ねて鮮花は語りかける。

とにかく藤乃をこのまま一人にしてはいけないという使命感と友人ではなく親友として彼女の傍に居ようという決意によって彼女は動いていた。

「・・・・・・・・私に・・・できるでしょうか？」

「やってみないと分からないものよ、藤乃。——それにこんな言葉を聞いたことある？」「辛いことを知っている人間のほうがそれだけ人に優しくできる」って」

昔、彼女が兄と偶然観たアニメの中にその言葉はあった。

辛い経験を持っている人間はその経験を他の誰かに味あわせたくないという心を強く持ち、思いやる行動をとるという。それが所謂『優しい』と周りから見られ、行動した本人も優しくされた人間も温かい心を持つようになるのだ。

「・・・きつと出来るよ、藤乃なら」

「私は・・・・・・」

藤乃は外に広がる蒼く透き通った空の方へ首を向け、日が暮れるまですっとそうしていた。

——数か月後、『星の聖女と教会で・・・』というタイトルが付けられた美しくも悲しい命の物語が刊行された。

著者の名前は『黒上^{くろかみ}ふじの』、年齢不詳の女性作家であり、その後数多くの「生と死」をテーマにした短編小説を世に出すことになったベストセラー作家である。

千雨 side

「・・・・・・・・くすんっ」

アーネンエルベにて一人の少女が泣いていた。

少女の格好は薄い灰色のフードパーカーに白いミニスカート、イタリアンレッドの大きなリボンといった服装であった。

「いつ読んでも・・・この話のラストは私にはキツイよぉ・・・」

前言撤回。アーネンエルベにて一人の少女が《本を読んで》泣いていた。

彼女の読んでいる本は待ち合わせている人物が初めて世に出した作品で、教会に住まう謎の女性と生きることになった少女との出会いから始まる命の輝きについての物語が書かれている。

では何故彼女は泣いているのかというと、この作品のラストで女性の正体が主人公が幼い頃に離れ離れになり死んだと聞かされていた姉だったことが判明し、最後の別れをしているシーンがあまりにも切ないからだ。

「・・・っ！！いけないいけない、これから藤乃さんと会うっていうのに何私は号泣してんだよ」

急いでハンカチを取り出し少女は・・・蒼崎千雨は頬に滴る涙の跡をふき取り、テーブルにできた水滴溜まりを痕跡残らずなくす。手鏡で顔の簡易チェックを済ますと注文して飲みかけだったレモンティーを一気に飲み干し気持ちを落ち着かせる。

「ふう・・・」

「・・・蒼崎さんすみません、待たせてしまいましたか？」

「うわあああああああああああああああ！？」

折角落ち着きかけたというのに何時の間にか目の前に藤乃さんが出現していた。唐突過ぎる展開に驚いて壁にへばりつくようにして後退する。

バ・・・バカな、私に気付かれずに接近したと！？

「だ、大丈夫ですか？」

「い、いえ・・・はい、だい・・・丈夫です」

思わず鳥肌が立ってしまったがそれは言わないことにしよう。
今日は彼女、『黒上ふじの』こと浅上藤乃さんの新作の試し読みをしに来たんだから失礼のないようにしないといけない。

「ならいいんですが・・・すみません、アイスコーヒーを一つお願いいただけませんか？」

『はい！！かしこまりましたあ！！！！』

アーネンエルベの気の強そうな方のウェイトレスが元気よく返事をする。

そして彼女の相棒が注文の準備をしている間に私達はさつさと用件を済ませることにした。

「では・・・これをどうぞ・・・・・・・・・・」

「はい、読ませていただきます・・・・・・・・・・」

手渡されたのは分厚い原稿用紙の束で直筆のものではなくプリントアウトされたもの。

その一枚一枚を丁寧になおかつダイジェストで読み進めていく。どうやら今回の作品は異世界冒険ファンタジーとして書かれているようだ。

「・・・今回はファンタジーモノなんですか」

「ええ・・・実はゲームのシナリオとして使われる予定もあるんです」

「それはまた凄いですね・・・・・・・・・・」

内容を簡単にまとめるところだ。

記憶を失いお花畑の中心で倒れていた白髪の少年をその領主の娘が保護し、幼馴染を巻き込んで記憶探しの冒険に出ることに。

途中までは子供達のありふれた冒険だったが、その終盤に謎の魔物に彼女らは襲われてしまう。

少年の犠牲と引き換えに命かながら生還した領主の娘は守る事が出

来なかった命に対する償いとして女騎士を目指すことを志した。

それから数年が経ち娘は卒業間近の騎士候補生として成長し、いつものように教官との訓練に明け暮れていたのだが、そこへ突如として父の死が知らされ故郷が危機にさらされていることが判明する。幼馴染と再会し領地の防衛を試みる主人公だったがあと一步の所でしくじってしまい、幼馴染もろとも命の危機に。

二人が諦めかけたその時、目の前にかつて自分達を守るために散った大切な少年が現れ危機を救った。(ただし、自分達の事すら覚えていなかった)

しかし安心したのは束の間、二度目の領地襲撃により本気で領地は危機的状况に陥ったかと思えば幼い頃の事件後に別の国の名家に養子に出された妹が軍隊を引き連れ敵群を次々となぎ倒し、終いには領地の管理者として居座り主人公を追い出してしまう。

卒業も諦め領主となったのにもかかわらず僅か数日で実の妹にやめさせられ途方に暮れる彼女は、心配になってついて行くことにした少年と共に頼れる友人が王女としている国へと急ぐ。

だが、それが世界を揺るがすほどの事態に発展し少年の運命と世界の未来を賭けた大きな戦いになるとはこの時彼女達は思いもなかった。

・・・という感じだ。

「テーマは『生きる意味を知るRPG』なんですが・・・どうですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・蒼崎さん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐすんっ」

「・・・え？」

藤乃は千雨から妙な声が聞こえたのを聞いた。
原稿をしきりに読み進める彼女の顔を確認すべく覗き込むと瞳に涙を大量に溜めこんで必死に泣くのを堪えていた。

「こ、これ・・・ゲームになったら絶対買いましゅ！」

「は、はぁ・・・気に入ってもらえて嬉しいですけど・・・・・・・・とりあえず涙をどうかしてください」

ハンカチを手渡されそうになるも先程まで泣いていたため自分のハンカチは持っている。

一度席を立ちお手洗いに千雨は向かうと熱心に顔を洗い、キレイさっぱり涙を消し去った。

「・・・むう、毎度思っけど肌の質感がおかしいよな」

常時スベスベのむにむにとかマジであり得んだろう。
しかも、肌の色とか少し前より色白になっているし・・・私はハー

フか何かか？

マクスウェルと完全同調した影響だろうけど、依然と自分とまるで顔つきが違うように見える。

「ま、考えても仕方がない事か……」

急いで手を拭くと化粧室のドアを開け、既に原稿をしまい終わっている藤乃の下へ小走りで戻る。

そして彼女が原稿とは別件で話したいと思っ……ている事についてこちらから切り出すことにした。

> i 3 0 0 7 1 — 3 0 0 6 <

『……それで、別の話とは？』

雰囲気からしてあまり口に出して言うべきことではないと警戒した千雨は、元々教えていたギガロマニアックスとしての能力を使って念話を藤乃と繋いだ。

すると、彼女は興味深い話を口に出し始めた。

『実は……この物語を書くにあたってモデルになった人がいるんです』

何でも、彼女が今回見せてくれた物語を書く前に偶然町の大通りの中で白髪の……人形みたいに生きている雰^{オーラ}囲気^{オーラ}があまり感じられない少年が何処かの学生服を着て立っていたという。

また、同時に彼女は魔術や超能力とは違った力を感じ取ったらしい。

『何と言ったらいいんでしょうか・・・心臓が動いて生きているという気が全くしないんです』

『それはまた・・・アインツベルンのホムンクルスならまだしも・・・』

アインツベルンはホムンクルスを創り出す技術が魔術師の中でもピカイチだ。

正直、母さんと手を組んだらある意味勝てる気がしないほどその技術は凄いのだ。

したがって、生気を感じられないようなホムンクルスなど彼らが創り出すはずはない。

『その後は下手に追跡しないで透視を使って追ったんですけど、残念ながら水の中に吸い込まれるように消えて逃げられてしまいました』

『（その方法は水を使ったゲート・・・？となるとそいつは・・・・・・）』

魔術師でも超能力者（異能者）でもない十中八九、魔法使いだろう。ただ問題は、その生気があまり感じられないという点についてだ。いくらMM元老院のバ力連中が非道な連中であっても、そんな不自然な存在を魔法世界ではなく旧世界であるこの世界に寄越すはずは

ない。

というか、人間の故郷である地球にわざわざそんな奴寄越すか？（ネギの村のケースは例外として）

『（ダメだ、情報が少な過ぎて仮定も結論も出せないや）・・・わかりました。その件に関してはこちらでちゃんと調べておきます』

『そうですか？・・・じゃあ、この件は蒼崎さんにお任せします』

『ええ。・・・では藤乃さんの方もお仕事頑張ってくださいね』

話すことも特になくなったので二人で席を立ち、会計へと向かう。手持ちが丁度やバイ具合にパンパンなので（主にロア討伐等の報酬のせい）、ここで少しでも減らすことにした。

・・・ま、それでも全然減りもしなかったんだけどね。

side out

??? side

千雨達が去って数十分後、一人の少年がアーネンエルベに来店した。

「……妙な気配があつた気がしたけど、気のせいかな？」

彼の容姿は白髪に一風変わった学生服であり、そして千雨のように濁った青色の瞳を持っていた。

ただ、決定的違うのは彼女のような世界の見方をその瞳では行っていないという点だ。つまりは魔眼ではないという事だ。

「……まあいい、この店もなかなか興味深いお店だ。コーヒーでも気晴らしに飲んでいくとしよう」

大のコーヒー党な彼はエスプレッソコーヒーを何も入れない形で注文し適当に空いていた席へと座る。

待っている間にチラリと店内を見回すと、今日に限って普通ではありえない滅多にいない客が数多くいた。

「ふい……やっぱりこの店は落ち着くわね……」

「藤ねえ・・・大の大人がそんな脱力しないの」

「いいじゃない、休みの日ぐらいは・・・・・・・・すみませーん、ミックスベリーパフェ二つ下さーい!」

「・・・凜、まさかとは思うけど二つも食べるの?」

「バカ!!アンの分も入って二つよ!!」

またある所では・・・・・・・・

「カレー!!おかわりです!!」

「・・・まだ食べるんですか、先輩?（・・・しょぼん）」

「兄さん・・・大丈夫です、お金なら私が何とかしますから、ね?」

さらにまたある所では・・・・・・・・

「何だこのキモ可愛い生き物は・・・・・・・・」

「にゃ!?!やめるにゃ!!そこはあちきのデリシャスシークレットゾーンで!!」

「リーズ、そんな生物は放っておいてこの超特盛ハンバーグをどうにかしてください。私達だけではもう無理があります」

「食べても食べてもの減らないよー!!!」

といった面々がそれぞれの時間を満喫(?)していた。

その光景を見て注文したエスプレッソを口にし少年フェイトは一人
呟く。

「……………混沌というモノはこういうモノの事を言うのか」

周りが騒がしすぎて彼が呟いた言葉はすぐに霞の如く消え失せた。

s i d e o u t

蒼剣帰還 - 参 (後書き)

何か新しい発想が湧き上がってくるんですけど、この小説にまるで関係ないし！！

次回、蒼剣帰還 - 終 (仮) は・・・

多分、ウェールズ組が頑張ってくれます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9731r/>

千の雨を越えて・・・

2011年9月1日19時55分発行